
人生オワタ＼(^o^) / からポケモンの世界に転生した

ナンテコッタイ!!! <(^o^)>

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生オワタ＼（＾ｏ＾）ノからポケモンの世界に転生した

【Nコード】

N2786Z

【作者名】

ナンテコツタイ！！！<（＾ｏ＾）>

【あらすじ】

神のミスで死んでしまったポケモン好きの高校生タクヤは、ジョウトに転生することになった。使用するポケモンは生前ゲームで使っていたポケモンで、家にはポケモンの転送装置まである。タクヤはジムを回ってリーグに出場しようしよと考える。

タイトル変更しました：旧名「ポケットモンスター ジョウトに転生！？」

Prologue 転生前

？「ん？ここはどこだ……？」

俺はタクヤ。ポケモンが好きな高校生だ。今俺は、真っ白な空間にいる。

タクヤ「はあ、何にもねえな……。って、誰アンタ！？」

そりゃ驚くよ、いきなり空から人が降ってきたんだから。

「私は神だ」

タクヤ「ダメだ、ただの痛い人だ」

痛神「誰が痛い人だ！！って、のところまで痛神ってされてるし！！だから、私は神だって言っているだろうが」

タクヤ「で、神（笑）が一体何のようですか？」

神（笑）「お前今、神の後に（笑）付けただろ。しかもまた 変 わってるし。まあいい。お前には転生してもらう」

俺は耳を疑った。は？俺死んだの？

神「そう。お前は私のミスで死んだのだ」フンス

タクヤ「ちったア悪びれるよ……」

神「だからせめてもの詫びとして、ポケモンの世界に転生してもらうことになった」

タクヤ「あ、ああ。で、向こうに付いた時の手持ちは？地方は？」

神「お前、生前にポケモンしてただろ。手持ちとかのポケモンは生前にゲームで使っていたポケモンを使ってもらう。ボックスの代わりとして、転生後のお前の家になるところにでも転送装置を置いて

おこつ。あと、ジョウト地方だ」
タクヤ「ありがとうございます」

実際に会えるのか、俺のポケモンたちに……

神「さて、ここでひとつだけ願いを叶えてやろう。何がいい？」
タクヤ「うーん……俺が願えばそのポケモンは個体値が6Vになるとか？」

神「いいだろう。では、良い転生ライフを。お前のバックの中に細かいことを書いた紙を入れておく」

タクヤ「はい、ありがとうございます。って、うお!？」

床に穴があいた。うわあ~~~~落ちる~~~~!!!!

タクヤ「どうしてこうなった~~~~~~~~!？」

To Be Continued...

Episode 1 目覚めると29番道路

タクヤ「ん、んん？」

俺は目を覚ました。あのクソ神後で殺しちやる。で、ここはどこだ……？

タクヤ「とりあえずバッグとかの確認をするか。っと、手持ちは」と

腰にはボールホルスターがついていて、6個のモンスターボールがあった。

タクヤ「えっと、こいつが色違いのテッカニンで、こいつがガブリアスカ。これはハッサムで、これがゲンガーで、これはカイリキーで、最後にマルマインか……」

これはすべて俺が生前使っていたポケモンだ。特にお気に入りした。テッカニン。ポケトレで手に入れた色違いの陽気なツチニンを育てた。

タクヤ「次はっと、これはポケギアで、こっちがトレーナーカードか……。どれどれ」

ポケギアのマップを確認すると、ここは29番道路というのが分かった。トレーナーカードを見ると、名前はタクヤで、6年前にトレーナーになったことになっている。しかしバッジは一個もなし。誰かと旅したいから言い訳を考えとかないといけない。

タクヤ「で、これが図鑑で、バッグはこれか」

まず、図鑑の動作確認としてテッカニンを調べてみた。

テッカニン 忍ポケモン。ツチニンの進化系。鳴き声を聴き続けると、頭痛が収まらなくなる。見えないほどの速さで動く。

と、説明が流れた。

使える技は、虫食い、ひっかく、固くなる、吸血、すなかけ、乱れひっかき、心の眼、影分身、連続切り、嫌な音、剣の舞、切り裂く、高速移動、バトンタッチ、シザークロス

ちよいちよい、いつまで続くんだよ、オイ。

エアカッター、スピードスター、さわぐ、糸を吐く。

結局、テッカニンが覚える技の全てを覚えていた。

タクヤ「オイオイ、覚えられる技が4つより多くても大丈夫だとしても、覚えられる技全部覚えているとは……」

次にバッグを探ると、いろいろな回復道具やドーピング用品の他に紙が一枚入っていた。

タクヤ「なんだこの紙？何か書いてあるな、なにになに？」

タクヤへ

お前の家はポケギアのマップで確認しておけ。

今の手持ちはそれだが、そのほかのポケモンはお前の家で放し飼いにされている。

お前の家になるところには、一人使用人を置いておいた。お前のいない間の家とポケモンの管理はその人に任せておけ。
では、良いトレーナーライフを。

神より

タクヤ「神からの手紙か……。ま、とりあえずマップ確認しながら家に行くか」

とりあえずワカバタウンを目指すタクヤであつた……

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 2 ワカバタウンと俺のポケモンたち

タクヤ「っと、俺の家になるのはここか……」

どーも、タクヤです。つい先ほど転生してきた者です。

俺は今、ポケギアを確認しながら自宅に向かっているところです。
今、自宅を見つけました。

タクヤ「まあ、入ってみるか……」

とりあえず門を開け、入ってみた。

？「おかえりなさいませ、タクヤ様」

タクヤ「うおっ！！」

玄関のドアを開けると、そこにはメイドが迎えていた。そのメイドは、金髪ロングな髪型で、スタイルもかなりいい。かなり美人だ。

タクヤ「ああ、アンタが例の神様が用意した使用人？」

メイド「はい。神様から手紙を預かっています。こちらを」

タクヤ「おお、サンキュー」

メイドからもらった、神様からの手紙を読んでみた。そこにはこんな内容が書かれていた。

タクヤへ

自宅についたらメイドが迎えていただろう？その娘がお前のメイドだ。

家の管理、お前の身の回りの世話は基本その娘がする。 お前が

いない間のポケモンの世話や、ポケモンの転送などもしてくれるぞ。では本題だ。その娘には基本何してもいいぞ。むしろ何もしない方が損というものだろう。抱いても咎めないし、ほかの娘に変えて欲しいのなら変えてやる。さしずめ性欲 理役として使ってもいいということだ。

では良い性

生活をな……

神より

タクヤ「ブッ！！！！」

俺は吹き出してしまった。

メイド「どうされました？」

タクヤ「あ、アンタはこの手紙の内容知ってるのか？」

メイド「ああ、欲処理のことですか？」

タクヤ「ブッ！！！！そ、そうだよ。アンタはこれでいいのか？」

メイド「タクヤ様のご命令とあらば」

タクヤ「そ、そうか……」

メイド「もしかして、今から抱きたいと仰りますか？」

タクヤ「ち、違う違う！ちょっと確認しただけだ」

メイド「そうですか。では、家の中を案内しましょう」

そう言われて、いろいろな部屋を見ていった。広すぎると思えるほどのリビングや、普通の家のリビングほどの広さもある俺の部屋。使用人の部屋などを見て回った。そして……

メイド「こちらから、ポケモンが放し飼いにされている庭に出ることが出来ます。セキュリティは万全で、おそらくロケット団如きが入ることはできないでしょう……」

タクヤ「そうか……。おっ、アイツはカイリユーか。こっちにはジ

ユカインもいるな……。湖の方にはギャラドスやスターミーもいるな……。また手持ち変更の時は頼むわ」

メイド「その説明ですが、まずは家の中に入りましょう」

俺たちは家の中に入り、リビングに来た。

メイド「このパソコンが、転送装置です」

タクヤ「へえ……」

そこにはさほど大きくはないが、そこまで小さいわけでもないデスクトップパソコンと、その横にUSBケーブルでつながれた、半球状のくぼみの付いた小さな機械があった。

メイドは半球状のくぼみの付いた機械を手にして言う。

メイド「まず、放し飼いにされているポケモンをボールに戻し、この機械にセットします」

そう言うのと、次に小さめのノートパソコンと、同じ半球状のくぼみの付いた小さな機械を取り出した。

メイド「次に、同じくそちらでもボールをセットして、最後にパソコンでこのように操作すると転送されるのです」

タクヤ「ちよつと待て、パソコンのバッテリーは？」

メイド「それは神様の力を使って、永久電池にしてあるので大丈夫です。では、こちらのパソコンと転送装置を渡しておきます」

タクヤ「それはそれでどうかと思うんだが……。ま、いいか。俺はとりあえず疲れたから寝るわ」

メイド「私と一緒に？」

タクヤ「『疲れたから』と言ったのが聞こえなかったか？お前と一緒に寝たら理性が持ちそうにないんだが……」

メイド「冗談です。いつごろ起こせばいいでしょうか？」

このメイド、意外と茶目っ気があるようだ。それにしてもいつごろ起こしてもらおうかな……

タクヤ「じゃあ、飯ができたらでいいよ。旅立つのは明日にする。ウツギ博士の研究所にも行きたいしな」

メイド「了解しました。ではおやすみなさい」

タクヤ「おう、おやすみ」

とりあえず俺は、自室に来了。

ベッドに寝転がり、さっきまでのことを振り返る。

タクヤ「ふう、何かいろいろありすぎたな。美人のメイドさんとい、性欲処 役といい、精神的に疲れたよ……。ま、明日は旅立ちか……」

俺は目を閉じる。するとすぐに意識は眠りに落ちていった。

To Be Continued...

Episode 3 ウツギ研究所と新人トレーナー

タクヤ「はあ。昨日はいろいろありすぎて疲れた……」

ども、タクヤっす。昨日は散々でした。メイドに起こされて飯を食いに行ったら、メイドに「あーん」されそうになったし、風呂には突入してくるし……

タクヤ「ま、今日から旅立ちだしな！強気で行くぜ」

そう。今日は旅立ちなのだ。

タクヤ「そういえばジョウトではポケモンを一匹出しておくのが流
行っているんだっけ？よし、出てこいハッサム」

ハッサム『ハッサム！！！』

タクヤ「ハッサム、今日は旅立ちだから強気で行くぞ。今日からよ
ろしくな」

ハッサム『サム、ハッサム！！』

メイド「おや？タクヤ様、もう行かれますか？」

タクヤ「ああ。家のことは頼んだぞ？行くぞハッサム！」

ハッサム『ハッサム！！！』

メイド「行つてらっしゃいませ、タクヤ様、ハッサム」

いよいよ旅立ちだ。新人トレーナーがいたら一緒に旅しようかな。
いつそ鍛えてやろうか……

そんなことを考えているうちに、ウツギ研究所についた。そうい
やウツギ博士って研究中は周りのことが見えなくなるんじゃないかっ
たっけ。

タクヤ「ごめんくださいーい！」

ハッサム『ハッサム、ハッサム！』

？「はい？どちら様？」

タクヤ「どうも、トレーナーのタクヤです。こっちはハッサム」

ハッサム『ハッサム！』

タクヤ「こちらの研究者さんですか？」

研究員「そうだよ。博士に用事？」

タクヤ「まあ、トレーナーとして会っておきたいので」

研究員「そうか。じゃあ入って」

タクヤ「失礼します」

研究所に入った俺たち。そこには新人用のポケモンである、チコリータ、ワニノコ、ヒノアラシと、それを見ているウツギ博士がいた。

タクヤ「ウツギ博士」

ウツギ「ん？誰だい君は？」

タクヤ「トレーナーのタクヤです。昨日ワカバタウンに引っ越してきましたんです」

そう。俺の出身は一応カントーのタマムシシティになっている。昨日引っ越してきたことになっているのだ。

ウツギ「そうか、君が引っ越してきたのか……。そのハッサムは君のかい？」

タクヤ「そうです。ほらハッサム、挨拶しろ」

ハッサム『サムサム、ハッサム！』

ウツギ「ははは、元気がいいね。で今日はどいった用事かい？」

タクヤ「まあ、引越しの挨拶と、トレーナーとしてウツギ博士に会っておきたかったです。まあ、今日旅立ちの新人はいないかな

？とか考えてたりしますけど」

ウツギ「新人かい？それなら二人居るよ。一人はブリーダーを目指してるのか」

タクヤ「マジすか？名前はなんですか？」

ウツギ「確か、コトネちゃんとカズナリ君だったかな」

マジか？あのシンオウに来てサトシたちと会ったアイツらか。

タクヤ「俺も会ってみたいです。いいスか？」

ウツギ「もちろんだよ。先輩として色々と教えてあげて欲しいし。

そういえば君はジムを回ってるのかい？」

タクヤ「俺は元々研究職に就きたかったからトレーナーになっただけですからジムは回ってないんです。でも最近実力を試したくなっただけ」

ウツギ「そうか。応援してるよ」

タクヤ「はい。ありがとうございます」

そんな話をしてる間にハッサムはチコリータたちと遊んでいた。

ハッサム『サム、ハッサムハッサム、サム』

チコリータ『チコ！』

ワニノコ『ワニワニワニ！』ヒノアラシ『ヒノー！』

ハッサム『サムー』

仲良くなってるし……

ウツギ「図鑑は持っているかい？」

タクヤ「自作のならこれを」

図鑑は自作ということにしてある。

ウツギ「自作！？君はすごいね！！」
タクヤ「いえいえ」

そんなことをしていると、新人トレーナーが来たようだ。

コトネ「こんにちは〜！」

マリル『リルル〜』

カズナリ「待つてよコトネ〜」

コトネ「カズナリ遅い！」

ウツギ「こんにちは、コトネちゃん、カズナリ君」

タクヤ「こんにちは」

コトネ「こんにちは〜。この人は？」

タクヤ「ああ、俺はタクヤ。昨日引っ越してきたトレーナーだよ」

カズナリ「はあはあ。こんにちは、ウツギ博士。こちらの人は？」

ウツギ「昨日引っ越してきたタクヤ君だよ」

タクヤ「で、そのチコリータたちと遊んでいるのが俺のポケモン

のハッサムだ。ほらハッサム、挨拶だ」

ハッサム『ハッサム！サムサム、ハッサムー！』

コトネ「私はコトネで、こっちがマリル。よろしくって事ね、ハッ

サム」

マリル『リルル〜』

カズナリ「僕はカズナリです。よろしくお願いします」

はあ、アニメに出てきたコトネとカズナリそのものだ。

ウツギ「じゃあ、新人トレーナー用のポケモンをあげるから、この三匹から選んでね」

タクヤ「みんな頼りになるぞ」

コトネ「うーん、どの子にしようかな……」

カズナリ「そうですね〜……」

かれこれ10分。悩んだ末に……

コトネ「じゃあ、私はチコリータにします。チコリータ、よろしく
って事ね」

カズナリ「じゃあ、僕はワニノコにします」

チコリータ「チッコー!!」

ワニノコ「ワニワニ!!」

ヒノアラシ「ヒノ〜……」

ハッサム「ハッサム、サム」

選ばれたチコリータとワニノコはとても喜んでいて、選ばれなく
て落ち込んだヒノアラシをハッサムが慰めていた。

タクヤ「そうだ。君たちの旅に俺もついてっていいか？」

カズナリ「タクヤさんが？」

コトネ「勿論、いいって事ね」

チコリータ「チコ!!」

ワニノコ「ワニー!!」

ハッサム「サムサムー!!!」

タクヤ「サンキュー!。ハッサムもいつらと仲がいいみたいだし、
喜んでるよ」

ということ、俺たちは旅立つ

ウツギ「ちょっと待ってくれるかい？」

タクヤ「何ですか？ウツギ博士」

ウツギ「タクヤ君にヒノアラシを貰って欲しいんだ」

タクヤ「いいんですか？」

ウツギ「君のハッサムと仲良くなったみたいだし、引き離すのもかわいそうだからね。君だったら悪いようにはしないだろうし」
タクヤ「ありがとうございます」

俺はバッグからパソコンと転送装置を出した。

ウツギ「何だいそれは？」

タクヤ「自作の転送システムで家と繋げるんです」

ウツギ「それも自作？すごいね君は」

コトネ「ほんとにすごいって事ね」

タクヤ「もしもし？」

メイド「タクヤ様、どうされました？」

タクヤ「早速手持ちの入れ替えだ。俺はそっちにカイリキーとマルマインを送る。そっちはバクフーンを送ってくれ」

メイド「わかりました」

手持ちの入れ替えが終わった。

タクヤ「よし改めて、ヒノアラシゲットだ！」

ハッサム『ハッサム！』

タクヤ「よし、出てこいバクフーン！」

バクフーン『バクッ！』

カズナリ「うわー、バクフーンだ！」

タクヤ「バクフーン、ヒノアラシの世話を頼む。ハッサムも協力してくれ」

バクフーン『バク！』

ハッサム『ハッサム！』

バクフーンは背中にヒノアラシを乗せた。

カズナリ「こう見ると親子みたいですね」

バクフーン『バクバク!』

ヒノアラシ『ヒノー』

タクヤ「もう仲良くなったみたいだな。じゃあ行くぞ、コトネ、カズナリ」

コトネ「うん!」

カズナリ「はい!」

ハッサム『ハッサム!』

ウツギ「じゃあ気を付けてね」

俺たちは研究所を後にした。

To Be Continued...

Episode 4 自己紹介 新人トレーナーコトネ&カズナリ

どうも、タクヤです。29番道路に来了います。

タクヤ「とりあえず改めて自己紹介しようか。まず俺から」

俺は一息置いて自己紹介を始める。

タクヤ「俺はタクヤ。年は16だ。トレーナー歴6年で今年が7年目だ。俺はもともと研究職のほう希望だったからジムは回っていないが、実力を試したいから今年からジムを回る。敬語とか、そういうのはいいからな」

カズナリ「よろしくお願いします」

コトネ「よろしくって事ね」

タクヤ「で、手持ちのポケモンは、ここにバクフーンとハッサム、さっき貰ったヒノアラシだろ。であと三体はこいつらだ！」

俺は3つのボールを投げた。するとポケモンが出てくる。

タクヤ「テッカニンとゲンガー、ガブリアスだ」

コトネ「すごい！テッカニンの色違い！？」

カズナリ「ガブリアスも強そうですね！」

テッカニン「テッカ！！」

ゲンガー「ガー！！」

ガブリアス「ガアブッ！」

次はコトネの番か……

コトネ「私はコトネ。こっちはマリル。で、さっき貰ったチコリー

タ。よろしくって事ね」

マリル『リルル〜』

ハッサム『ハッサム!』

チコリータ『チコー!』

カズナリ「僕はカズナリです。こっちがさっき貰ったワニノコ」

ワニノコ『ワニワニ!』

タクヤ（そっぴい、俺が願えばポケモンの個体値が6Vになるように神に能力もらったんだっけ）

俺はチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシを6Vにすべく願う。

タクヤ（チコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値を6Vにしろ!）

そう願った。すると、頭に念話が届いた。

神「早速6Vの願いか……」

タクヤ「神様!？」

神「願い、届いたぞ。今よりチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値は6Vだ」

タクヤ「サンキュー神様」

この念話の時間僅か0・01秒。

タクヤ「まあよろしくな、コトネ、カズナリ」

コトネ「うん」

カズナリ「はい」

タクヤ「そっぴい。コトネ、さっきもらったポケモンでバトルしようぜ」

コトネ「いいね、それ」

カズナリ「はい」

タクヤ「カズナリ、審判頼む」

カズナリ「わかりました」

俺はヒノアラシを呼び寄せ、肩に乗つけた。

カズナリ「これより、タマムシシティのタクヤ対ワカバタウンの
トネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体です」

タクヤ「行くぜえヒノアラシ！」

ヒノアラシ『ヒノーーー！！！！！！』

背中が燃え上がった。

タクヤ「まずは使える技の確認つと……」

ヒノアラシ 火鼠ポケモン。憶病で、いつも体を丸めている。襲わ
れると、背中を燃え上がらせて身を守る。

使える技は 体当たり、煙幕、睨みつける、火の粉、火炎車、丸く
なる、スピードスター、火炎放射、転がる

やはり使える技の全てを覚えていた。しかし音量を小さくしてい
るので、二人は気づいていない。

コトネ「行くわよチコリータ！」

チコリータ『チッコー！！』

チコリータとヒノアラシはにらみ合う。確かこいつは光の壁が使
えたな……。ソーラービームにも注意しないと。

タクヤ「先行はそっちでいいぜ」

カズナリ「先行はコトネから。では、始め！」

コトネ「先手必勝！チコリータ、葉っぱカッター！」

タクヤ「ヒノアラシ、ジャンプだ！」

チコリータ『チー、ッコー！！』

ヒノアラシ『ヒノーーーーー！』

チコリータは葉っぱを飛ばすが、ヒノアラシは飛び上がった。

タクヤ「ヒノアラシ、回転しながら煙幕撒布！」

ヒノアラシ『ヒノooooooooー！』

コトネ「チコリータ、気を付けて！」

チコリータ『チー』

タクヤ「残念、ヒノアラシは地面の下だ！ヒノアラシ、地面から顔を出して火の粉！！！！！」

ヒノアラシ『ヒノー！！！！！！』

コトネ「す、すごい。穴から顔を出して攻撃なんて……！」

タクヤ（貰ったばかりなのにスピードもパワーも段違い。おまけに技は全部使える。こういうことだ……？？）

考えていると、またもや念和が来た。

神「どうだ？お前のポケモンのパワーは」

タクヤ「どういうことだ？」

神「お前が手に入れた時点ではそう強くないが、6vにしたときにお前のポケモン限定で、全能力の努力値を252にすると、技をすべて覚えさせることをした」

タクヤ「だからか……」

この間僅か0.01（ry

タクヤ「さあ、これで終わりだ。丸くなるの後に転がる！」

ヒノアラシ『ヒノオー！』

チコリータ『チコー。チコオ……』

コトネ「ああ、チコリータ！」

カズナリ「チコリータ、戦闘不能。よって勝者、タマムシシティのタクヤ！」

タクヤ「よくやったぞヒノアラシ。バクフーン、お前も褒めてやれ」
バクフーン『バクバク！』

ヒノアラシ『ヒノオノノ』

コトネ「さすが先輩トレーナーって事ね。大丈夫、チコリータ？」

チコリータ『チコオ……』

タクヤ「なあ、コトネ、カズナリ」

コトネ「何？」

カズナリ「なんでしょう？」

タクヤ「戦った相手のポケモンによって、能力の伸びが変わることって、知ってるか？」

コトネ「エツ？」

カズナリ「本当ですか？」

とりあえず、こいつらに努力値の理論を教えるところ。

タクヤ「これは本当だ。例えば、攻撃を伸ばしたかったらオタチやワンリキーなんかを倒すといい。スピードならビリリダマやポツポなんかだ。特殊攻撃ならケーシヤやゴース。防御ならイシツブテやグライガーだ。特殊防御ならメノクラゲやバリヤードだ。また、性格によっても伸びやすい能力、伸びにくい能力がある。陽気なら、特殊攻撃は伸びにくいし、素早さが伸びやすいという具合だ。これは俺が研究した」

もちろん嘘だ。ただの現実世界の廃人知識だ。

タクヤ「見た感じワニノコは生意気で、チコリータは真面目、マリルはちゃんちゃって感じだろ？生意気な性格は特殊防御が伸びやすく、素早さが伸びにくい。真面目は平均的に伸びる。ちゃんちゃは攻撃が伸びやすく特殊防御が伸びにくいんだ」

ヒノアラシはさしずめ無邪気ってところだろう。この世界では物理技も使うからちょうど良く二刀流にすることにした。

タクヤ「だから、これを踏まえて修行すれば、絶対に強くなれる」

コトネ「ありがとう」

カズナリ「勉強になりました」

タクヤ「とにかく、傷ついたチコリータはボールに戻して、ヨシノシティのポケモンセンターを目指そうぜ」

コトネ「うん」

カズナリ「はい」

また俺はヒノアラシをバクフーンの背中にのせ、ハッサム、バクフーンと共に歩きだした。目指すはヨシノシティ！

To Be Continued...

Setup 1 タクヤ

〈名前〉

タクヤ

〈姿、服装〉

髪型のイメージは生徒会の一存の杉崎鍵

顔は基本的に糸目だが、ここぞというときには目を見開く

細身の黒いフレームのメガネをかけている

身長は178cmくらい

服装はグレーのズボンに空色のYシャツで、上にベージュのコ

トまたは黒のパーカーを着ている

また、偶にだがスーツを着ることがある

〈人物〉

年は16

基本的に仲間や友人、他人には優しいが、自分の気に入らない行動をする人や、敵には容赦をしない

怒ると物凄く怖い

ポケモン廃人

〈ポケモン〉

転生時の手持ちは色違いのテッカニン、ガブリアス、ゲンガー、ハッサム、カイリキー、マルマイン

自宅にはたくさんのポケモンがいる

Episode 5 ポケモンセンターとコトネの初ゲット

タクヤ「ここがヨシノシティか……」

ども、タクヤです。ただいまヨシノシティに来ております。

タクヤ「おい、コトネー、カズナリー！ポケモンセンター行くぞー！」

コトネ「待つてー！」

カズナリ「待つてくださーい！」

俺たちはポケモンセンターに来た。まずはポケモンの回復をしないと……

タクヤ「ほら、回復してもらうぞ。戻れハッサム、バクフーン、ヒノアラシ」

コトネ「あつ、私も」

カズナリ「僕も」

タクヤ「ジョーイさん、どのくらいで回復は終わりますか？」

ジョーイ「一時間くらいです。そういえば、ジョウトリーグの出場受付はしましたか？」

タクヤ「あつ、まだです。はい、トレーナーカードと図鑑。お願いします。コトネ、カズナリ、お前らはリーグ出場しないのか？」

コトネ「カズナリはしないけど私はするって事ね。図鑑とトレーナーカード、お願いします」

ジョーイ「はい、わかりました」

数分後、受付を終えたのか、ジョーイさんが戻ってくる。

ジョーイ「はい、終わりました。では、頑張つてジムバッチを8つ
全て集めてください」

タクヤ「はい。ありがとうございます」

コトネ「ありがとうございます」

タクヤ「ああ、カズナリはどうするんだ？」

カズナリ「僕はブリーダーを目指しているので」

タクヤ「そか」

うーん、これからどこで時間を潰そう……

タクヤ「そうだ！コトネ、カズナリ、西の海岸で釣りしようぜ」

コトネ「釣り？」

カズナリ「いいですね。しましうよ」

タクヤ「おう」

俺たちは海岸へ向かった。さて、何が釣れるか……

タクヤ「まず、コトネは女の子だからこの軽いやつにしておこうか」

コトネ「ありがとうって事ね」

タクヤ「カズナリも非力そうだからこれかな？」

カズナリ「非力って……」

タクヤ「で、俺はこれで。餌はこれを自由に使ってい」

と言って、神様からもらったバッグに入っていたポケモンフーズ
を差し出した。

タクヤ「じゃ、俺から行くぜ！」

俺が海に糸を垂らす。すると二人も順に垂らしていった。

十分後

暇だ。釣れない。

タクヤ「何も釣れねえ……」

そんなことをつぶやいた直後、コトネの釣竿がクイツ、と引っ張られた。これは大きいな。

コトネ「ちよっ、一人じゃ無理！」

タクヤ「ハア……。ちよっと貸してみる。フンッ」

俺がリールを巻いたり、引っ張ったりしても少し動くだけ。かなりでかいな……

コトネ「もう無理ー！」

タクヤ「諦めんな！う、うおおおおおおお！……！……！」

俺は雄叫びを上げながら思いっきり引き上げた。するとそこに食

いついていたのは……

キングラー『ゴキゴキ!』

超デカイキングラーだった。

コトネ「うわあ、キングラーだ!」

コトネは図鑑を取り出し検索した。

キングラー ハサミポケモン。クラブの進化系。あまりにも 大きくなりすぎた ハサミは 持ち上げるのが やつとで 狙いは 上手く 付けられない。

タクヤ「やつべえ、ポケモン預けてていねえじゃん!」

カズナリ「そうですよ、ポケモンセンターに預けてるんですよ!」

そう、ポケモンセンターに預けているためポケモンがいないのだ。

タクヤ「しょうがない、転送装置で。おい!」

メイド「なんでしょう」

タクヤ「緊急事態だ! マルマインを送れ!」

メイド「了解しました」

タクヤ「よっしゃあ! 来い、マルマイン!」

マルマイン『マルン! マルルルン!』

タクヤ「マルマイン、少しの間コトネの言うことを聞いてくれ!」

マルマイン『マルルン! マルン!』

タクヤ「コトネ、俺のマルマインを使え!」

コトネ「ありがとうって事ね! 技は!？」

タクヤ「多分お前の思いついた技はたいてい覚えてるぞ! 適当に弱

「らせろ！」

コトネ「わかった！マルマイン、10万ボルト！」

マルマイン ♪ マルルルルル！！！！ ♪

キングラー 「ゴキゴキ!!!」

キングラーは10万ボルトが直撃し、仰け反ったが体制を立て直してハサミを構えた。

タクヤ「来るぞ、クラブハンマーだ！ マルマインは素早いからよけられるはずだ」

コトネ「マルマイン！避けてから転がる！」

キングラー 「ゴキ!ゴキゴキッ!」

マルマイン ♪ マル! マルルル! ♪

キングラー
「ゴキッ！」

コトネ「マルマイン！電磁波！」

マルマイン ♪ マルルルルルルル ♪

キングラー
ゴ、ゴキ……ゴ……キ

タクヤ「今だ、コトネ！」

コトネ「行けっ、モンスターボール！」

キングラーはボールに収まり、スイッチが点滅し、揺れ始めた。一回。二回。三回。パチンツという音が鳴った。

コトネ「キングラー、ゲットって事ね！」

カズナリ「やったじゃないかコトネ！」

タクヤ「スゲエぞコトネ」

コトネ「そんなに褒められると照れるって事ね」

マルマイン、マル、マルルルン

タクヤ「コトネのサポート、サンキューなマルマイン」

マルマイン ⇨ マルルン ⇩

タクヤ「じゃあ戻れ、マルマイン」

俺はマルマインをボールに戻し、転送した。

タクヤ「そうだコトネ、キングラーを出してくれ」

コトネ「わかった。出てきてキングラー！」

キングラー『ゴキ……ゴ……キ』

タクヤ「やっぱ傷ついてるな。えっと、こうしてこうして」と

俺はキングラーの処置をした。

タクヤ「はい、終わり」

カズナリ「すごいですねー。ブリーダーとして見習わないと」

キングラー『ゴキッ！ゴキゴキッ』

タクヤ「そろそろポケモンセンターで治療も終わったんじゃないか？」

コトネ「そういえば忘れてた。行こうって事ね」

カズナリ「そうだね」

俺たちはまたポケモンセンターに向かっていった。

To Be Continued...

Episode 6 キングラーの初バトル!? 高速蟹の恐怖!!

タクヤ「ジョーイさん、回復終わりましたか?」

ジョーイ「はい、終わりましたよ。あら?そのキングラーさつき捕まえたの?」

コトネ「そういう事ね」

キングラー『ゴキゴキ』

カズナリ「手持ちがない状態で出てきたので大変でした」

タクヤ「だな」

ジョーイ「君たち、最初のジムのことなんだけど、ここから北北西に最初のジムの街、キキョウシティがあるわ」

タクヤ「マジすか?ありがとうございます」

ジョーイ「頑張ってくださいね?」

コトネ「頑張るって事ね、キングラー」

キングラー『ゴキッ!ゴキゴキッ!』

俺たちは最初のジムの街、キキョウシティへ向かうため、ポケモンセンターを後にした。

タクヤ「ここは30番道路だな……」

コトネ「キキョウシティはどのくらい先にあるの?」

カズナリ「この本によると、結構歩くみたいだよ」

タクヤ「ま、歩くのも旅の醍醐味だ」

?「ちよつといいかい?」

俺たちはキキョウシティを目指して歩いていると、誰かが話しかけてきた。

タクヤ「誰だい?」

シュウ「僕はシュウ。この中の誰か、僕と勝負してくれないか？」
タクヤ「勝負か……。コトネ、お前がしたらどうだ？」

コトネ「えっ、私！？別にいいけど……」

タクヤ「よし決まりだ。カズナリ、審判な」

カズナリ「はい」

シュウとコトネの勝負が決まり、ちょっとした広場に向かう俺達。

カズナリ「これより、コトネ対シュウのポケモンバトルを始めます！お互い使用ポケモンは一体！どちらかが先に戦闘不能になったとき、負けとします！なお、道具の使用は認められません！」

コトネ「じゃあ私から行くわ！行けっ、キングラー！」

キングラー『ゴキゴキッ！』

タクヤ「ほう、キングラーの初バトルか……。あ、そうだ6v6v」

俺はキングラーを6vにしると願った。これでキングラーは6vだ。

タクヤ「さて、シュウとやらは何を出してくるか……」

シュウ「相手はキングラーか……。それなら、行けっスピアー！」

スピアー『スピスピ！』

タクヤ「スピアーか……。こりゃあスピードが厄介だぞ……」

コトネ「スピアーか……」

コトネは図鑑を取り出し、スピアーと、キングラーの技を調べた。

スピアー 毒蜂ポケモン。コクーンの進化系。どんな相手でも強力な毒針で仕留めてしまう。偶に集団で襲ってくる。

キングラー 使える技は、高速移動、怪力、馬鹿力、剣の舞、クラ

ギョーンッ!!、と風切り音が鳴ったと思ったら、スピアーより遙か上にキングラーがいて、そのまま高速落下して怪力を決めた。

スピアー「スッ!? スピイイイイイイイイツッ!!!!!!!!!!」

シュウ「スピアー、かわせっ!かわすんだ」

シュウの叫びも虚しく、キングラーの高速かつ強力な一撃で勝負は決した。

タクヤ「……こんな戦い方も、あるんだな……」

そんな小さなタクヤの眩きが、虚空に消えた。

スピアー「……ス……スピ……スピア……」

カズナリ「スピアー、戦闘不能!よって勝者、コトネ!」

タクヤ「すごかったぞ、コトネ」

コトネ「やったあ!!!!」

シュウ「ありがとう、コトネ。君のキングラー、すごかったよ」

コトネ「ありがとう、シュウ」

シュウ「まさか、キングラーが飛翔^とぶとは思わなかったよ」

カズナリ「僕も、目を疑いました」

これ以来このバトルは、俺の記憶の中で、「高速蟹の恐怖」と名付けられた。

次に向かうはキキョウシティ!

To Be Continued...

Episode 7 キキョウシティ マダツボミの塔のオバケ騒動！！

タクヤ「ついたぞ、ここがキキョウシティだ」

ども、タクヤです。俺たちは今、やっとキキョウシティにつきました。

タクヤ「こんばんは、ジョーイさん」

そう、「こんばんは」ということからわかるように、ついたのは夜だった。

ジョーイ「はい、こんばんは」

コトネ「あれ？ジョーイさんさっきまでヨシノシティにいませんでしたか？」

ああ、アニメポケモンのあの設定知らないのか……

タクヤ「コトネ、カズナリ、これを見る」

コトネ「えっ!?!」

カズナリ「これって!?!」

俺が見せたのはガイドブックのようなものだ。つまり……

コトネ「カズナリ「みんな同じ顔!?!?!」」

タクヤ「そ。全国のジョーイさんは全員がそっくりで、しかも何らかの繋がりがあるんだ。ああ、ジュンサーさんも同じだぞ」

カズナリ「それは知りませんでした……」

コトネ「すごいわね」

タクヤ「ま、それはそうとして、ポケモンの回復お願いします。あと、部屋はあいてますか？」

ジョーイ「はい、お預かりします。部屋は二人部屋が一部屋だけならあいてますよ」

タクヤ「そつすか。じゃあそこつておきます」

ジョーイ「はい」

コトネ「二人部屋つて、一人どうするの？」

カズナリ「まさか野宿するんじゃない？」

タクヤ「バカ言え。俺はソファとかで寝るからベッド使え」

コトネ「それはタクヤに悪いよ」

カズナリ「そうですよ。タクヤさんがベッド使ってください」

タクヤ「人の好意は素直に受け取るもんだぞ？」

カズナリ「わかりました。ありがたく使わせてもらいます」

コトネ「ありがとう、タクヤ」ニコッ

タクヤ「お、おう。どういたしまして。じゃ、じゃあおやすみ／＼」

俺たちは眠りにつき、朝を迎えた。

タクヤ「よし！ジム行くぞ！」

コトネ「おー！」

カズナリ「頑張ってください！」

タクヤ「おう！」

俺たちはジムに行き、ジム戦の予約をしようとしたのだが……

受付「お二人はマダツボミの塔には行かれましたか？そこでお坊さんのお師匠様に勝たなければジム戦は認められません」

タクヤ（ヤベツ、忘れてた）

コトネ「そんな」

カズナリ「ま、まあ行けばいいじゃないか」

受付「それはそうと、こんな噂を知っていますか？」

タクヤ、コトネ、カズナリ「噂？」

受付「なんでもマダツボミの塔は夜に登ると、オバケが出るそうですよ」

カズナリ「お、オバケ……!?」

タクヤ「面白そうじゃん。どうせなら夜に行こうぜ!（どうせオバケの正体はゴースドだと思うし、こいつらのどちらかに捕まえさせたいし）」

カズナリ「え……!?」

コトネ「あゝ、カズナリ怖いんだ」

タクヤ「ま、いいや。さっさと夜まで時間潰そうぜ」

カズナリ「そ、そんな……」

俺たちは夜まで時間を潰し、マダツボミの塔に来た。

タクヤ「よし、来たぞマダツボミの塔!」

コトネ「じ、実際に見ると結構雰囲気あるって事ね……」

カズナリ「もうやめましょうよ」

タクヤ「よし、いくぞ……!」

俺は二人に有無を言わずマダツボミの塔に入った。

タクヤ「ま、一応ポケモン出しとくか。出てこいテッカニン!」

テッカニン『テッカ!』

コトネ「うう、マリル」

マリル『リルル……!』

カズナリ「……気絶中 俺が引つ張ってる

うーん、何もなし。

と、そのとき……

？『ゴースゴスゴスゴスwwww』

？『ゴースゴスゴスゴスwwww』

？『ゴースゴスゴスゴスwwww』

コトネ「！？ 笑い声が！」

タクヤ「やっぱこの声はアイツかよ」

カズナリ「アイツ？」

タクヤ「テツカニン、素早さで翻弄して当たり一体を辻斬りでかき回せ！」

テツカニン『テツカ！』

？『ゴ？ゴーーーーース！！ゴースゴス、ゴース！！！！』

タクヤ「さて、さつさと姿を見せろ、ゴース！」

コトネ「ゴース！？」

カズナリ「と、いうことは幽霊の正体って」

タクヤ「そういうことだ」

そこでコトネが図鑑を取り出した。

ゴース ガス状ポケモン。薄い ガスのような 体で 何処にでも
忍び込むが 風が 吹くと 吹き飛ばされる。

ゴースA 『ゴ……ゴース』

ゴースB 『ゴスゴス！』

ゴースC 『ゴース！』

タクヤ「さ、テツカニン、もう一回辻斬り！」

テツカニン『テツカ！テツカ！』

ゴースA 『ゴ……』

一体のゴースは完全に戦闘不能になってしまった。

ゴースB『ゴース！！！！！』
ゴースC『ゴスゴス、ゴース！！！！』
コトネ「ゴースと分かれれば怖くないって事ね。マリル、水鉄砲！」
マリル『リイ、ルウウウウウウ！！！！！！』
ゴースC『ゴ？ゴオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！』

さらにもう一体のゴースは水鉄砲で場外に吹っ飛ばされた。

カズナリ「ワニノコ、お願いします！」
ワニノコ『ワニワー！！！！』
カズナリ「噛み付く！」
ワニノコ『ワニっ！！』
ゴース『ゴ！？ゴ……ース』
カズナリ「今です！モンスターボール！」

カズナリはモンスターボールを投げた。スイッチ部分が点滅し、ボールが揺れる。数回揺れたところで、パチンッ！という音が鳴った。

カズナリ「ゴース、ゲットです！！」
ワニノコ『ワニワニワー！！！！』
タクヤ「良かったな、カズナリ」
コトネ「そうね」
タクヤ「じゃ、お坊さんのお師匠様に会いに行こうか」
カズナリ「はい！」
コトネ「うん！」
テツカニン『テツカ！！！！』
ワニノコ『ワニっ！！！！』
マリル『リルウ』

こうして、ゴースをゲットしたカズナリ。次に目指すは、マダツボミの塔の頂上。

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 8 マダツボミとお師匠様!!

タクヤ「ふう、やっと頂上か……」

コトネ「高いつて事ね……」

カズナリ「疲れた……」

マリル「リルル」

ここはマダツボミの塔の頂上。あれがお坊さんのお師匠様だろう。ここまでくるとは大変だった。ゴースが他にもいて、カズナリのゴースに説得を任せたり、お坊さんが立ちほだかったり。

タクヤ「貴方がここのお坊さんのお師匠様、ですね？」

師匠「いかにも。こんな夜更けに、お主らはわしに挑戦するのか？」

タクヤ「はい」

コトネ「私もです」

師匠「よからう。ではまずそちらの少年、バトルを始めようか」

タクヤ「はい！」

坊主「では、ただいまより、お師匠様対挑戦者のタクヤのバトルを始めます！お互い使用ポケモンは三体！先にすべてのポケモンを失ったものの負けとします！」

タクヤ「行くぜヒノアラシ！」

ヒノアラシ「ヒノヒノオ!!」

師匠「行きなさいマダツボミ！」

マダツボミ「マダツボ」

坊主「それでは、始め！」

師匠「こちらから行かせていただく。マダツボミ、ツルの鞭！」
マダツボミ「マダマダ」

ツルの鞭がヒノアラシに襲いかかる。

タクヤ「ヒノアラシ、バックスステップで交わしてジャンプ！そこからフィールド全体に火炎放射！」

ヒノアラシ『ヒノッ、ヒノッ、ヒノッ！ヒノッッッ！！！！ヒイイイ、ノオオオオオオオオ！！！！！！』

フィールド全体を炎が包む。そこに居たのは黒焦げになって倒れているマダツボミだった。

坊主「マダツボミ、戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」

タクヤ「よくやったぞヒノアラシ。もう一回頼む」

ヒノアラシ『ヒノッ』

師匠「ほう。お主なかなかやりおるな。ポケモンへの気遣いも忘れない。良いトレーナーじゃな。次は、ウツドン！行きなさい！」

ウツドン『ウツドオン……』

タクヤ「ありや、進化系か」

コトネ「あれがウツドン。さすがお師匠様。持ってるポケモンが違うつて事ね」

ウツドン ハエ取りポケモン。マダツボミの進化系。体内では強力な溶解液を精製しているが、それを分解する物質も精製しているので 自分は 溶けたり しない。

タクヤ「相手にとって不足なし！ヒノアラシ、穴を掘る！」

ヒノアラシ『ヒノヒノッ！！』

師匠「ウツドン、地面の揺れを感じるんじゃない」

ウツドン『ウツツドオン！！』

カタ、カタ、と地面が揺れる。だが……

師匠「ウツドン、そこじゃ！ソーラービーム！」

ウツドン『ウツドオオオオオオオオン！！！！』

タクヤ「フツ。ヒノアラシ、噴火！」

ヒノアラシ『ヒノオオオ！』

揺れたのはダミー。後ろではなくしたから噴火を繰り返した。これだけでウツドンは戦闘不能になる。

師匠「まさか、ここまでとは」

坊主「ウツドン、戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」

師匠「では、こちらを倒せるかな？来い、ヨルノズク！！！」

ヨルノズク『クルルルル！！！！』

カズナリ「ヨルノズクですか！？」

タクヤ「まだ行けるな、ヒノアラシ？」

ヒノアラシ『ヒノッ！』

そのとき、ヒノアラシの体が光に包まれた。

コトネ「あの光は！！」

カズナリ「進化ですか！？」

タクヤ「進化か……」

マグマラシ『マグッ！！』

師匠「お主のヒノアラシ、進化したか……。ヨルノズク、ゴッドバード！」

ヨルノズク『クルルルルル！！！！』

ヨルノズクの体が淡く発光する。

タクヤ「マグマラシ、スピードスター！」

マグマラシ『マグウ！！』

ヨルノズク『クルッ！？クルルルルル！』

マグマラシの星形の光線がヨルノズク目掛けて飛んでいく。だが、ヨルノズクもゴッドバードの溜めを終え、突進してくる。

師匠「ヨルノズク、ゴッドバードの起動を変えてマグマラシに攻撃しなさい！」

ヨルノズク『クルルル！クルッ、クルッポー！！！！』

マグマラシ『マグマッ！？マグウ、マグッ！』

マグマラシはモロにゴッドバードを受けてしまったが、無理やり軌道修正されたゴッドバードは威力もない。

タクヤ「マグマラシ、火炎放射でフィニッシュ！」

マグマラシ『マア、グウウウウウ！！！！』

ヨルノズク『クルッ！？クル……ルルル……ル……』

坊主「ヨルノズク、戦闘不能、マグマラシの勝ち！よって勝者、挑戦者タクヤ！！」

タクヤ「やったぜ！マグマラシ、ありがとう！！」

マグマラシ『マグマグッ』

コトネ「タクヤ、すごいよ！」

カズナリ「素晴らしいバトルでした！」

師匠「戻れ、ヨルノズク！ゆっくり休め。いやあ、お主タクヤと言ったな？素晴らしいバトルじゃった。良いトレーナーを目指せよ？」
タクヤ「はいっ！」

お師匠様に勝ったタクヤ。コトネも同じくバトルしたが、チコリータ、マリルが戦闘不能になりながらも、「高速蟹の恐怖」の再来で勝った。いよいよ明日はキキョウジムだ！！！！

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

Episode 9 初ジムバトル!! タクヤvsハヤト!!

タクヤ「すみません、ジム戦しに来ました」

ハヤトチャレンジャー「挑戦者は君かい？俺はジムリーダーのハヤト。鳥ポケモン使いさ」

タクヤ「ハヤトさん、ジム戦は俺だけじゃなくて、後ろのコトネもです」

コトネ「私もお願いします」

ハヤト「そうか。じゃあどちらから先にする？」

タクヤ「俺から行きましょう」

ハヤト「そうか。じゃあバトルフィールドの方に行こうか」

タクヤ「はい」

バトルフィールドに移動した俺たち。鳥ポケモンは飛べるから気を付けないとな。

コトネ「頑張ってたて事ね」

カズナリ「頑張ってください、タクヤさん」

タクヤ「おうよ」

ハヤト「それじゃあはじめようか」

いよいよ初のジムバトル。楽しみだな。

審判「これより、ジムリーダーのハヤト対挑戦者チャレンジャー、タマムシシティのタクヤのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体。道具の使用は認められません」

タクヤ「本気でいきますよ？」

ハヤト「ああ、本気で来い！」

タクヤ「行けっ、ハッサム！」

ハッサム『ハッサム！！』

ハヤト「君のポケモンはハッサムか。それなら、行け、ピジョット！」

ピジョット『ピジョー……ッッッ！……！』

コトネ「あれがピジョット……」

カズナリ「すごく強そうですね」

カズナリはポケモン図鑑を取り出し、検索した。

ピジョット 鳥ポケモン。ピジョンの進化系。発達した 胸の 筋肉は、軽く 翔いただけで 大風を 起こせるほどである。

審判「先行は挑戦者から。それでは、バトルスタート！！」
チャレンジャー

タクヤ「いくぜハッサム！！高速移動からの影分身！！」

ハッサム『ハッサム！ハッサムハッサム！！』

コトネ「タクヤのハッサム、すごく速い。それに分身の数もすごい」

カズナリ「さすがタクヤさんのポケモン。よく育てられているよ」

ピジョット『ピジョッ！？ピジョッ、ピジョッ！』

ハヤト「落ち着けピジョット！分身をすべて巻き込むように風おこし！！」

ピジョット『ピジョー……ッッッ！……！』

タクヤ「甘い！ハッサム、飛翔！！」

ハッサム『ハッサム！！！！！！』

ハッサムは高速で羽を翔かせ、分身全てが飛翔した。

タクヤ「行くぜ！バレットパンチからの燕返し！！！」

ハッサム『ハッサム！ハサハッサム！！』

ハヤト「速い！？ピジョット、よける！」

タクヤ「もう遅い！ハッサム！」

ハッサム『ハッサム！！ハッサ、ハッサ、ハッサム！！』

ハッサムはピジョットに突進し、弾丸のような連続パンチでピジョットを地上に打ち落とし、馬乗りになってハサミで数回斬撃を繰り返す。

ピジョット『ピジョッ！』

ハヤト「ピジョット、抜け出してフェザードダンスからの羽休め！」

ピジョット『ピジョピジョピジョッ！！ピジョ、ピジョ。』

タクヤ「回復技ですか……。しかもフェザードダンスで攻撃を下げるのはいい判断だと思う。だが、まだ甘い！ハッサム、剣の舞三連発！」

ハッサム『ハッサム、ハッサム、ハッサム！！！！』

ハッサムが力強く舞う。剣のような影が見えたかと思うと、ハッサムの攻撃が大きく上昇した。

ハヤト「こっちは勝負に出るぞ、ピジョット！ブレイブバード！！

！！」

ピジョット『ピジョーーーーーッッッッッ！！！！

！！！！！！！！』

ピジョットが羽を小さく折りたたみ、低空を高速で飛行していた。大きなダメージを自分が負うかわりに、相手にも大ダメージを与える技。それがブレイブバードである。

ハッサム「行け！ピジョット！！」

ピジョット『ピジョーーーーーッッッッ！！！！！！』

タクヤ「だったらこっちも勝負に出るぜ！ハッサム、ダブルアタック！！！！」

ハッサム『ハッサム！ハッサム！』

コトネ「いよいよ勝負に出るって事ね！」

カズナリ「頑張ってください、タクヤさん！」

タクヤ、ハヤト「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！……！」

ピジョット『ピジョー………ツツツツツツ！……！……！……！』

ハッサム『ハッサ、ハッサム！……！……！……！』

ズドオオオオオオオン！……！と大きな爆発が巻き起こる。爆風による気振りが消えたとき、そこに立っていたのは……

ピジョット『ピジョッ………』

ハッサム『ハッサ………』

なんと両方立っていた。どちらもキツそうだった。

ハヤト「次で決まりそうだね」

タクヤ「そうですね」

ハヤト「じゃあ行くぞピジョット、翼で打つ！」

タクヤ「ハッサム、バレットパンチ！」

ハッサム『ハッサムッ！……！』

ピジョット『ピジョッ！ ピ……ジョ………』

技を出そうと、ピジョットが構えたところで倒れてしまった。

審判「^{ジャ}ピジョット、戦闘不能。ハッサムの勝ち。よって勝者、^{チャレン}挑戦者タمامシシテイのタクヤ」

タクヤ「よっしゃー！……！勝ったぞハッサム！……！」

ハッサム『ハッサム！……！ハッサムハッサム！……！』

俺はハッサムに抱きついた。

タクヤ「ありがとうハッサム」

ハッサム『ハッサム』

ハヤト「戻れピジョット。よく頑張ったな。おめでとう、タクヤ君。これは勝者の証、ウイングバッジだ。貰ってくれ」

タクヤ「よっしゃ！ウイングバッジ、ゲット！！！」

ハッサム『ハッサム！！！！』

コトネ「タクヤ、おめでとうって事ね！」

カズナリ「おめでとうございます、タクヤさん」

タクヤ「ああ、ありがとう。コトネ、次はいよいよお前のジム戦だ。はじめてのジム戦頑張れよ！！」

コトネ「うん！」

ハヤト「そしたら、ポケモンを回復したらすぐにはじめようか」

コトネ「はい！お願いします、ハヤトさん」

ハヤトとのジム戦に勝利することができたタクヤ。次はいよいよコトネのジム戦。コトネはハヤトに勝つことができるのか。

To Be Continued...

Episode 10 コトネのジムバトルと繋がりのお窟

ハヤト「コトネちゃん、回復も終わったからすぐにジム戦を始めようか」

コトネ「よしっ、頑張るって事ね」

カズナリ「頑張れ、コトネ」

タクヤ「俺も応援してるぜ」

ここはキキョウシティポケモンセンター。キキョウシティジムリーダー、ハヤトのポケモンの回復も終わり、ついにコトネの初ジムバトルが始まるうとしていた。

チャレンジャー

審判「ではこれより、ジムリーダーのハヤト対挑戦者コトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体。ポケモンが先に倒れたほうが負けとなります。なお、道具の使用は認められません」

ハヤト「タクヤ君には負けたけど、次はそうはいかないよ！行けっ、ピジョット！」

ピジョット『ピジョー！ッ！』

コトネ「だったら私も本気で行くって事ね。出てきて、マリル！！」

マリル『リルル』

審判「それでは、バトルスタート！」

コトネ「マリル、水鉄砲！」

マリル『リイ、ルー！！！！！』

ハヤト「かわして翼で打つ！」

ピジョット『ピジョー！ッ！』

コトネ「マリル、ジャンプ！そこから体当たり！」

マリル『リルッ！リル！ッ！！！』

ピジョット『ピジョッ！？ピジョー！ッ！』

マリル『リイ、ルー……ッッッ！……！』

ピジョット『ピジョッ！ピジョー……ッッ……！……ピ……シヨ……』

審判「ピジョット、戦闘不能。マリルの勝ち！よって勝者、挑戦者」
チャレンジャー

コトネ」

コトネ「やったー……！！！」

タクヤ「スゲエぞコトネ！」

カズナリ「やりましたね、コトネ！」

ハヤト「タクヤ君とのバトルの間にブレイブバードの弱点を見抜かれたのかな？」

コトネ「はい。急に止まれないからその先に攻撃を展開しておけば勝手に突っ込んでくると思ったんです！」

ハヤト「何はともあれ、勝者の証のウイングバッジだ！」

コトネ「ウイングバッジ、ゲットって事ね！」

マリル『リルル』

ジム戦を終えたタクヤ一行は、ヒワダタウンにつながる繋がり
の洞窟に来ていた。

タクヤ「今日は何曜日だっけ？」

コトネ「多分金曜日だったはずよ」

カズナリ「それがどうしたんですか？」

タクヤ「いやー、保護されてるんだけど、ここは金曜日だけラプラスが見られるんだ」

コトネ「ラプラス！？」

ラプラス 乗り物ポケモン。優しい 心の 持ち主。めったに 争わな
ないため、沢山 捕まえられ 数が 減った。

カズナリ「ラプラスって、絶滅危惧のポケモンですよね？」

タクヤ「ああ。まあ、俺持ってるけど」

コトネ「ええっ！？どうして？」

タクヤ「まあ、研究職目指してるって言っただろ？その度の時にラプラス保護区に行ったんだけど、管理人と仲良くなってさ、卵をもらったんだ」

コトネ「いいな、ラプラス」

カズナリ「せめて見に行きましょうよ」

タクヤ「そだな」

つながりの洞窟を通るタクヤたちは、ラプラスを見に行くことになった。目指すは繋がり洞窟の最下層！

To Be Continued...

Episode 11 ラプラスとロケット団！！

タクヤ「このあたりラプラスが見られるみたいだぞ」

「ここは繋がり洞窟最下層。ラプラスが見られる場所についたはずなんだけど……」

コトネ「いないみたいね……」

カズナリ「どうしてだろう……？」

タクヤ「看板もこうしてあるのに」

看板があり、そこには『毎週金曜日、ここにラプラスがやって来ます。保護区なので捕まえないようにしましょう』と書いてある。しかし、ラプラスがいないのだ。

タクヤ「ま、また今度見に来るか」

そんなことを呟いたとき、変な黒い服を着た二人組が話し合っていた。

黒A「ラプラスも捉えたし、ここに用はもう無いな」

黒B「そうだな。さつさとサカキ様にラプラスを渡そうぜ」

この二人組がラプラスを捕まえたようだ。二人組の近くに、大きなロボットがあった。

コトネ「ねえねえ、あの二人組が捕まえたんじゃないの？」ヒソヒソカズナリ「そうですね。ラプラスを捉えたと言ってますし」ヒソヒソ

タクヤ「そうだな。俺が行くからお前らはここに隠れてる」ヒソヒソ

そんなことを話し合っていたタクヤたち。しかし……

黒A「そこにいるのは誰だ!!」

黒B「我々の活動を見たからには、生きて帰れると思うなよ!!」

タクヤ「マズイ、バレた!クソツ、テメエら。ラプラスを放しやがれ!!」

黒A「誰が放すか!行けつ、クロバット!!」

黒B「そうだそうだ。こいつはサカキ様に渡すのだ!お前も行けつ、マタドガス!」

クロバット「クロバット!!!!」

マタドガス「マタドガス!!」

タクヤ「行つてこい、ガブリアス、ハッサム!」

ガブリアス「ガブツ!!!!」

ハッサム「ハッサム!!!!」

二人組はクロバットとマタドガスを繰り出した。

タクヤ「テメエら、サカキつて言ったな!?!ということはお前らは、ロケット団か!?!」

ロケット団A「バレちゃあしょうがない」

ロケット団B「そう。俺たちはサカキ様のご命令でラプラスを捕まえに来たのだ!」

タクヤ「ほうほう、ロケット団か……。だったら手加減する必要はねえな!ガブリアス、二人組に向けて逆鱗!ハッサムはシザークロス!」

ロケット団A、B「は?」

ガブリアス「ガブガブガブツ!!!!!!!!!!!!!!」

ハッサム「ハッサム!!!!!!!!!!!!!!」

ロケット団 A「B「グハッ!」」

クロバット『クロバット……』

マタドガス『ま、マアタドガス……』

クロバットとマタドガスは隅っこでガクブル：（；。・。・）
：していた。

ロケット団 A「クソッ!」

ロケット団 B「こうなったら、マタドガス、煙幕!」

しかしマタドガスは隅で震えていて何もできない。

タクヤ「さあ、覚悟はできてんだろおなあ?」

ロケット団 A「すすす、スイマセンっしたア!」!」スライディング土下座

ロケット団 B「ラプラスは逃がすので、開放してください!」!」ジャンピング土下座

タクヤ「ふうん、じゃあ開放してやる……とでも言うと思ったかあ?」ガブリアス、気絶させる!」

ガブリアス『ガブッ!』!」

ロケット団 A「B「グハッ!」

ロケット団の二人組は気絶してしまった。俺はバッグから穴抜けの紐を取り出し、二人を縛ったあと、ロボットを壊してラプラスを開放した。

ラプラス『キューン!』!」

タクヤ「うお!」

コトネ「うわー、ラプラスだー!」!」

カズナリ「本物は初めて見ました!」

ラプラス『キューン、キューン!!』
タクヤ「やめろよラプラス!」

俺はラプラスにじゃれつかれていた。顔を舐められ、頬に頭をすり寄せられた。

タクヤ「ありがとう、ガブリアス、ハッサム。お前たちは戻れ!」

俺はガブリアスとハッサムをボールに戻した。

タクヤ「じゃあラプラス、俺たちはそろそろ行くよ」
コトネ「そうね。私たちはヒワダタウンでジム戦しなきゃいけないしね」

カズナリ「そろそろ行きましようか」
ラプラス『キューン、キューン……』

ラプラスは寂しそうにする。しかし保護区のポケモンは捕まえられないのだ。

タクヤ「ゴメンなラプラス。お前は保護区のポケモンだから捕まえたらいけないんだ。だけど、また会いに来るよ」

コトネ「そうね」
カズナリ「そうですね」
ラプラス『キューン?キューンキューン』

俺たちはラプラスに別れを告げ、ここを出ようとした。しかし……

タクヤ「ああ、この二人組とそいつらのポケモン忘れてた。おい、マタドガス、クロバット」
マタドガス「クロバット……!!」ビクッ

タクヤ「そんなに怖がるな。お前たちはどうする？このまま野生に帰るか？」

コトネ「まあ、こんな奴らの手持ちのままより野生に帰ったほうが幸せじゃないの？」

カズナリ「そうですね」

マタドガス『マアタドガス』スリスリ

コトネ「わっ！」

クロバット『クロバツ』スリスリ

カズナリ「うわっ！」

マタドガスはコトネに、クロバットはカズナリに擦り寄ってきた。

タクヤ「こいつら、お前らと一緒にいたいんじゃないか？」

マタドガス『マタドガス！』コクコク

クロバット『クロバツ』コクコク

マタドガスとクロバットは頷く。

タクヤ「じゃあ、こいつらがもっているこれがこいつらのボールか。はい、コトネにはマタドガスのボール。カズナリにはクロバットのボールだ」

コトネ「マタドガス、ゲットって事ね！！」

カズナリ「クロバット、ゲットです！！」

マタドガス『マアタドガス！』

クロバット『クロッ、クロバツ！！』

コトネとカズナリはマタドガスとクロバットをゲットしたあと、ボールに戻した。

タクヤ「それじゃ、ヒワダタウンに行くか」

コトネ「そうね」

カズナリ「そうですね」

タクヤ「おっと、こいつらをヒワダのジュンサーさんに渡さないといけねえな」

俺は縛られたロケット団を担ぎ、歩きだした。

コトネ「よし、ジム戦頑張るぞー！ー！！」

タクヤ「オー！ー！！！！」

カズナリ「頑張ってください！」

ラプラスをかけてロケット団と戦ったタクヤたちは、新たな仲間、マッドガスとクロバットを加え、次の街、ヒワダタウンに向けて歩きだした。

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 12 スピードボール！コトネ キリンリキゲットって事ね！

タクヤ「やっと抜けたー」

俺たちはやっと繋がりの洞窟を抜け、ヒワダタウンに来ていた。

タクヤ「よし、こいつらをジュンサーさんに引き渡すか」

コトネ「そうね」

カズナリ「そうですね」

そう、ラプラスの捕獲をしようとしていたロケット団員二人を引き渡すのだ。

タクヤ「ジュンサーさん！」

ジュンサー「どうしたの？」

タクヤ「こいつら、繋がりの洞窟のラプラス保護区でラプラスを捕まえようとしてたので捕まえました」

ジュンサー「あら、ありがとう。それで、ラプラスは？」

タクヤ「しっかり守りましたよ」

ジュンサー「そう。ご協力感謝します」

タクヤ「はい！」

俺たちはジュンサーさんにロケット団を引渡し、ポケモンセンタ―で一夜を過ごした。

次の朝、コトネがこんな提案をしてきた。

コトネ「ねえ、ボール職人のガンテツさんのところに行ってみない？」

カズナリ「いいね、それ」

タクヤ「そうだな。俺もぼんぐり渡しておきたいし」

俺たちはガンテツさんの工房に来た。

タクヤ「御免くださいーい！」

？「はい？」

タクヤ「おや、ガンテツさんですか？」

ガンテツ「いかにも。ボール作成の依頼かな？」

タクヤ「はい。えっと、この白ぼんぐりとみどぼんぐりで」

ガンテツ「ああ、たしかに受け取ったよ。明日にでも取りに来なさい」

タクヤ「はい」

コトネ「ねえねえ、ぼんぐりってどんなボールになるの？」

カズナリ「それは僕も気になります」

コトネとカズナリがそんなことを聞いてきた。

タクヤ「それは、白ぼんぐりが素早いポケモンを捕まえやすいスピードボール。きぼんぐりが月の石で進化するポケモンを捕まえやすいムーンボール。赤ぼんぐりがレベルの低いポケモンを捕まえやすいレベルボール。青ぼんぐりが釣ったポケモンを捕まえやすいルアーボール。みどぼんぐりが捕まええたポケモンが懐きやすくなるフレンドボール。そして、黒ぼんぐりが体重の重いポケモンを捕まえやすいヘビーボールだ」

ガンテツ「よく知っているようじゃな。どうじゃ？これをあげよう。ひとり一個ずつヘビーボール、スピードボール、ルアーボールじゃ」

コトネ「じゃあ私スピードボール」

カズナリ「僕はルアーボールにします」

タクヤ「俺はヘビーボールで。ガンテツさん、ありがとうございました」

キリンリキは葉っぱカッターを受け倒れたが、再び立ち上がった。

タクヤ「いい根性だな」

カズナリ「キリンリキのスピードはなかなかなものです。これは注意が必要です」

コトネ「チコリータ、ツルの鞭で地面に叩きつけて――」

チコリータ「チイッコー――！！！！」

キリンリキ「リッキーーッ！！！！リキ……リ……キ……」

コトネ「今よ、モンスターボール！」

モンスターボールにキリンリキが収まる。一回、二回と揺れ、スイッチが点滅する。しかし……

キリンリキ「リッキイ！」

コトネ「ああ！捕まえたと思ったのに！」

タクヤ「コトネ、さっき貰ったスピードボールを使い！」

コトネ「それがあった！行けっ、スピードボール！！」

今度はスピードボールにキリンリキが収まる。一回、二回、三回と揺れる。そしてパチンツ、と音が鳴り、完全にボールに収まった。

コトネ「ツツツ！キリンリキ、ゲットって事ね――！！」

チコリータ「チコリッ！チコ――！！」

タクヤ「ガンテツさんのボールはすごいだろ？」

カズナリ「ほんとにすごいよ。モンスターボールでダメだったのを捕まえるなんて」

コトネ「ありがとっ、チコリータ。よし、キリンリキも加えて、ジム戦頑張るぞー！！！！」

タクヤ「俺も頑張るぜ――！！」

コトネは、新たな仲間キリンリキを加え、手持ちポケモンは5体となった。次は、ヒワダジム。果たして、タクヤとコトネはジムリーダーに勝つことができるのか！

To Be Continued . . .

Episode 13 ヒワダジム ヌケニンとタクヤ！！

タクヤ「御免くださいーい！ジムリーダーのツクシさん、いますかー！？」

コトネ「ここが本当にジム？どちらかと言えば植物園のような感じがするんだけど」

カズナリ「ガイドブックには確かにここって書いてますね」

そう、ここはヒワダジム。だが内装は小さな植物園のような感じなのだ。

？「誰だい君たちは？」

タクヤ「挑戦者です。チャレンジャー貴方はジムリーダーのツクシさん、ですね？」

ツクシ「そうだよ。じゃあ、ジム戦ってことでいいんだね？」

コトネ「私も挑戦者です」チャレンジャー

ツクシ「そうか。だったらそちらが先にするか決めてくれるかな？」

タクヤ「コトネ、今回も俺が先に行っていていいか？」

コトネ「いいよ、私があとでも」

ツクシ「じゃあ早速はじめようか」

いよいよ俺のジム戦。今回は3on3だが、一体で3タテするつもりだ。なぜなら、アイツを連れてきたからだ。

審判「それでは、ジムリーダーチャレンジャーツクシ対、挑戦者タクヤのバトルを始めます！道具の使用は禁止。使用ポケモンは3体。チャレンジャーどちらかが3体全てを失ったところで終了とします！なお、交代は挑戦者のみ認められます。それでは、始め！」

ツクシ「じゃあ僕から行くよ！行けっ、虫ポケモンの静かなる戦士！」

イトマル『イトオ』

タクヤ「ツクシさん。悪いですが今回の勝負、俺のポケモンを一体も倒せずに終わるでしょう」

ツクシ「何を言ってるんだい？そんなわけ」

タクヤ「あるんですよ。虫ポケ使いである貴方なら、これが何かわかるでしょう？行けっ、俺の切り札っ！」

ヌケニン『ヌケ』

ツクシ「ッ！？そのポケモンは！」

タクヤ「そう、ヌケニンですよ。俺の知る限り、あなたのポケモンはイトマル、トランセル、ストライク。だが、あなたのストライクは燕返しも、翼で打つも覚えていない。イトマルもトランセルもこいつを突破する技はない。貴方はもう詰んだんですよ」

ツクシ「たしかに、詰んだかもしれないね。だけど、勝負は最後までわからない！」

タクヤ「いいでしょう。いくぞヌケニン！」

ヌケニン『ヌケ』

審判「それでは、始めっ！」

その頃、コトネとカズナリは……

コトネ「何、あのポケモン！？」

カズナリ「あのポケモンって、もしかして……！？」

コトネは図鑑を取り出し、調べた。

ヌケニン 抜け殻ポケモン。ツチニンの進化系。羽を動かさずに飛んでいる 不思議なポケモン。背中の割れ目を覗くと魂を抜き取られるらしい。

コトネ「ヌケニン？」

カズナリ「聞いたことがある。進化条件が特殊なツチニンの進化系がいるって。確かそのポケモンは、効果抜群以外の技は当たらない！」

コトネ「なにそれ！？そんなのって、反則じゃない！」

そんなヌケニン談義をする二人だった。

そして、タクヤとツクシのジム戦が始まった。

タクヤ「ヌケニン、剣の舞からの身代わり！そして高速移動！」

ヌケニン『ヌケエエエエ！！！』

ツクシ「イトマル、糸を吐く！」

イトマル『イトオ！』

イトマルはこちらの素早さを下げようとする。だが……

タクヤ「ヌケニン、かわして燕返し！」

ヌケニン『ヌケツ！ヌケエ！』

ツクシ「速い！？かわして、イトマル！」

イトマル『イトツ！？イトオオオ！』

審判「イトマル、戦闘不能！ヌケニンの勝ち！」

コトネ「一撃で相手を倒した！！！」

ツクシ「強いね、そのヌケニンは。これは本当に詰んだかもしれないよ。僕はまだ、トランセルを信じている。進化すれば対抗できるからね。行けっ、虫ポケモンの誇り高き戦士！」

トランセル『トランセルッ！！』

ツクシ「ひたすら固くなって耐えるんだ！」

タクヤ「固くなって耐える戦法か……。だが、物理防御を上げたところで、特殊技に効果はない！ヌケニン、影分身からシャドーボール連弾！」

ヌケニン『ヌケヌケヌケヌケヌケヌケヌケヌケ！！！！！！』

トランセル『トランセツ！！トラ……ン……セ……』
審判「トランセル、戦闘不能！ヌケニンの勝ち！」

さらに二体目を倒した。次はストライク。燕返しや翼で打つを途中で覚えることに注意すれば大丈夫だ。

コトネ「すごい！あつという間に二体倒しちゃった！」

カズナリ「おそらく、効果抜群の技を覚えるバタフリーに進化するまで耐えようとしたのでしょう」

ツクシ「このポケモンが途中で飛行タイプの技を覚えなかったら完全に終わりだ！行けっ、華麗なる虫ポケモンの戦士！」

タクヤ「いよいよ切り札のお出ましか……。気をつける、ヌケニン！」

ヌケニン『ヌケツ！』

ストライク『ストライツ！！！』

ツクシ「ストライク、影分身！」

ストライク『ストライツ！！！』

ストライクが何体にも増える。だが……

タクヤ「小細工は通用しねえんだよ。ヌケニン、シャドークロー！」
ヌケニン『ヌケツ！！！！』

ストライク『ストライツ！！！スト……ストライツ！』

タクヤ「まだ耐えるか……。だが、次で終わりだ！ヌケニン、燕返し！」

ツクシ「ストライクっ！」

その時、ストライクの翼が光りだし、ヌケニンに突進し始めた。

タクヤ「ここの土壇場で翼で打つを覚えるか……。構うなヌケニン

！そのまま突っ込め！」

ツクシ「ストライク、頑張って！翼で打つ！」

ストライク『ストライツ！！！！！！！！』

又ケニン『又ケエエエエ！！！！！！』

そこで、ストライクの翼で打つが、又ケニンに、ヒットした。

ツクシ「やった、又ケニンを倒した！」

だがそこで俺は、ニヤリと笑い、こう言った。

タクヤ「又ケニン、地中から燕返し！」

ツクシ「えっ！」

又ケニン『又ツケエ！』

ストライク『ストライツ！ス……ト……』

審判「ストライク、戦闘不能！又ケニンの勝ち！よって勝者、挑戦者タクヤ！」
チャレン

ツクシ「なんで又ケニンは倒れていなかったんだい？」

タクヤ「俺の最初の支持を忘れたのかい？身代わりを使って、本体は穴を掘るを使わせていたんだよ」

ツクシ「そうだったんだ。戻れストライク、お前はよくやった。これが勝った証、インセクトバッジだ。大事にしてね」

タクヤ「おうよ。又ケニン、ありがとな」

俺は又ケニンに抱きつく。すると又ケニンは照れたように鳴いた。

コトネ「次はいよいよ私の番ね。よし、タクヤに負けなくらい頑張るぞ！」

見事、ジムリーダーツクシを下し、インセクトバッジを手に入れ

たタクヤ。次はコトネのジム戦。はてさて、どうなることやら。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
. . .

Episode 14 コトネvsツクシ！ 激突ヒワダジム！！

ツクシ「さて、回復も終わったし、次はコトネ、君とのジム戦をはじめよう」

コトネ「はい！」

俺とのジム戦で傷ついたポケモンの回復も終わり、コトネとツクシのジム戦が始まるうとしていた。

タクヤ「コトネ、負けんじゃねえぞ」

カズナリ「頑張れ、コトネ」

コトネ「勿論！」

コイツの手持ちは最初に貰ったチコリータ、下から持ってたマリル、釣ったキングラー、繋がりの洞窟でロケット団が残したマタドガス、さっき捕まえたキリンリキだ。まあ、使用するのはマリル、キングラー、マタドガスあたりが定石だろう。

あ、勿論マタドガスとキリンリキは6vにしていますけどね。

審判「これより、ジムリーダーのツクシ対挑戦者コトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは三体！どちらかが先にすべて失ったとき、バトル終了とします！ポケモンの交代は挑戦者のみとします！なお、道具の使用は認められません！」
ツクシ「まずは僕からだ。行けっ、虫ポケモンの静かなる戦士！」
イトマル『イトオ』

ツクシが出したのは、さっき使用したイトマル。対するコトネは、

コトネ「行けっ、キリンリキ」

キリンリキ『リキ〜!』

キリンリキだ。エスパーは虫に弱いのに。

タクヤ「キリンリキ!?!」

カズナリ「エスパータイプは虫に弱いはずなのに」

ツクシ「虫ポケモン相手にエスパーで来るなんて、どうかしてるよ」
審判「それでは、始め!」

ツクシ「イトマル、糸を吐く!」

イトマル『イトオ!』

イトマルは糸を吐く。対するキリンリキは、

キリンリキ『リツキイ〜!』

コトネは技を知らないから指示をだし遅れている。しかしキリンリキは勝手に行動し、エスパーの力で糸を博を跳ね返した。って、あれは!?

ツクシ「サイコキネシス!?なんでそんな技を!?!」

イトマル『イ、イトオ……!』

ツクシ「ああッ、イトマル!」

イトマルは自分の糸を受けてしまった。

そしてコトネがキリンリキの使える技を調べると、サイコキネシス、噛み砕く、ダブルアタック、高速移動、シャドーボールと出てきた。なんというオーバースペック。

コトネ「キリンリキ、噛み砕く!」

キリンリキ『リイツキイ〜!!!!』

キリンリキは後ろを向くと、しっぱの頭でイトマルに噛み付いた。イトマルは自分の系のせいではなかった。イトマルはそれだけで戦闘不能に陥った。

タクヤ「すげえ、コトネのキリンリキ」

カズナリ「噛み砕く一撃でイトマルを倒すなんて……」

ツクシ「ありがとうイトマル、ゆっくり休んで。コトネ、君はやるね。次はこいつだ、虫ポケモンの誇り高き戦士！」

トランセル『トランセルッ!!』

ツクシ「トランセル、固くなる。そこから体当たりだ！」

コトネ「かわして！」

トランセルは固くなって強度を上げる。そして、眼前から消え去った。

コトネ「消えた!？」

キリンリキ『リキッ!？リキリキ!？リッキョー!!』

消えたと思ったら後ろから体当たりを受け、キリンリキは吹っ飛んだ。

ツクシ「消えたんじゃないで、スピードで攪乱しているだけだよ。

トランセル、連続で体当たり」

コトネ「戻ってキリンリキ」

ツクシ「いい判断だね。さて、次は何を出す？」

コトネ「行けっ、マタドガス！」

マタドガス『マアタドガァ……』

タクヤ「あのマタドガス、どこまでやれるか見ものだな」

ロケット団が置いていったマタドガスだ。
コトネは図鑑でマタドガスの技を調べた

マタドガス 使える技は、ダブルアタック、ヘドロ爆弾、大爆発、
道連れ、毒々、シャドーボール、煙幕。

おおう、これもオーバースペック……

ツクシ「マタドガスか……。トランセル、また固くなるをして体当たり！」

トランセル『トランセツ！』

コトネ「マタドガス、煙幕！」

マタドガス『マアタドガアス』

ツクシ「煙幕か……。気をつける、トランセル」

コトネ「マタドガス、横回転しながらヘドロ爆弾」

ツクシ「何っ！？」

マタドガス『マアタドガアス』

マタドガスは回転で発生した風圧で煙幕を吹き飛ばす。そこにあったのはヘドロまみれのトランセルだった。

ツクシ「ああつ、トランセルっ！！」

審判「トランセル、戦闘不能！マタドガスの勝ち！」

コトネ「やったあ、マタドガスありがとう！」

マタドガス『マタドガアス』

ツクシ「本当に君はすごいね。次はこいつ、倒せるかな？行けっ華麗なる虫ポケモンの戦士！」

ストライク『ストライツク！』

コトネ「一旦戻って、マタドガス。行けっ、キリンリキ！」

キリンリキ『リツキイ！』

コトネはマタドガスを戻し、キリンリキを繰り出した。

タクヤ「ストライクは強敵だぞ……」

カズナリ「いくらキリンリキでも勝てるかどうか……」

コトネ「キリンリキ、サイコキネシス！」

キリンリキはサイコキネシスを放つ。しかし……

ツクシ「影分身！そこから剣の舞から電光石火。そして連続斬り！
ストライク『ストライツ』」

影分身でサイコキネシス是不発に終わり、剣の舞で攻撃力を上げられてしまった。さらに電光石火で接近されて連続斬りをされまくる。

キリンリキ『リキッ、リキッ！』

タクヤ「連続斬りは当てる度に威力が上がる。さらにストライクの特性テクニシャンで威力が上がっている。これは戦闘不能だな」

思ったとおり、キリンリキは戦闘不能となってしまった。

コトネ「次、行けっマリル！」

マリル『リルル〜』

ツクシ「このまま押し切るよ、電光石火から連続斬り！」

マリルも同じく連撃を受ける。

タクヤ「同じ手にはまってどうするんだ！」

カズナリ「マリルが危ない！」

コトネ「マリル、水鉄砲！」
マリル『リルッ、リルッ』

しかし連撃から抜け出せないマリルは、攻撃できない。

コトネ「マリル、抜け出して！」

マリル『リルウ……』

コトネ「ああつ、マリル！」

マリルも戦闘不能になってしまった。絶体絶命の大ピンチである。

ツクシ「さて、君の最後のポケモンはマタドガスだ。さて、どうする？」

絶体絶命の大ピンチのコトネ。残されるポケモンは一体ずつ。ツクシはストライク。コトネはマタドガス。どちらも危うい状況になってきた。

タクヤ「ツクシはストライク一体。対するコトネはマタドガス一体。こりゃどちらも後がねえな」

カズナリ「コトネ、頑張れ！」

コトネ「行けっ、マタドガス！」

マタドガス『マアタドガア』

コトネは最後のポケモン、マタドガスを繰り出した。

コトネ「マタドガス、シャドーボール！」

マタドガス『ドガア！』

ツクシ「ストライク、切り裂くでシャドーボールを斬れ！」

ストライク『ストライツ！』

なんとストライクは、飛び上がってシャドーボールをまっぴたつに斬ってしまった。

コトネ「シャドーボールを斬った！？マタドガス、煙幕！」
マタドガス『ドガアアアア……』

煙幕で辺りが多い尽くされる。だが、ツクシは同様を見せなかった。

ツクシ「剣の舞で吹き飛ばせ！」
ストライク『ストライク！』

ストライクは高速回転し、巻き起こった風で煙幕を吹き飛ばしてしまう。

コトネ「マタドガス、上昇して！」
ツクシ「追え、ストライク！翼で打つ！」

マタドガスは上昇したが、ストライクのほうが速かった。ストライクも飛び上がり、強烈な翼で打つで迎撃されてしまった。

コトネ「もう打つ手はないの……？」

コトネが崩れ落ちそうになったとき、マタドガスの口から炎が上がり始めた。

タクヤ「あれは、火炎放射！？しかもかなり強力そうな感じだぞ！」

コトネ「マタドガス。あなた火炎放射を覚えたのね！」

マタドガス『ドガアアアアア！！！』

ドガースは火炎放射を発射した。しかも、上空からフィールド全体に降り注ぐように。

ストライク『ス、スト……』

ツクシ「ああつ、ストライク！」

ストライクは上空から降り注ぐ火炎放射を被弾してしまい、黒こげになっつて倒れてしまった。

審判「ストライク、戦闘不能！マタドガスの勝ち！よって勝者、挑^{チャ}戦者^{レンジャー}コトネ！」

コトネ「やった、勝ったー！！！！ありがとうマタドガス！！！」

マタドガス『／／／』

ツクシ「すごかったよ君のマタドガス。まさかあそこで火炎放射を覚えるなんて。しかも普通の火炎放射なら対抗策はあったんだけど、上から降ってくるのは防ぎ様がなかったよ。はい、インセクトバツジ」

コトネ「インセクトバツジ、ゲットって事ね！！」

マタドガス『マアタドガース！』

見事ヒワダジム、ジムリーダーのツクシに勝利したコトネ。次のジムに向けて、タクヤたちの旅はまだまだ続く。

To Be Continued...

E p i s o d e 1 5 到着コガネシティ！ ドククラゲとカズナリ！！（前書き

「E p i s o d e 1 4 コトネ v s ツクシ！ 激突ヒワダジム！！」

の内容を少し変更させていただきました

ぜひ読んでみてください

Episode 15 到着コガネシティ！ ドククラゲとカズナリ！！

ヒワダのジム戦も終わり、コガネシティに向かっている途中、一成のポケギアに電話が掛かってきた。

カズナリ「もしもし」

？「もしもし、カズナリか？」

カズナリ「父さん？どうしたの？」

カズナリ父「次のジョウトフェスタの場所が決まったよ。シンオウ地方だ」

カズナリ「ジョウトフェスタの？わかった。どこで待ち合わせ？」

カズナリ父「お前は今どこにいる？」

カズナリ「コガネシティに向かっている途中。もうすぐコガネシティにつくよ」

カズナリ父「ちょうど良かった。今コガネシティにいるんだ。デパートの屋上に来てくれ」

カズナリ「うん、わかったよ。それじゃあ」

カズナリの電話も終わり、再び歩きだした。

タクヤ「そうだ、カズナリ。ジョウトフェスタって？」

俺は死ぬ前にアニメを観て知っているが、聞いたとかなないと怪しまれそうなので一応聞いておいた。

コトネ「私たち、各地でジョウトをPRしてるの」

カズナリ「そう。今回の行き先はシンオウ地方ってわけ」

タクヤ「そうか。俺も行ってえな、シンオウ地方」

コトネ「私たちについてくれば？」

タクヤ「いいのか？まあ、ダメだつっても俺のプテラやボーマンダに乗って行こうと思ってるけど」

カズナリ「まあ、父さんに聞いてみるよ」

タクヤ「さんきゅー」

コトネ「それじゃ、さつさとコガネシティに行きましょう」

タクヤ、カズナリ「ああ（うん）」

そんなことを話しながら、コガネシティに向かった。

タクヤ「ここがコガネシティか……。ジム戦どうする？」

カズナリ「帰ってきてからでいいよ」

コトネ「そうね。さつさとデパートに行きましょう」

タクヤ「おう。っと、その前に手持ち変更しておこうかな。シンオウに俺に相対できるトレーナーがいないか探してみたいから本気の手持ちで行かせてもらうよ」

コトネ「タクヤの本気の手持ち！？見てみたい！」

カズナリ「僕も興味あるよ」

俺は転送装置を取り出し、手持ちをテッカニン、メタグロス、ボーマンダ、スターミー、ドサイドン、ゲンガーに変更した。

カズナリ「強そうなポケモンばかりですね」

コトネ「強くなったらこのポケモンたちとバトルしてみたいな」

タクヤ「おう、待ってるぜ」

そんな話をしているうちに、デパートの屋上についたみたいだ。そこにはカズナリに少し似た感じのオジサンがいた。

カズナリ「父さん」

カズナリ父「カズナリ、コトネ、久しぶりだね。そちらの人は？」

タクヤ「ああ、俺、タクヤです。カズナリ、コトネと一緒に旅させてもらってる者です」

カズナリ父「そうか。うちのカズナリがお世話になってるみたいだね。そしてカズナリ、旅の調子は？」

カズナリ「タクヤさんがベテランだから色々教えてもらってるよ」

カズナリ父「そうか」

コトネ「おじさん、ジョウトフェスタ、タクヤも連れていつていいですか？」

カズナリ父「もちろんだよ。よろしく、タクヤ君」

タクヤ「はい、よろしくお願いします。出発はいつになるんですか？」

カズナリ「明日の早朝からだよ。コガネシティの西の海岸に飛行場があるから、そこから出る飛行艇でシンオウに行く」

タクヤ「そつすか。じゃあ、俺ちよつと外行つてきますんで、用があれば俺のポケギアに電話してください」

そう言つて、カズナリの父さんのポケギアに、俺のを登録しておいた。

俺はデパートから外に出て、釣りを始めた。

タクヤ「シンオウでジョウトフェスタ、か。サトシとバトルしてえな……」

そんなことを呟く俺。やっぱ^{ヒカチュウ}光厨使いと名高いサトシとポケモンバトルするのは、俺の夢だったのである。

そんなこんなで、釣竿にポケモンがかかったようである。

タクヤ「さつて、何が連れたかなつと」

俺は思い切り釣竿を引いた。そこにかかっていたのは、ドククラ

ゲであつた。

ドククラゲ『ドクドク……』

タクヤ「ドククラゲか……。よしっ行け、ボーマンダ！」

ボーマンダ『マンダ！』

タクヤ「まずは、ドラゴンクロー！」

ボーマンダ『マンダ！』

ボーマンダの、竜の力を込めた爪による一撃が放たれ、ドククラゲにクリーンヒット。吹っ飛ばされたが、ドククラゲは触手を集め、冷気の力を込め始めた。

タクヤ「不味っ、冷凍ビームか！ボーマンダ、急上昇！」

ボーマンダ『マンダ！マンダ！』

ドククラゲ『ドー、クー！！！』

ボーマンダは間一髪避ける。長期戦は危険だな。

そんな時、ポケギアに電話が掛かってくる。

タクヤ「こんな時にかよ！ボーマンダ、思念の頭突き！もしもし？」

ボーマンダ『マンダ！！！』

カズナリ「もしもしタクヤさん？ちょっといいですか？」

タクヤ「悪い、今取り込み中だ。これ見りゃわかるだろ？」

俺はポケギアのカメラ部分をドククラゲとボーマンダに向ける。そこにはボーマンダの思念の頭突きがドククラゲに直撃するところだった。

カズナリ「ドククラゲ！？釣りでもしてたんですか！？」

タクヤ「ああ！ボーマンダ、噛み砕く！」

ボーマンダ『マンダ!』

ボーマンダはドククラゲに噛み付いた。ドククラゲは痛がり、そのまま冷凍ビームをはなとうとする。

タクヤ「ボーマンダ、急上昇して上空からドククラゲを地面に叩きつける!カズナリ、後でかけ直す」

カズナリ「わかりました。それじゃあ」

カズナリからの通話を切り、バトルに専念する。ドククラゲは地面に叩きつけられ、目を回していた。

タクヤ「ボーマンダ、もういい戻れ。行けっ、モンスターボール!」

ボーマンダをボールに戻し、ドククラゲに向かってボールを投げる。一回、二回、三回とボールが揺れる。そしてパチンと音が鳴ると、ドククラゲがボールに収まった。

タクヤ「ドククラゲ、ゲット!」

ドククラゲをゲットしたが転送せず、ボールを手にもっている。そして、カズナリに電話をかけ直した。

タクヤ「カズナリ?」

カズナリ「ああ、ドククラゲどうしましたか?」

タクヤ「捕まえたよ。まだ転送せず、ボールは手に持ってるけどねほら」

と言ってドククラゲのボールをカズナリに見せた。カズナリはうわあ、と言って、次に本題に入り出した。

カズナリ「今日の夜、ポケモンセンターのバトルフィールドで、バトルしてください」

タクヤ「はあ？ま、まあいいけど。用件はそれだけ？」

カズナリ「はい」

タクヤ「おK。じゃ、またそっちに向かうわ」

と言ってポケギアの電話を切り、デパートの屋上に再び向かった。

タクヤ「ただいま戻りました」

カズナリ父「お疲れ。さっきドククラゲを捕まえたんだって？」

タクヤ「はい。ああ、そのことですが、カズナリ、お前にこのドククラゲ、やるよ」

カズナリ「えっ？」

タクヤ「俺ドククラゲ持つてるんだわ。だから、コトネより手持ちの少ないお前にとってもね」

そう。今の二人の手持ちは、コトネがチコリータ、キングラー、キリンリキ、マリル、マタドガスの五体。対するカズナリはワニノコ、ゴース、クロバットの三体なのだ。三体じゃ新人として危なっかしい。だからカズナリにあげようというのだ。

タクヤ「と言っても、ドククラゲを加えてもコトネより一体手持ちが少ないんだけどね」

カズナリ「あ、ありがとうございます！」

コトネ「いいなー、カズナリ。まっ、よかったじゃん」

カズナリ父「うちのカズナリのために、ありがとうタクヤ君」

タクヤ「どういたしまして。じゃ、夜のバトル楽しみにしてるよ、カズナリ。俺はまあ本気は出さない、というより出せないんだけどね」

カズナリ「はい！」

こうして、カズナリの父さんはホテルへ、俺たち三人はポケモンセンターで部屋をとっておいた。

いよいよ夜には、カズナリとのバトルだ。

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 16 3on3 タクヤvsカズナリ！！

ここはポケモンセンターのバトルフィールド。そこには、俺とカズナリが向き合っていた。

俺の手持ちは全てジョーイさんに預け、カズナリのような対新人用の手持ちに変更していた。

タクヤ「それじゃ、カズナリ。3on3でいいな？」

カズナリ「はい！」

タクヤ「カズナリの父さんは審判を頼みます」

カズナリ父「わかったよ」

コトネ「どっちも頑張れ！」

俺、カズナリはそれぞれの位置につく。そして、俺はお互いの手持ちを考えていた。

タクヤ（カズナリの手持ちはワニノコ、クロバット、ゴース、そして俺のあげたドククラゲ。ゴース以外は電気に弱い。そして俺のあげたドククラゲはほぼ確実に使ってくると見ていい。そして、ドククラゲは水タイプだからワニノコを使ってくる確率は格段に下がる。よってカズナリの手持ちはクロバット、ゴース、ドククラゲの確率が一番高い。そして俺の手持ち、まず電気タイプの対新人用ポケモン、ルクシオ。これは生前レントラーを育てていた途中のものだ。そして次にゴルバット。最後にユンゲラーだ。どれも最終進化ではないから対新人にはもってこいだ。さて、どうするカズナリ？）

そんな考え事をしてる間に、カズナリの父さんの声が響く。

カズナリ父「それではこれより、カズナリ対タクヤのバトルを行う

！使用ポケモンは三体で交換は自由。どちらかのポケモンがすべて失われたときに試合終了とする。なお、道具の使用は認められない！」

タクヤ「まずはこいつからだ！行けっ、ルクシオ！」

ルクシオ『シオッ！』

コトネ「ルクシオ？」

コトネとカズナリは図鑑を使う。

ルクシオ 電光ポケモン。コリンクの進化系。仲間と尻尾を繋げると、より強力な電撃を爪から出すことができる。

カズナリ「やっぱり電気タイプか。ゴース、お願いします！」

ゴース『ゴースゴス！』

ルクシオ『グルルルrrr……』

ゴース『ゴ……ゴース……』

やはりゴースを使ってくるか……。そして、ルクシオの特性威嚇も発動した。さて、何を覚えている？

カズナリ父「先行はカズナリ。それではバトル、スタート！」

カズナリ「行くぞ、ゴース！シャドーボール！」

ゴース『ゴース……！』

タクヤ「ルクシオ、かわして威張れ！」

ルクシオ『シオーーーーッ！』ドヤア

ゴース『ゴー！？ゴー！ゴーゴース！』

カズナリ「ゴース、正気に戻って！ゴース！シャドーボール！」

ゴースは混乱してしまい、自分を攻撃したり、変な行動をとってしまう。

タクヤ「ルクシオ、噛みつく！」

ルクシオ『シオッ！』

カズナリ「かわして、ゴース！」

やっと正気に戻ったゴースは、ギリギリのところかわす。

タクヤ「ルクシオ、そのままアイアンテール！」

ルクシオ『シオーーーーーッ！！！！』

カズナリ「ゴース、交わして目覚めるパワー！」

ゴース『ゴース！！！！！！』

アイアンテールを不規則な動きでかわし、目覚めるパワーをルクシオに当てた。ゴースは6vだから目覚めるパワーのタイプは悪だ。

タクヤ「そいつの目覚めるパワー、なかなかの威力のようだな。ル

クシオ、雷の牙！」

ルクシオ『シオッ！』

ゴース『ゴースッ！！！！！！』

雷の牙がクリーンヒット！ゴースは痛がる。そしてルクシオが離れると、ゴースは力なく倒れる。だが、

カズナリ「ゴ、ゴースが光ってる！？」

コトネ「あれは！」

タクヤ「進化の光か！」

もともと捕まえた時のレベルがそこそこあったようで、進化してしまった。

ゴースト『ゴースゴースト!』
カズナリ「ゴーストに進化したんだね!？」
ゴースト『ゴースト!』

ゴーストは振り返り、カズナリに返事をした。
カズナリは図鑑を出す。

ゴースト ガス状ポケモン。ゴースの進化系。本当に何も見えない
暗闇で、ゴーストは静かに獲物を狙っている。
使える技は、シャドーボール、目覚めるパワー、催眠術、シャドー
パンチ、悪の波動。

カズナリ「すごいよゴースト。そんな技まで使えるようになったんだね。ゴースト、悪の波動!」

ゴーストは手から禍々しい波動を放つ。ルクシオにクリーンヒットし、ルクシオは倒れてしまった。

カズナリ父「ルクシオ、戦闘不能!ゴーストの勝ち!」
コトネ「カズナリすごい!」

タクヤ「サンキュールクシオ、しっかり休めよ。俺から一本取るたあ、結構やるみたいだな。だったらこいつを倒せるか?行けっ、ゴルバット!」

ゴルバット『ゴルバット!』

カズナリ「このまま行くよ!ゴースト、シャドーパンチ!」

タクヤ「甘い!ゴルバット、シャドーボール!」

ゴルバット『ゴルバット!』

ゴースト『ゴオオオオオオスト!!!!!!ゴ………』

カズナリ父「ゴースト、戦闘不能!ゴルバットの勝ち!」

カズナリ「ゴーストありがとう、ゆっくり休んで。次はこいつです

「クロバット、お願いします」
タクヤ「来たな、クロバット！」

自分の進化系を見たせいか、ゴルバットは少し身震いした。

カズナリ「クロバット、噛み付く！」

タクヤ「ゴルバット、かわして蜻蛉返し！」

クロバットは持ち前のスピードを生かして接近し、噛み付こうとする。だがゴルバットはギリギリかわして蜻蛉返しを決めた。

タクヤ「よし、サンキューゴルバット。ユンゲラー、頼んだ！」

ユンゲラー「ユン、ゲラー……」

カズナリ「なつ、ポケモンが交代した！？」

コトネ「何で！？」

タクヤ「蜻蛉返しは攻撃の後にポケモンを交代できるんだよ。ユンゲラー、サイコネシス！」

ユンゲラーはサイコネシスでクロバットを捕まえる。効果は抜群なので、クロバットはとても苦しんでいるようだ。

カズナリ「抜け出して、クロバット！」

タクヤ「無駄だ！ユンゲラー、思いっきり地面に叩きつける！」

ユンゲラー「ユンゲラアアア……！！」

クロバット「クロバット！ク、クロオ……」

その一撃で、クロバットはフラフラになって、飛んでいるのがやつとだった。

カズナリ「クロバット、せめて一撃だけでも！エアスラッシュ！」

タクヤ「ユンゲラー、テレポートでかわしてサイケ光線で止め！」

クロバットのエアスラッシュをユンゲラーはテレポートしようとした。だが、スピードの問題でテレポートを使う前に当たってしまい、怯んだ。

カズナリ「よし、怯んだ！もう一回！」

タクヤ「テレポートでかわせ！そしてサイケ光線！」

またクロバットのエアスラッシュが当たり、怯む。

カズナリ「もう一回！」

タクヤ「サイケ光線！」

またエアスラッシュが当たる。しかし今度は怯まず、サイケ光線がクロバットに当たり、倒れてしまった。

カズナリ父「クロバット、戦闘不能」

ユンゲラー「ユ、ユンゲ、ラァ……」

なんと、ユンゲラーも倒れてしまった。

カズナリ父「クロバット、ユンゲラー、両者戦闘不能！」

そしてお互いのポケモンはあと一体。カズナリはおそらくドククラゲだろう。そしてこっちはゴルバット。お互い勝負はわからなくなってきた。

タクヤ「行けっ、ゴルバット！」

ゴルバット『ゴルバット！』

カズナリ「ワニノコ、お願いします！」

ワニノコワニノコワニワニワニ!!!ワニノコ

タクヤ「なっ、ワニノコ！？ドククラゲを使うかと思ってたぞ」

カズナリ「ワニノコ、アクアテール！」

ワニコワニワニ!!!

タクヤ「かわせ、ゴルバツト！怒りの前歯！」

ゴルバツト
「ゴル、バツ！」

ワニノコ ♪ ワニワァー！ ワニツ ♪

ゴルバツトはアクアテールをかわし、ワニノコに怒りの前歯がヒツトする。

カズナリ「水鉄砲！」

ワニノコ、ワーニャー！

タクヤ「翼で打つで打ち返せ！」

ゴルバツト、ゴル、ゴルバツ！

カズナリ「ワニノコ、かわしてアクアテール！」

タクヤ「ゴルバット、ギガドレイン！」

ワニノコ、ワニワニツ!

ゴルバツト、ゴルバツ！ゴルゴル、ゴルバツ！

[illegible]

!!!

ドオオオオオオオン！！！！という大きな爆発が巻き起こる。

そして、そこには、

ゴルバツト
☞ ゴルバツ
☞

ゴルバツトが悠然と翔いていた。

カズナリ父「ワニノコ、戦闘不能！ゴルバットの勝ち！よって勝者、タクヤ！」

タクヤ「サンキューゴルバット。ゆっくり休め。カズナリ、すごかったぞ」

カズナリ「はい、ありがとうございます。結局負けてしまいましたけど」

コトネ「カズナリすごい！」

カズナリ父「タクヤ君。君はすごいね。それにカズナリもすごかったぞ」

俺とカズナリのバトルも終わり、俺の対新人用ポケモンは軽い処置をして家に送り、あとの治療はメイドに任せた。いよいよ明日はシンオウに出発する日。カズナリの父さんはホテルに、俺たちはポケモンセンターの自室に戻り、明日に備えてゆっくり休むことにした。

T o B e C o n t i n u e d . . .

S e t u p 2 メイド・コトネ・カズナリ（前書き）

今回はタクヤのメイドとこの世界のコトネ＆カズナリの設定を発表します

Setup2 メイド、コトネ、カズナリ

〈名前〉

不明 基本、メイドと呼ばれる
今後名前を公開するかは不定

〈姿、服装〉

髪は金髪に腰まである長髪
顔は普通に綺麗

身長は162くらいで、スリーサイズは上からきゅ「秘密です（はあと）」

服装は基本メイド服

〈人物〉

優しく温厚な性格
案外ノリのいい人柄
年は20くらい（見た感じ）

〈ポケモン〉

タクヤのポケモンの預かり役兼世話役

〈その他〉

タクヤがいない間の家のことや、タクヤの世話をするために使われたメイド

神様曰く、「性欲処 役として使ってもいい」とのことで、本人も了承

く名前く

コトネ

く姿く服装く

アニメとすべて同じ

く人物く

アニメと全て同じ

くポケモンく

チコリータ、マリル、キリンリキはアニメと同じ
キングラーとマタドガスの二体がアニメと違う

く名前く

カズナリ

く姿く服装く

アニメとすべて同じ

く人物く

アニメと全て同じ

くポケモンく

アニメと同じなのはワニノコ

ゴース ゴースト、クロバット、ドククラゲの三体がアニメと違う
なお、アニメ通りフカマルはゲットする予定

Episode 17 シンオウ上陸！ ジョウトフェスタ！！

タクヤ「シンオウか……。本気の俺に相対できるトレーナーいかな」

ここはシンオウ地方行きの飛行艇。シンオウでジョウトフェスタを開くために俺たちはシンオウに向かっているのだ。

コトネ「ねえおじさん。今回のシヨ一の賞品は？」

カズナリ父「ポケモンの卵だよ」

と言つてカズナリの父さんは孵卵器に入つた卵を取り出した。

タクヤ「コトネ、シヨ一って何をするんだ？」

コトネ「ジョウトの新人用ポケモンのチコリータ、ワニノコ、ヒノアラシと、各地の新人用ポケモンのバトルよ。勝てば賞品として卵を渡すの」

タクヤ「シンオウつつーとナエトル、ポツチャマ、ヒコザルだな」

コトネ「シンオウ地方のポケモン見の楽しみだなー」

カズナリ「僕も楽しみだな」

カズナリ父「そろそろ着くみたいだよ」

タクヤ「ああ、楽しみだなー！」

いざ、シンオウ上陸！

タクヤ「シンオウ上陸だー！！！」

カズナリ父「今からフェスタの準備をするから、カズナリたちはそのへんを見てきてもいいよ」

カズナリ「僕も手伝うよ。コトネたちで行ってきて」

タクヤ「俺、ちょっとナナカマド博士に会ってくるよ。大丈夫、フエスタは明日からだろ？すぐもどるから」

コトネ「ちよつとタクヤ!？」

俺は返答も聞かず、ボーマンダを出して飛び去った。

タクヤ「ボーマンダ、この、マサゴタウンってどこまで頼む」
ボーマンダ『マンダッ!』

そう言つてポケギアのマップ機能を使ってボーマンダに教える。
するとボーマンダはハイスピードで飛び始めた。

一方コトネたちはというと……

コトネ「いいなー、私もナナカマド博士と会ってみたいなあ」
カズナリ「でもタクヤさん、ボーマンダに乗ってすごいスピードで飛んでいったよ」

カズナリ父「確かにあのスピードは、良く育てられているよ」

そんな風にタクヤについての話で盛り上がっていた。

そして1時間半後。タクヤとボーマンダはもうマサゴタウンの研究所前に来ていた。

タクヤ「御免くださいーい!」

ボーマンダ『マンダッ!』

?「はい?」

タクヤ「ああ、ここの研究員さんですか?俺はトレーナーのタクヤです。ナナカマド博士に会いたいのですが」

研究員「ああ、ナナカマド博士なら中に。どうぞ入ってください」

タクヤ「ありがとうございます。ボーマンダ、お前は戻っててくれ」

ボーマンダをボールに戻し、ナナカマド研究所に入る。見渡せばいろんな機械があり、そこにナナカマド博士がいた。俺の方をふと見ると、興味深そうに眺めてきた。

ナナカマド「おや、お前さんは？」

タクヤ「俺、ジョウトのトレーナーのタクヤって言います。せつかくシンオウに来たので、研究者の権威であるナナカマド博士に一目お会いしたいと思いましたので」

ナナカマド「そうか、ジョウトのトレーナーか」

タクヤ「俺、聞きたいことがあるんですよ。どこかに強いトレーナーはいませんか？」

ナナカマド「ふむう、強いトレーナーか。というとシンジ君や、カントーのマサラタウンから来たというサトシ君だろうか？」

タクヤ「サトシ君って、カントーリーグ、ジョウトリーグ、ホウエンリーグにも出場していたあのサトシ君ですか？」

ナナカマド「そうじゃな」

タクヤ「ありがとうございます。じゃあ、俺は先を急ぐのでこれで」

ナナカマド「もしもサトシ君に会ったらよろしく伝えてくれ」

タクヤ「はい！いくぞボーマンダ！」

俺は再びボーマンダを出し、飛び立つ。ボーマンダも疲れてきたのか、さっきより遅く、2時間くらいでコトネたちのところに着いた。

タクヤ「ただいまー！」

ボーマンダ『マンダッ！』

コトネ「もう、いきなり飛び立つんだから。で、ナナカマド博士はどうだった？」

カズナリ「それは僕も気になります」

俺はさっきナナカマド博士と話した強いトレーナーのことを話した。まあ、実名は出さなかったけど。

コトネ「へー、会ってみたいなー」

カズナリ「そうだね」

タクヤ「それじゃあ、この地方で何が釣れるのか、釣りしてこようかな」

コトネ「あつ、私も行く！」

カズナリ父「行つてらっしゃい」

カズナリ「僕はこつちを手伝ってます」

そして、近くを流れる小川で……

タクヤ「何が釣れるかな？」

コトネ「まっ、楽しみってことね」

マリル『リルル〜』

コトネはいつの間にかマリルを出していた。

30分後

タクヤ「釣れねえな」

コトネ「釣れないね」

そんなことを呟きながら釣りを続ける二人。

タクヤ「はあ……」

コトネ「釣れない……」

さらに30分後

タクヤ「釣れない」
コトネ「うん」

まだ釣れない。

またもや30分後

タクヤ「釣れねえ」

結局その日は何も釣れずに、俺たちはポケモンセンターでポケモンを回復し、ホテルで一日を終えた。

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 18 ジョウトフェスタ in シンオウ!!

コトネ「マリル〜？マリル〜！？」

タクヤ「はあ、またか」

今、シンオウ地方ではジョウトフェスタが開催されている。そして、そのスタッフであるコトネと、そのコトネ一緒に旅する俺は、コトネのマリルを探していた。

タクヤ「俺、ちつと向こう探してくるから」

コトネ「うん。じゃあ私はこっち」

俺たちはそれぞれ違う方向を探しに行く。そして、俺の走る目の前にあったのは、まさにサトシのピカチュウとヒカリのポッチャマがマリルを引き抜いているところだった。

タクヤ「あー、そのマリル……」

ヒカリ「このマリル、あなたの？」

タクヤ「ああ、違うよ。俺と一緒に旅してるトレーナーのポケモンだよ。いつもすぐいなくなるんだ」

コトネ「タクヤー！あつ、いたいた」

マリル『リルー！』

タクヤ「おう、コトネ」

コトネはマリルをボールに戻し、自己紹介を始めた。

コトネ「私、トレーナーのコトネ」

タクヤ「俺はタクヤだ。まあ、16歳だけどあんま気遣わなくていいよ」

コトネ「あなたたちは？」

コトネはサトシたちに話す。

タクヤ「確か、こっちがカントー、ジョウト、ホウエンの三地方のリーグに出場してたサトシ君じゃないか？俺、テレビ見てたんだ」

サトシ「俺のこと知ってるんですか？」

タクヤ「まあな。で、こっちはカントーはニビシティの元ジムリーダーのタケシ君じゃないか」

タケシ「俺のことも知ってるんですか？」

タクヤ「ま、ジムリーダーとなると何かと有名だろ？で、こっちは？」

俺は、ヒカリについて聞いてみる。もちろん知っているが、怪しまれるだけだ。

ヒカリ「あたしはヒカリ。この子はパートナーのポッチャマ」

ポッチャマ『ポッチャマ！』

サトシ「さつきタクヤさんが言っただけ、俺はサトシ。こっちが相棒のピカチュウ」

ピカチュウ『ピッカチュウ』

タケシ「俺もタクヤさんが言っただけ、タケシだ。元ニビジムリーダーの今はブリーダーなんだ」

コトネ「ま、よろしくって事ね」

タクヤ「よろしくな」

コトネ「ふーん、ポッチャマかー」

コトネは図鑑を取り出して調べた。

ポッチャマ ペンギンポケモン。歩くのは苦手で転けたりするが、

プライドは高く堂々と胸を張る。

ヒカリ「それってポケモン図鑑!？」

コトネ「そ、ジョウトじゃこれが最新型なんだ」

サトシ「ジョウトか、懐かしいな」

タクヤ「そうか、サトシ君はジョウトリーグに出場経験があるから、旅したことがあるんだね？」

サトシ「はい」

タクヤ「そだ、コトネ。アレに連れてってやるうぜ」

コトネ「おっ、いいね。面白いところに連れてってあげる」

そう、ジョウトフェスタに連れてってあげるのだ。

ヒカリ「面白いとこ？」

タクヤ「あっちの広場でジョウトのフェスタやってんだ」

サトシ「フェスタ？」

コトネ「来ればわかるって。さ、行こうよヒカリン」

パチン、とウィンクをして、いつものあだ名癖でヒカリちゃんを呼ぶ。

ヒカリ「ひ、ヒカリン？」

タクヤ「悪いな、こいつの悪い癖だ。ま、行こうぜサトシ君、タケシ君、ヒカリちゃん」

そういつて俺は三人を引き連れて広場に戻っていった。

ヒカリ「うわあ」

サトシ「スゲエ」

サトシとヒカリは驚く。結構大きなフェスタだから、驚いてもしょうがない。

そのとき、ピリリリ、ピリリリ、とコトネのポケギアが鳴った。コトネはポケギアを取り出すと、サトシが頭にハテナを浮かべながら聞いてきた。

サトシ「それって？」

コトネ「ポケギアよ。電話とか地図とか、いろんな機能がついてるの」

タクヤ「俺も持ってるし」

俺もポケギアを取り出してみせる。コトネは電話に出る。相手はカズナリだった。

コトネ「もしもし？」

カズナリ「コトネ？今どこにいるんだよ？あとタクヤさんも」

コトネ「タクヤは一緒にいるよ。今すぐもどるから」

コトネは電話を切り、俺達二人はサトシたちに向き直った。

タクヤ「これがジョウトフェスタだ」

コトネ「私たち、このフェスタをあちこちの地方でやって、ジョウトをPRしてるの」

サトシ、ヒカリ、タクシ「へえ」

そのとき、モニターに映像が写った。コトネ出演のPVのようだ。

PVコトネ「皆さん、こんにちは」

ヒカリ「ああ、あれって！」

サトシ「コトネじゃないか！」

PVにコトネが映っているのを見て、サトシたちも驚く。

タケシ「へー、二人はこのフェスタのスタッフなのか」

コトネ「あはははは、まあね／＼ あんなのもやってるって事ね／＼」

タクヤ「まあ俺は飛び入りみたいなもんだけどな」

一時PVを見ていると、タケシがエンジュの舞子さんを見て「舞妓はああん」と悶えながら言っていたりした。

そして俺たちはカズナリの父さんが担当しているコーナーに戻ってきた。

カズナリ父「ジョウト名物ボンドリンクに、モーモーミルクが試飲できますよ」

カズナリ「さあ、どうぞどうぞ！」

コトネ「おまたせー！」

タクヤ「すみません、遅くなりました」

カズナリ「コトネ、タクヤさん」

サトシ「こんにちは」

カズナリ父「ようこそ、ジョウトフェスタへ」

ヒカリはカズナリのワニノコを見つけて、図鑑を取り出した。

ワニノコ 大顎ポケモン。発達した顎を持ち、何にでも噛み付く習性があるので、トレーナーも注意が必要。

ピカチュウ『ピッカ！』

ポッチャマ『ポチャ！』

ピカチュウとポツチャマがワニノコに挨拶する。だが、一睨みして『ワニヤ!』、とそつぱをむいた。

ヒカリ「このワニノコ、ずいぶんクールね」

カズナリ「僕のワニノコなんだ。いつもこうだよ。それに、僕の作ったポケモンフーズは、あんまり食べなくて」

そう言うと、タケシはポケモンフーズを一粒取りサクツ、と子気味いい音を立てて少し齧る。そして、

タケシ「渋味が足りないみたいだな。カゴの実はあるかい？」
カズナリ「えっ？」

一成は疑問符を浮かべてカゴの実を取り出した。タケシはそれを磨り潰して粉末状にし、ポケモンフーズに振り掛けてワニノコの前に出した。

タケシ「さあどうぞ」

ワニノコ『ワニワニワニワニ……』クンカクンカ

タケシが出したポケモンフーズの匂いを嗅ぐ。そして、

ワニノコ『ワニヤワニヤワニヤワニヤ』

美味しそうに食べ出した。それを見て「へえー!」、と感心するカズナリだった。

コトネ「私とタクヤが連れてきたんだよ。どおどお?すごい?」

タケシ「世界一のポケモンブリーダーを目指してるんだ」

カズナリ「うわあ、本当ですかあ!?!」

タケシ「よし、後でいろんなレシピを教えてあげるよ」
カズナリ「ありがとうございます！」

そのあと、カズナリの父さんがサトシたち三人に、モーモーミルクから作ったソフトクリームを渡したりして、ジョウトフェスタを楽しんでいる様子だった。

カズナリ父「コトネのお友達かい？」

コトネ「うん。マリルを助けてくれたの」

タクヤ「サトシ君にタケシ君にヒカリちゃんです」

サトシ「初めまして」

カズナリ「僕、カズナリです！」

カズナリ父「カズナリの父です」

コトネ「じゃじゃーん！カズナリのお父さんは、ズバリこのフェスタの責任者って事ね。でもってカズナリは、これでもブリーダーなんだよ？」

カズナリ「これでもなんて酷いな」

いや、実力的に「これでも」で充分だと思う。

サトシ「コトネは、トレーナーって言うってたよな？」

コトネ「うん。タクヤと一緒に、ジョウトのジムを回ってるの。あなたたちは？」

サトシ「俺は、シンオウリーグに挑戦中さ。シンオウに来て、バッジを7個ゲットしたんだぜ？」

ピカチュウ『ピカピカ！』

コトネ「すごい！私たちは、まだバッジは二個。キキョウジムのウイングバッジと、ヒワダジムのインセクトバッジよ。で、ヒカリンは？」

ヒカリ「あたしは、コーディネーター。今はスイレンタウンのコン

テストを目指してるのよ」

コトネ「へえ、私はバトル専門だけど、コーディネータの友達できたの初めてよ」

そんなふうには話しているとき、ワニノコが急に話しかけてきた。

ワニノコ『ワニワニ!』

コトネ「えっ、何、ワニノコ?」

タクヤ「そろそろショーの時間ってことじゃねえか?」

コトネ「あっ、忘れてた!」

ヒカリ「ショー?」

タクヤ「ジヨウトのポケモンを紹介するショー」

コトネ「みんなも是非見ていってよ」

サトシ「ヒカリ、タケシ、うん!」

全員が元気よく頷く。いよいよショーの始まりだ。俺は、カズナリの父さんにあることを頼んでおいたから、そのときが来るのが楽しみだ。

To Be Continued...

コトネ「シンオウ地方のみなさん、こんにちは！」

コトネがステージに上がり、来客へ挨拶する。いよいよショーの始まりだ。

コトネ「ジョウト地方のワカバタウンからやって来た、コトネです。ジョウトでは、新人のトレーナーは、チコリータ、ヒノアラシ、ワニノコのどれかをもらえます。シンオウ地方では、珍しいポケモンばかりって事ね」

「わぁー」、と来客たちが興奮している。チコリータやヒノアラシ、ワニノコは滅多に見られないポケモンだからだ。

コトネ「チコリータ、出番よ！それっ！」

チコリータ『チッコ〜！』

コトネはチコリータを出す。

ヒカリはチコリータを図鑑で調べていた。

コトネ「あ、あたし？」

ポッチャマ『ポチャ？』

ヒカリが名指しされ、？を頭に浮かべていた。これはアニメのバトルイベントだ。

コトネ「これからチコリータとポケモンバトルをしてもらいたいと思います。ささ、ステージへどうぞ」

コトネはヒカ리를ステージに上がるよう促す。来客もヒカ리를羨ましそうに見ている。

タクヤ「ここからは俺が審判、兼進行として話しましょう。もしコトネのチコリータに勝つたら、記念に素晴らしい賞品を渡します」
ヒカリ「えっ……？ よおし！」

ヒカリは賞品と聞いて気合が入ったようだ。

タクヤ「これより、コトネvsヒカリのバトルを行います。使用ポケモンは一体。どちらかが戦闘不能になったとき、試合終了とします。なお、道具の使用は認められません」

ヒカリ「行くわよ、ポッチャマ！」

ポッチャマ『ポチャー！！』

チコリータ『チコーー！！！！』

コトネ「そうこなくっちゃ！！！！」

サトシ「ヒカリ、頑張れ！！！！」

サトシもヒカリにエールを送る。ヒカリも気合が入っていた。

タクヤ「シンオウの新人用ポケモンvsジョウトの新人用ポケモンの組み合わせで贈るバトル！それでは、ポッチャマvsチコリータのバトル、始め！」

コトネ「チコリータ、葉っぱカッター！」

チコリータ『チーッ、コーーッ！！！！』

ポッチャマ『チャーラーッッ』

タクヤ「チコリータの先制！葉っぱカッターが直撃いー！！！！」

チコリータは葉っぱカッターを放つ。ポッチャマはよけられず、

当たってしまった。

ヒカリ「ポツチャマ、バブル光線！」

ポツチャマ『ポチャー……。ポツチャマアアアア！！！！』

コトネ「光の壁！」

チコリータ『チコー』

タクヤ「ポツチャマ、反撃のバブル光線！しかし光の壁で阻まれた
アー！！！」

ポツチャマはバブル光線を放つが、光の壁に阻まれ、ダメージは半減する。

ヒカリ「ポツチャマ、つつくよ！」

ポツチャマ『ポツチャマーーーーッッッ、チャーーーーッッ！！』

チコリータ『チコーーーーーッッ！！』

チコリータ「よしっ、効果は抜群」

タクヤ「おっと、ここでポツチャマのつつくが直撃！チコリータ、大丈夫かあ？」

カズナリ「チコリータは草タイプだから、飛行タイプのつつくは、ダメージが大きいね」

カズナリが冷静に解説している。その内にヒカリは攻撃を続ける。

ヒカリ「ポツチャマ、もう一回バブル光線！」

ポツチャマ『ポーチャマーーーーッッッ！！！！！！』

コトネ「光の壁！」

チコリータ『チコッ！』

タクヤ「おっと、またもや光の壁でバブル光線を防ぐチコリータ！
このままではチコリータ、攻撃できずにジリ貧だぞあ？」

コトネのチコリータは光の壁でガード。しかし全くダメージがないわけではないのでこのままいけばジリ貧だ。

ヒカリ「つつくで突破よ！」

ポツチャマ『チャーーー、チャーーーッッ！！！！！』

チコリータ『チコーーッッ！』

サトシ「決まった！」

チコリータはつつくを受け、吹っ飛ばされた。

タクヤ「あーっつと、つつくを受けたー！これは戦闘不能か？」

俺はチコリータをのぞき込む。案の定戦闘不能になっていた。

タクヤ「チコリータ、戦闘不能、ポツチャマの勝ち！よって、勝者ヒカリ！」

ヒカリ「やったわ！」

タクヤ「光の壁は、バブル光線には効果があっても、つつくには効果はない」

カズナリ「ヒカリの、作戦勝ちってことだね！」

コトネ「私の判断ミスだったって事ね。ごめんねチコリータ。でもよく頑張ってくれたわ」

コトネはチコリータをボールに戻して言った。

ヒカリ「ご苦労様、ポツチャマ」

ポツチャマ『ポチャ！』

コトネ「おめでとうヒカリン」

タクヤ「おめでとう、ヒカリちゃん。ほら」

ヒカリ「ん？」

俺は、ヒカリに孵卵器が入った箱を手渡した。

タクヤ「今、素敵な賞品が手渡されました！」

コトネ「開けてみて、ヒカリン」

ヒカリ「何かしら？」

ヒカリは箱を開けると驚いた。

ヒカリ「わあ」

タクヤ「プレゼントはなんと、ポケモンの卵だー！！！！」

ヒカリ「ポケモンの卵か、すごい！！！」

ヒカリ「ありがとう、コトネ、タクヤさん」

コトネ「どんなポケモンが生まれるかは私にもわからないって事ね」
タクヤ「楽しみにしていなよ？」

そんなおめでとうムードの中、ドオオオオオオオオオオ！という音が鳴り響いた。

ヒカリ「あっ」

コトネ「なんなのあれは？」

サトシ「ロケット団！」

カズナリ「フェスタの試食品をあんなに」

タクヤ「ロケット団？シンオウに何でカントーの組織がいるんだよ」

もちろん、アニメを見ていた俺は知っているが、知っていたら怪しまれるだけだ。このイベントを回避するために、ムサシ、コジロウ、ニャースには、早々と立ち去ってもらおう。

ムサシ「あっ、ジャリボーイ！」

カズナリ父「おい、その試食品を返せ！」

ムサシ「おい、その試食品を返せ！の声を聞き」

コジロウ「光の速さでやってきた」

タクヤ「行けっ、ゲンガー！トリックでその岩と試食品を入れ替える！」

ロケット団「え？」

ゲンガー「ガーーーーッッ！！！」

俺はさっさとゲンガーを出し、トリックで岩と試食品を入れ替えた。

タクヤ「出番だテッカニン！シザークロスで気球を粉々にしてしまえ！」

テッカニン「テッカ！」

テッカニンはシザークロスで気球を粉々にする。するとアニメ補正よろしく気球が爆発した。いちいち長え^{なげ}んだよ、こいつらの登場セリフ。

ムサシ「なんで登場セリフの間に攻撃されるの？」

ニヤース「登場してすぐ退場だニヤンて」

コジロウ「しかも登場セリフすら言い切ってないぞ」

ロケット団「やなかんじー！！！！！」

ソーナンス「ソオーーーーナンス！！！」

ロケット団はさっさと退場していった。すると来客全員が「うおーーーー！」とさげんだ。

タクヤ「さんきゅー、ゲンガー、テッカニン」

ゲンガー「ガー！」

テツカニン『テツカ!』

タクヤ「カズナリの父さん、試食品取り返しました」

とにかく、取り返した試食品を、カズナリの父さんに渡した。

カズナリ父「ありがとう、タクヤ君、ゲンガー、テツカニン」

タクヤ「どういたしまして」

ゲンガー『ガー、ゲンガー!』

テツカニン『テツカ、テツカ!』

コトネ「やっぱりタクヤはすごいって事ね」

サトシ「スゲエ、タクヤさんのポケモン。テツカニンは色違いだ!」

タケシ「このゲンガーとテツカニン、とてもよく育てられているぞ」

ヒカリ「うわあ、色違いだあ!」

ポツチャマ『ポチャア!』

すると、俺をサトシがキラキラとした目で見つめてきた。おつ、これはもшыゃ?

サトシ「タクヤさん、俺とバトルしてください!」

タクヤ「そのことなんだが、ちよつといいかい?」

俺はステージにサトシを上げ、マイクを手にとった。

カズナリ父「おや?タクヤ君、その子にするのかい?」

タクヤ「はい。皆さん、聞いてください!これよりスペシャルイベント、俺vsこのサトシ君の3on3のバトルをします!」

サトシ「ええっ?」

タクヤ「もともとこれを計画していたのですが、サトシ君の先程の要望に応えるのにちょうどいいと思い、このイベントの相手をサトシ君に決めさせてもらいました!」

そう、計画していたのはこれなのだ。

タクヤ「バトルフィールドは、この近くの広場を使います。ご覧になりたい人は、今から10分後、その広場に来てください！それでは！」

いよいよ、夢だったサトシとのバトルが始まる！

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 19 チコリータvsポツチャマ！ ショーとあのロケット団と

次の話は、タクヤvsサトシの3on3ガチバトルです！

E p i s o d e 2 0 タクヤvsサトシ！ ガチバトル3on3！！（前書き）

いよいよ20話目突入

タクヤvsサトシです！！

Episode 20 タクヤvsサトシ！ ガチバトル3on3！！

タクヤ「皆さん、俺とサトシ君のバトルのために集まっていたいただき、ありがとうございます！！」

観客「うおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

観客はさっきのフェスタ以上の人数になっていた。どうやら来客たちが友人を連れてきたり、家族を連れてきたり、噂や話題になっていたようだ。

ヒカリ「すごい人数」

ポツチャマ「ポチャポチャ」

タクシ「タクヤさんのポケモンがどんななのが勝敗の決め手だな」
コトネ「サトシのポケモンがどんなのかは知らないけど、タクヤはすごく強いよ。今まで、本気を出したことがないのに、ジムリーダー戦でも戦闘不能になったことないんだから」

カズナリ「たしかに、僕が2体倒したのも、対新人用ポケモンだったみたいだから、今回、本気を出すと言ってたタクヤさんの実力は計り知れないよ」

タクシ「本気を出していないのに、ジムリーダー相手でも一匹も戦闘不能になったことがない！？」

ヒカリ「どれだけ強いよ、それ……」

ポツチャマ「ポツチャマ……」

おいおい、過大評価しすぎじゃないのか？

タクヤ「では、審判はカズナリの父さん、お願いします」

カズナリ父「それではこれより、タクヤ対サトシのバトルを行う！使用ポケモンは3体。どちらかのポケモンがすべて失われたときに

試合終了とします！」

タクヤ「サトシ君、君はナナカマド博士から見どころのあるヤツだと聞いたよ。だから今回は、本気を出させてもらっ。出番だ！押し流せ、スターミー……！」

サトシ「スターミーか、あいつを思い出す……。水タイプなら電気タイプ。行けっ、ピカチュウ！」

ピカチュウ『ピカッ！』

俺は手持ちの切り込み隊長、スターミーを出した。

タクシ「タクヤさんはスターミーか」

ヒカリ「相性ではサトシが有利だけど……」

ポツチャマ『ポチャ……』

コトネ「タクヤのスターミーのバトルは初めて見るなあ」

カズナリ「タクヤさんのポケモンだから、凄そうだな……」

いよいよバトルが始まる。

タクヤ「サトシ君、君が先行でいいよ」

サトシ「はい！」

カズナリ父「それでは、始め！」

サトシ「ピカチュウ、先手必勝！10万ボルト……！」

タクヤ「かわせ！」

ピカチュウ『ピイカアチュー……！！……！！』

サトシ「は、速い！？」

スターミーは一瞬でピカチュウの後ろに回る。

タクシ「あのスターミー、相当な速さだぞ！」

タクヤ「今度はこっちから！スターミー、10万ボルトをお返しだ

！」

ピカチュウ『チュ、チュウ……』

タケシ「パワーも相当なものだぞ！」

サトシ「ピカチュウ！クソッ、電光石火！」

ピカチュウ『ピッカア！！』

タクヤ「サイコネシスで受け止める！」

ピカチュウはサイコネシスに捕まった。

タクヤ「そのまま上に放り投げてハイドロポンプ！」

上に放り投げ、ハイドロポンプをヒットさせる。その一撃でピカチュウはもうボロボロだった。かろうじて戦闘不能に放っていなかったが……

タクヤ「今の一撃を受けて倒れないとは、相当なガッツだな」

サトシ「このままじゃキツイ。一旦戻れ、ピカチュウ。行けっ、ム

クホーク、君に決めた！！」

うーん、生の「君に決めた！」最高！

ムクホーク『ムクホー……ック！！！！』

タクヤ「交代か。だったらこっちも。戻れスターミー！掻き回せ、

テッカニン！」

テッカニン『テッカ！！！！』

俺はテッカニンを出す。やはり不利なタイプを出したことで、観客は驚く。

ヒカリ「テッカニン！？タイプ相性じゃ不利なのに！」

タケシ「もしかして、何か考えがあるのか!？」

テッカニンの出番。コイツは俺の相棒だ。

サトシ「色違いのテッカニン。タイプで不利なのに、何か考えがあるんだろうか……」

タクヤ「コイツは俺のパートナーだ。そして、君は今何で不利なタイプのポケモンを出したか不思議に思ってるだろう?」

サトシ「は、はい」

タクヤ「一つだけ言っておこう。いくら不利でも、当たらなければ意味がない!テッカニン、フルスピード行くぞ!」

テッカニン『テッカ!』

サトシ「さ、さっきより速い!ロケット団の時は本気じゃなかったのか!?ムクホーク、電光石火!」

タクヤ「テッカニン、高速移動から影分身!」

テッカニン『テッカ!テッカ、テッカ、テッカテッカテッカテッカ!……!』

テッカニンのスピードが加速でどんどん上昇していく。この世界では能力の上昇に上限がないので、素晴らしいスピードになっている。

タケシ「あのテッカニン、そうとう速いぞ!分身の数も相当だ!」

ヒカリ「サトシ……」

おのの
戦くタケシとヒカリ。観客たちもすごい声を上げている。

サトシ「クソッ、全然当たらない!」

タクヤ「ほらっ、まだまだ行くぞ、身代わりから5回連続で剣の舞!……!」

テツカニン『テツカ！！！』

テツカニンが不思議な踊りを踊る。剣のような影が見えたかと思うと、テツカニンのパワーが上昇していた。

タクヤ「これでテツカニンの出番は終わりだ。心の眼からバトンタッチ！」

俺はテツカニンのボールと、アイツの入ったボールを掲げた。

タクシ「マズイ！バトンタッチだ！」

ヒカリ「バトンタッチ？」

カズナリ「全てのポケモンの変化を受け継いで交代する技だよ」

ヒカリ「ええっ！？それって」

タクシ「ああ。あの影分身も、身代わりも、剣の舞も、高速移動と特性の加速で上昇したスピードも」

コトネ「次のポケモンに受け継がれるって事ね」

俺が次に繰り出したのは、こいつだ。

タクヤ「打ち碎け、ドサイドン！！！」

ドサイドン『ドッサアアアアイドン！！！！！！』

サトシ「なっ、影分身が全てドサイドンになった！？」

タクヤ「テツカニンのバトンタッチだ。すべての変化を受け継いで交換するんだよ。心の眼も受け継いでいるから、技も一度だけ必中だ。ドサイドン、角ドリル！！！」

ドサイドン『サアアアア！！！！！！！！』

サトシ「速いっ！？なんとかかわしてくれ！」

タクヤ「無駄だ！心の眼の効果を受け継いでいる！」

ムクホーク『ムクホオオオオク！！！！！！』

サトシ「ムクホーク……!!」

ムクホーク『ム、ムクホー……』

カズナリ父「ムクホーク、戦闘不能、ドサイドンの勝ち!」

観客が盛り上がる。もうドサイドンは止まらない。

サトシ「ムクホーク、ゆっくり休んでくれ。ハヤシガメ、君に決めた!」

ハヤシガメ『ガメツ……!!』

サトシ「ハヤシガメ、エナジーボール!」

ハヤシガメ『ガア、メエ……!!』

タクヤ「跳べ、ドサイドン」

ドサイドン『ドサイドオン……!!』

サトシ「跳んだ!？」

タクヤ「高速落下、メガホーン……!!」

ドサイドンのメガホーンが決まる。体重や重力加速度も重なって、相当な威力になってしまった。

カズナリ父「ハヤシガメ、戦闘不能、ドサイドンの勝ち……!」

サトシ「戻れハヤシガメ、ゆっくり休んでくれ。ピカチュウ、君に決めた!俺は最後まで全力で戦う!」

タクヤ「うんうん、あきらめない精神。いいね!戻れ、ドサイドン。」

最後はパートナー対決と洒落込もう。掻き回せ、テッカニン!」

テッカニン『テッカ……!!』

最後のポケモンピカチュウはもうフラフラだ。さっさと決めさせてもらおう。

タクヤ「テッカニン、影分身!そこからシザークロスだ!」

カズナリ父「ピカチュウ、戦闘不能、テッカニンの勝ち！よって勝者、タクヤ！」

観客「わあああああああああああああ！！！！！！」

一気に観客が盛り上がり、俺とサトシのバトルが終わった。

タクヤ「サトシ君、君は本当に見処のある少年だ。いずれは俺を凌ぐトレーナーになる。頑張れよ」

サトシ「はいっ、ありがとうございます。まさか穴を掘るで地中にいるとは思いませんでした」

タクヤ「君のポケモンにこれを使っておいでくれ」

俺は回復の薬を3つ渡した。

サトシ「ありがとうございます」

ヒカリ「あれ？卵が……」

カズナリ「これはもしかして？」

光の卵も、今孵つたようだ。

ヒカリ「わあ、ヒノアラシ！」

ヒノアラシ『ヒノヒノ……』

タクヤ「ヒノアラシの卵だったのか……」

ヒカリ「よろしくね、ヒノアラシ」

ヒカリはヒノアラシを抱き上げる。すると背中が燃え上がり、ヒカリの顔がアニメ補正よろしくモジャモジャになってしまった。

ヒカリ「あっつい……」

みんなもアニメ同様笑う。

タクヤ「そうだ、カズナリの父さん」

カズナリ父「ん？なんだい」

タクヤ「ジョウトフェスタが終わっても、シンオウに何日か滞在するんですよ？」

カズナリ父「そうだよ？」

タクヤ「俺、一時サトシ君たちの旅についていきたいんです」

カズナリ「僕も、タケシさんにブリーダーのことをいろいろと教えてもらいたいんだ」

タケシ「俺に？」

コトネ「私も、もうすぐ開かれるスイレントタウンのコンテストを見てみたい！」

カズナリ父「いいよ。君たち、この三人をよろしく頼むよ」

サトシ、ヒカリ、タケシ「はい！」

アニメイベント同様、サトシたちの旅についていけることになった俺達だった。

To Be Continued...

E p i s o d e 2 0 タクヤvsサトシ！ ガチバトル3on3！！（後書き）

スターミーのアニメの鳴き声は表現しづらいので、省略させていた
だきました

Episode 21 谷間の発電所は危険が一杯！！

ヒカリのコンテスト出場のため、スイレンタウンを目指す俺達。
今はポケモンたちが食事をしている。

ヒカリ「さあヒノアラシ、食べて」

ヒノアラシ『ヒノヒノオ』

ヒノアラシは喜んで食べ出す。

コトネ「私があげた卵から孵ったんだから絶対良い子って事ね」
タクヤ「スゲエ食べっぷりだな」

ヒノアラシはすごいスピードで食べまくっている。

ポツチャマ『ポチャポチャー！ ポチャ？』

ポツチャマがヒノアラシに気づく。

ヒカリ「ポツチャマ、新しい仲間だから仲良くな」
ポツチャマ『ポツチャマ』

任せる！と言わんばかりに胸を張るポツチャマ。

ポツチャマ『ポチャポチャ』

「よろしく」と言ってるようにヒノアラシに話しかけるポツチャマ。

ヒノアラシ『ヒノオ？ヒノ』プイ
ポツチャマ『チャア！？』（；。。）！

ヒノアラシはそっぽを向く。ポツチャマはそれにショックを受けていた。しかしめげずに話しかけるポツチャマ。

ポツチャマ『ポチャ！』

ヒノアラシ『ヒノヒノヒノヒノ』

ポツチャマ『チャア！？』（。 111）

また話しかけてそっぽを向かれるポツチャマ。

ポツチャマ『ポオチャアアア』、（、。 ）ノ

ポツチャマは怒り出す。そして、ヒノアラシのお尻を啄んだ。

ヒノアラシ『ヒノオ~~~~』？（＞＜）！！

ポツチャマ『ポツチャツチャツチャ』（^ ^）

痛がるヒノアラシを見て笑うポツチャマ。今度はヒノアラシの反撃。

ヒノアラシ『ヒンノオオオ……。ヒノツヒノツヒノツヒノツ！！！！』
ポツチャマ『チャー！ポチャチャチャー！ポチャーーーーッ！！！！！！』

ヒノアラシは鼻の先でつつく。

ポツチャマ『ポチャア〜』

ヒノアラシ『ヒノオ〜』

ピカチュウ『ピカピカ』

ピカチュウが仲介役として入る。ほんと、苦勞人だなサトシのピカチュウは。

タクヤ「まったく、何喧嘩してんだよ」

ヒカリ「ダメでしょう、仲良くしなきゃ」

サトシ「なあヒカリ、バトルしてみないか？」

ヒカリ「バトル？」

タクヤ「確かに、ヒノアラシのことを知るには、バトルが一番だからな」

ヒカリ「そうね。ヒノアラシ、バトルよ」

ヒノアラシ『ヒノヒノーツ!!』

サトシとヒカリのバトルか……

サトシ「俺のポケモンは、ハヤシガメ、君に決めた！」

ハヤシガメ『ガアメ!』

ヒカリ「ヒノアラシの使える技は」

ヒカリは図鑑を取り出し、技を調べ出した。

ヒノアラシの使える技は、火炎車、スピードスター、煙幕。

ヒカリ「うん、なかなかの技を覚えてるわね」

サトシ「いくぞヒカリ!」

ヒカリ「いいわよ」

サトシ「ハヤシガメ、葉っぱカッター!」

ハヤシガメ『ンガァ!』

ヒノアラシ『ヒノーツ!』

ハヤシガメのハツパカッターをジャンプでかわす。なかなかの身のこなしだ。

ヒカリ「ヒノアラシ、火炎車！」

ヒノアラシ「ヒノツ、ヒノオ……！」

ハヤシガメ「ガアメ……！」

サトシ「やるなあ、ヒノアラシ。いい火炎車だ！」

ヒノアラシ「ヒノヒノオ」

サトシ「これならどうだ？ハヤシガメ、エナジーボール！」

ヒノアラシ「ヒノツ」

またもジャンプでかわす。

ヒカリ「ヒノアラシ、スピードスター！」

ヒノアラシ「ヒノツ……！」

ハヤシガメ「ンガンガッ……！」

ヒノアラシのスピードスターがクリーンヒット。ハヤシガメが呻く。

サトシ「行くぞ、ハヤシガメ！葉っぱカッター！」

ハヤシガメ「ガメツ！」

ヒノアラシ「ヒノツ！」

またまたジャンプでかわすヒノアラシ。本当にすごいやつだ。

ヒカリ「ヒノアラシ、煙幕！」

ヒノアラシ「ヒノオ」

煙幕を撒布するヒノアラシ。

ヒカリ「続けてスピードスター！」

ヒノアラシ『ヒイノッツ！』

ハヤシガメ『ンガッ！』

コトネ「やるう！」

サトシ「まだまだあ！ハヤシガメ、ロツククライム！」

ハヤシガメ『ガアアア、ンガアアアア！！！！』

ヒノアラシ『ヒノオオオ！』

ヒカリ「ヒノアラシ、大丈夫？」

ヒノアラシ『ヒノヒノオ！』

タケシ「そこまで！」

ヒカリ「え？」

タケシ「最初のバトルだし、ここまでにしておこつ」

タケシがそう言って止める。あれ？何か忘れてるような……？

ポツチャマ『ポチャポチャー！！』

ポツチャマがハヤシガメに何か言っている。

ヒカリ「すごかったわーヒノアラシ」

タケシ「なかなかだったぞ」

カズナリ「かつこよかったよー」

コトネ「初戦にしては、ヒノアラシ、あなたががんばったって事ね」

ヒノアラシ『ヒノヒノオ！』

ポツチャマ『チャー……』

ヒノアラシが褒められ、呆然としているポツチャマ。

ヒカリ「はあい、ご褒美にあなたの好きなポフィンよ」
ヒノアラシ『ヒノヒノッ』
ポツチャマ『ポーーーーッチャマ!』

ヒカリがヒノアラシにあげたポフィンを、ポツチャマが奪った。

ヒカリ「何するのよポツチャマ」
ポツチャマ『ポチャッ』(。・。・)
ヒノアラシ『ヒノオオオ、ヒノッ』
ポツチャマ『ポチャッ!?!』

ヒノアラシがキレてポツチャマに頭突きした。
またも喧嘩が勃発する。

ヒカリ「止めなさい二人とも!やめないとご飯又キ!」
ピカチュウ『ピカピイカ、ピカチュウ。ピイカ……』

またもピカチュウが止めに入った。

コトネ「なかなか難しいって事ね」
カズナリ「あれっ、コトネ。マリルは?」
コトネ「えっ、マリル?そこにいない?」
カズナリ「いないよ」

えっ?ヤベエ、マリルさまよいイベント忘れてたアアアアアア
ア!!!!!!!!!!

コトネ「また勝手にどっか行っちゃったのかしら?」

結局みんなで探すことになりました。

サトシ「マリル？」

ピカチュウ『ピカピカア？』

タクヤ「マリル？」

ヒカリ「どこ行つたの？」

コトネ「マリル？」

ポツチャマ『ポチャア？』

ヒノアラシ『ヒノヒノ？』

ポツチャマ、ヒノアラシ『ん？』（　　）

　　またも向き合つて争う。

　　坂道を登つた先にあつたのは、谷間の発電所だった。

サトシ「あれは？」

タクヤ「あれは谷間の発電所だね」

　　ポケギアで調べてから言う。

タクヤ「おそらくあそこに迷い込んだんだろう」

サトシ「行つてみよう！」

　　行つて、覗いてみる。やはりマリルがいた。

コトネ「あつ、いた！」

　　マリルを見つけるが、マリルが建物に入っていくと、自動ドアが閉じた。

コトネ「ああ」

俺たちはマリルを追いかけ、入る。するとポツチャマがヒノアラシを突き飛ばし、またも喧嘩が勃発した……かと思われたが。

ポツチャマ『ポチャアアア』

電気を受けてしびれていた。

ヒカリ「ポツチャマ!？」

コイルA『ビRRRRR』

コイルB『ビRRR、ビRRR』

カズナリ「コイルだ」

タクヤ「多分、警備をしてるんだろう」

追いかけてきたので俺たちは必死に逃げる。そして、中央管制室へと転がり込んだ。そこには管理人らしき人が眠っていた。

管理人「ん？なんじゃお前さんたちは？」

コトネ「あの、勝手に入ってすみません。実は、私のポケモンが、ここに迷い込んだんです」

管理人「ほう、ポケモンがお」

コトネ「はい。マリルなんです」

管理人「それならこの警備モニターで館内を全て見られるぞ」

そう言ってくれた直後、さっきのコイルが入ってきた。

コイルA・B『ビRRRRRR』

管理人「あー、まてまて。この子達は怪しいもんじゃないぞ」

コイルA・B『ビRRRRRR、ビ、ビ』

どうやらこの人がコイルの主人のようだ。

コトネ「えーっと、あつ、いたいた」

やっとマリルを見つけた。地下の倉庫だと教えてもらい、俺たちはそこへ直行した。

コトネ「マリル〜？」

ポツチャマ『ポチャポーチャ！』

ヒノアラシ『ヒノヒノ！』

サトシ「マリル〜？」

タクヤ「どこだ〜？」

コトネ「マリル〜？あぁっ！」

マリル『リイ？リルウ！』（　^　^　）ノ

コトネ「マリル〜！もう、勝手に行っちゃダメだって言っただしょ」

マリル『リルリルウ』

ヒカリ「よかったわね。さ、戻りましょ」

そう言ったとたん、バチンツ、という音を立てて停電した。そう思ったらすぐ回復した。俺たちは閉じ込められ、ヒノアラシとポツチャマは締め出された。閉じ込められた俺たちは、いったいどうなるのか！？

To Be Continued . . .

Episode 2 地下室からの脱出劇!!

サトシ「おかしいぞ、ドアが開かない」

タクヤ「閉じ込められた、か……」

閉じ込められるイベントに巻き込まれてしまった俺。兎に角脱出する方法を模索するか。

タケシ「今の停電で、非常ロックがかかったんだろう」

カズナリ「そんな。僕たちここから出られないの？」

ポツチャマ『ポーチャー』

ヒノアラシ『ヒノヒノー』

ドアの向こうからポツチャマとヒノアラシの音がする。

ヒカリ「ポツチャマ、ヒノアラシ！」

サトシ「ピカチュウ、ドアに向かって10万ボルト！」

ピカチュウ『ピカアチューーーーー！！！！』

ポツチャマ『ポチャチャチャチャチャ！！！！』

なんかポツチャマが痺れた声が聞こえたが、聞こえなかったことにしよう。

サトシ「ダメか……」

タクヤ「しょうがねえ。俺がなんとかしようか」

俺はバッグからパソコンを取り出して、転送システムを起動した。

サトシ「何ですか、それ？」

タクヤ「俺の自宅とつながってる転送システム。ちなみに自作だ」
タケシ「自作の転送システム!？」

タクヤ「ああ。おい、非常事態だ。シャワーズとベトベトンを送ってくれ」

メイド「了解しました」

タクヤ「サンキュー。出番だ、シャワーズ、ベトベトン!」

シャワーズ『シャワーズ!!』

ベトベトン『ベエトオベエトオオン!!』

俺はシャワーズとベトベトンを繰り出す。どうするのかというと

……

タクヤ「ドアに張り付け」

サトシ「どうするんですか？」

タクヤ「溶ける!」

シャワーズ『シャワーワァ』

ベトベトン『ベエトオ』

タクヤ「そのままドアの隙間に入り込んで溶けるを解除!」

溶けるを解除しようとする二匹。しかしドアを開けることは無理だった。このままじゃあいつらが危ないので、ボールに戻した。

タクヤ「それでもダメか……」

仕方なく二匹を転送し直す。

タケシ「そうだ、警備モニタを使えば……」

タクヤ「いや、ダメだ。あのじーさん、昼寝すると言ってた」

コトネ「待つしかないって事ね」

カズナリ「ずっと気づかれなかったらどうするの?」

タクヤ「ネガティブになんなよカズナリ。ポジティブでいこうぜ」
カズナリ「だって、あのおじいさんが僕たちに気がつかなくて、そのまま家にかえって長期休暇を取ったら!? そうなったら、そうなたら、そうなたら、この部屋で、一生過ごすことに」
タクヤ「ならねえよ」

とりあえずカズナリのネガティブシンキングにストッパーをかけるおく。

サトシ「なんかてはないのかな?」

タクヤ「だったらあれはどうだ? 通気口」

サトシ「そうか、確かめてみよう!」

タケシ「気をつけるよサトシ!」

サトシ「ああ」

タクヤ「サトシ君、ちょっとどいている。出てこいテッカニン!」

テッカニン『テッカ!』

タクヤ「シザークロスで通気口のカバーを切り捨てろ」

テッカニン『テッカ!』

テッカニンを使って通気口のカバーを切り捨てた。

コトネ視点

コトネ「もし一生過ごすとなると、ここで結婚かあ」
ヒカリ「ん?」

私はカズナリの言っていた、この部屋で一生過ごす、ということから、そんなことを考えた。

コトネ「すると、四択って事ね」

ヒカリ「えっ、何言ってるの？」

コトネ「カズナリはないから三択か……」

カズナリはカツコ悪いし、後ろ向きだし、弱虫だし、ないと思う。
それよりも私は気になっていることがある。

コトネ「サトシはヒカリンの彼？」

こういうことだ。ヒカリンはサトシとそういう関係なのか、とても疑わしい。

ヒカリ「えっ！？ち、違うわよ！」

コトネ「サトシって、結構いいよね。タクヤもなかなか……」

タクヤとも一緒に旅してて思うことがある。タクヤは強いし、結構カツコイいほうだと思うし、前向きだし、かなりの優良物件だと思う。

ヒカリ「そお？タクヤさんのことはあんまり知らないけど……」

コトネ「ねえ、ヒカリンなら、四択として誰を選ぶ？」

ヒカリ「うー……ん、考えたこともない」

コトネ「普通真っ先に考えると思うけど」

ヒカリンって、天然さん？そんなふうに考えていると、タクヤが
テッカニンで通気口のカバーを切ってしまった。

タクヤ視点

サトシ「うーん、狭いなあ。とても入っていけないや」
ピカチュウ『ピカピカア、ピカチュ』

サトシ「おつ、ピカチュウ、行ってくれるのか？」
ピカチュウ『ピカピカッ！』

ピカチュウが通気口に入っていく。

サトシ「よし、ハヤシガメ、君に決めた！」

ハヤシガメ『ンガァ！』

タクヤ「おつ、ドア破壊すんのか？」

サトシ「ああ。今度はハヤシガメの技で試してみる」

コトネ「あれっ、ピカチュウがおじいさんに知らせに行ったんじゃないの？」

タクヤ「サトシ君は見たところじつとしてられないタイプだからな。まっ、男はカズナリみたくなよなよしてるより、サトシ君みたくじつとしてられないような、熱血なほうがいいと思うがな」

カズナリ「タクヤさん……」

コトネ「うんうん、男の子はこうでなくちゃ」

サトシ「ハヤシガメ、エナジーボール！」

ハヤシガメ『ンガァ！』

サトシがハヤシガメに、ドアに向けてエナジーボールを放つように指示する。しかしドアは壊れず、あるうことか跳ね返ってきた。

タクヤ「あつぶね。出番だボーマンダ！守るでみんなの壁になれ！」

ボーマンダ『マンダッ！』

サトシ「すいません、タクヤさん。戻れハヤシガメ。ハヤシガメでもダメか」

コトネ「はいっ、次は私！さあ、出てきてキリンリキ！ドアに向かって、ダブルアタックよ！」

キリンリキにダブルアタックを指示。だがやはりはじき返された。

コトネ「ダメか……」

タクヤ「俺がいこう。俺の持てる力全力です」

コトネ「タクヤが？」

タクヤ「ああ」

俺は、転送装置からガブリアス、カイリユー、ギャラドス、ガラガラ、バンギラスを転送してもらった。

タクヤ「出てこいみんな！」

サトシ「スツゲエ」

タケシ「強そうなポケモンたちばかりだ」

ヒカリ「スツゴイ」

タクヤ「全員、一点集中だ！逆鱗！」

全員が一点に攻撃を集中させて逆鱗をする。だが、それでも壊れない。みんなをボールに戻して、下の手持ちに返す。

タクヤ「これでも壊れないとか、どんだけ頑丈なんだよ……」

今度はサトシがボールを持ってきて、ドアの隙間に入り込ませる。

サトシ「ピカチュウが頑張ってるんだから、俺だって！」

コトネ「熱いね」

タケシ「サトシから熱血を取ったら、何も残らないからな」

コトネ「ジムバッジ七個は、伊達じゃないって事ね。カズナリも見習わないとね」

カズナリ「やっても無理なことは、無駄だと思うけど」

そうこうしている間に、サトシがボールを取り落とす。

コトネ「あつ」

ヒカリ「ダイジョーブ。サトシはあんなことじゃ負けないわ」

タケシ「そうだな」

タクヤ「さっすが男の子。つつーことで、俺も頑張るぜ」

サトシと同じように、ボールでこじ開けようとする。

コトネ「うんうん。サトシもタクヤもサイコーね」

ヒカリ「サイコー？」

さすがに頑張りすぎなので、一息入れることになった。

タケシ「ビスケツトは8枚メンバーは5人。さあ、どうやって分けるよう」

タクヤ「女の子を優先させればいいさ。男はこういうところでポイント稼ぐもんだぜ、タケシ君？君は美しい女性が好みなんだろ？普段から綺麗な人に目が行ってるからさ。おそらく今までもナンパ癖とかあっただろ？」

サトシ「確かに……」

サトシとヒカリは苦笑いしていた。

少し休憩していると、また停電が起きて、すぐにまた電気が復旧した。おそらくピカチュウがやったのだろう。

タクヤ「ドアが開いたぞ」

サトシ「ピカチュウたちがやったんだ！」

ピカチュウ「ピカピーー！！」

サトシ「ピカチュウ！ありがとな」

ヒノアラシ「ヒノーッ！」

ポツチャマ『ポチャツ！ポチャーッ！』

ヒノアラシが光に抱きつこうとする。だがポツチャマが邪魔をして、また喧嘩になった。ヒカリはヒノアラシを戻し、喧嘩を止めた。俺たちは再び中央管制室にいるおじいさんに知らせに来た。

サトシ「あのー、すみません」

管理人「ん、ああ、なんじゃ？」

コトネ「マリルが見つかりました。色々とお騒がせしました」

管理人「おお、それは良かったのお。気を付けて行くんじゃぞ。そんじゃな」

ヒカリ「また寝ちゃった」

俺たちは発電所を抜ける。空はもう暗くなっていた。

コトネ「すっかり暗くなっちゃった」

サトシ「でも、マリルが見つかってよかったよ」

ピカチュウ『ピカピカ』

タクヤ「む？」

サトシ「どうしました」

タクヤ「あの時にいたロケット団の気配がする」

そういうと、マグカルゴをかたどったロボットが出てきた。

サトシ「な、なんだ!？」

ムサシ「やっと充電が終わりました」

サトシ「ロケット団!」

コトネ「またあなたたち!？」

コジロウ「よーく聞けえ?このメカの表面はただ色を塗ってるわけじゃないんだ」

そういうと、ロボの表面が輝き出した。

コジロウ「見たか！透明な素材で、電気仕掛けでマグマの感じを出してるんだ！」

タクヤ「いや、お前らアホだろ。見た目にこだわって機能がダメダメなロボなんて、存在価値皆無だボケ。出番だスターミー！フルパワーで10万ボルト！」

スターミーの10万ボルトがロボに直撃する。

ニヤース「電気喰う割には電撃対策はして無かったのニヤ！」

ムサシ「だったら、ピカチュウの10万ボルトで充電できるようにしとけばよかったじゃない！」

コジロウ「だが今回ののはピカチュウじゃなくてスターミーの10万ボルトだ！」

ドガアアン！！と音を立て、ロボが爆発する。ロケット団は吹っ飛ばされてしまった。何かごちゃごちゃ言っていたが、どうでもいいので割愛しよう。

やっと谷間の発電所のトラブルを解決した俺たちは、次の目的地、スイレントタウンを目指す。

To Be Continued...

Episode 23 暴れん坊のフカマル登場！！

ヒカリのコンテスト出場のため、スイレンタウンを目指す俺たちは、とあるポケモンセンターに来た。

タクヤ「こんにちは」

ジョーイ「はい、こんにちは」

タケシ「ぬあああ、ジョーイさあああん」

まあ、アニメよろしくジョーイさんに話しかけるタケシ。

タクヤ「はいはい、そういうナンパ癖が自分の首絞めてることに気づけコラ」

タケシ「アガッ」

とりあえず後頭部に首刀を叩き込んで気絶させた。その時、子供たちがポケモンを抱えて3人駆け込んできた。

子供たち「ジョーイさん！治療お願いしまーす！」

ジョーイ「あなたたち、もしかして裏山へ行ったの？」

子供A「はい……」

子供B「ついゲットしたくなっちゃって……」

サトシ「裏山に、何かあるんですか？」

ジョーイ「暴れん坊のフカマルがいるのよ。あなたたちも気を付けてね」

俺たちに注意を促す。

ジョーイ「さ、いそいで治療室へ」

タケシ「ジョーイさん、自分も手伝います」

タケシ、復活早っ！！！

ヒカリ「暴れん坊のフカマルだって」

サトシ「暴れん坊ってことは、強いってことだよな」

タクヤ「俺、ゲットするつもりはないが見に行ってくるわ。じゃ」

コトネ「あっ、ちょっと」

俺はボーマンダに乗って飛び去る。

タクヤ「ここか。ボーマンダ、上空に飛んで見下ろしてみよう」

ボーマンダ『マンダッ！』

タクヤ「おっ、ポケモンセンターからみんな出てきた。結局捕まえるつもりなのか……。ん、あれがそのフカマルかな？」

フカマルは、いきなり岩を持ち上げてサトシたちに投げつけた。

タクヤ「あつぶねえ。ボーマンダ、サトシたちの前で守る！」

ボーマンダ『マンダ！』

サトシ「あっ、タクヤさん！」

コトネ「いきなり飛び出して、何してたのよ」

タクヤ「ん？この辺の地形把握とフカマルの現在位置確認をボーマンダに乗って上空からしてた。ゲットするつもりはないから、お前

らに動きの支持とかするわ」

フカマル『カーフカフカフカ！！！』

タクヤ「怪力、来るぞ！とにかくポケモンを出せ！」

みんなは岩をよける。

ヒカリ「カズナリ、危ないから下がってて」

カズナリ「育ててみたい！」

ヒカリ「え？」

カズナリ「あのフカマルを見ていたら、タクヤさんのガブリアスのような、立派なガブリアスに育ててみたくなっただんだ！」

タクヤ「よし、よく言った。カズナリ、サポートするぞ！」

サトシ「ゲットするのは俺だ！ブイゼル、君に決めた！」

ブイゼル「ブイブイ！」

カズナリ「僕だって負けないよ！ワニノコ、お願いします！」

ワニノコ「ワニヤワニヤ！」

フカマルは攻撃態勢に入った。

タクヤ「おそらくこいつは、この辺り一帯で一番強いんだろう。力の差を見せつけなければ怯えるはずだ！」

フカマルは怪力で岩を持ち上げた。

カズナリ「ワニノコ、馬鹿力！」

ワニノコ「ワニヤア！」

フカマル「カフカフカ！」

ワニノコ「ワニヤア！」

フカマル「カフカフカ！」

ワニノコ「ワニヤア！」

フカマル「カフカフカ！」

ワニノコ「ワニヤア！」

フカマル「カ、フカフカ……！」

岩を持ち上げる大きさがどんどん大きくなっていく。ついにフカマルがうろたえ出す。この状態って、アニメじゃ後半の方だけど、

こんなに早く来るとは。

タクヤ「出番だゲンガー、黒い眼差し」
ゲンガー「ガァー」

俺はフカマルを逃げられなくする。

サトシ「マズイ、穴を掘るで逃げ」

タクヤ「逃げられないよ。ゲンガーの黒い眼差しが効いているからね。カズナリ、さつさと弱らせる」

カズナリ「ワニノコ、アクアテール！」

ワニノコ「ワニヤア！！！」

フカマル「フカアアアア！！！」

フカマルが吹っ飛ばされる。

タクヤ「ゲンガー、催眠術」

吹っ飛ばされた先に俺のゲンガーが待ち受ける。催眠術をヒットさせ、眠らせた。しかし、なぜかすぐに起きてしまった。

タクヤ「はあ？なんで眠ってもすぐに起きるんだよ。ゲンガー、舌で舐める」

ゲンガー「ガァー」

舌で舐めまわす。麻痺したが、すぐに振り払った。

タクヤ「なんで状態異常が効かねえの？ゲンガー、鬼火！」
ゲンガー「ガァー」、（、・）ノ

別の穴から噴水のように拳がるフカマル。そのまま吹っ飛ばされてしまった。

俺は近づいてペシペシとフカマルの頬を叩く。しかし反応はない。気絶しているのだろう。

タクヤ「こいつ気絶してる。今のうちだカズナリ！」
カズナリ「行けえ、モンスターボール！」

フカマルがボールに収まる。気絶していることもあって、なんの問題もなく捕まえることができた。

カズナリ「やったやった、ゲットできた!!!!!!」
タクヤ「うんうん、よくやったぞカズナリ」

コトネ「ほとんどタクヤの指示だけだね」
ヒカリ「でも、ゲットできただけでもすごいじゃない！」
コトネ「そうね。見直したわ」

カズナリは、暴れん坊のフカマルをゲットした。ヒカリのコンテスト出場のため、スイレントタウンに向けて旅はまだまだ終わらない。

To Be Continued...

Episode 24 ポケモンコンテスト！ スイレン大会！！（前書き）

この話はヒカリとタクヤ、二匹のマンムーが出てきます

ヒカリのマンムーをマンムーA、タクヤのマンムーをマンムーBと
しています！

ヒノアラシ『ヒノ』

ヒカリ「うまく出来た！」

コトネ「うわぁ、すごい！」

タケシ「マンムー、コツをつかんできたなあ」

カズナリ「またまた驚いた」

タクヤ「面白い。俺も試してみようか？」

転送装置でマンムーを引っ張り出しながら言う。

タクヤ「出番だマンムー！」

マンムーB『ンムウ』

ヒカリ「あれ？タクヤさんもマンムー持ってたんだ」

マンムーA『ンムウウウ』

サトシ「でも、試すって……」

タクヤ「まあ見てなつて。マンムー、氷の礫！」

マンムーB『ンムウウウ！』

同じように氷の礫を溜める。

タクヤ「今だ！」

あいつらがやっていたのと同じくらいのタイミングで指示。するとマンムーの体毛が凍った。

サトシ「スゲエ、一発で真似してるよ」

ヒカリ「すごい。あたし何度も練習したのに」

マンムーA『ンムウウ』

マンムーB『ンムウウ』

マンムーA『ンムウウ？』

マンムーB『ンム、ンムウ』

マンムーA『ンムウ』

なんかマンムー仲良くなってる。

コトネ「さっすがタクヤ。やるう」

カズナリ「一回で真似するなんて……」

タクシ「タクヤさんはすごいな」

タクヤ「まあな。戻れマンムー！」

マンムーを戻して転送する。

ヒノアラシ『ヒノツ、ヒノヒノツ！』

ヒカリ「ん？どうしたのヒノアラシ？」

ポツチャマ『ポチャ？』

ヒノアラシはヒカリに話しかける。

ヒノアラシ『ヒイノオオオオオ！！！！』

ヒノアラシは背中 of 炎を一気に燃え上がらせた。

サトシ「スツゲエ」

ヒノアラシ『ヒノオ、ヒノヒノオ！！！！』

ヒカリ「やるじゃないヒノアラシ！」

タクヤ「もしかして、コイツも出たいんじゃないか？」

ヒカリ「ああ。ごめんねヒノアラシ。今日はあたしたちのステージを見て」

ヒノアラシ『ヒノツ？ヒノオオオ……』 O T L

おおっ、見事なO T L状態。

ヒカリ「今回はマンムーに出てもらおうと思ってるの。作戦はこうよ。一次審査はステージになれてるポツチャマで綺麗に決めて、ポツチャマ『ポツチャマ』フンス
ヒノアラシ『ヒノオ……』

頬を膨らませて拗ねるヒノアラシ。

ヒカリ「二次審査は、マンムーのバトルで魅せる！」
マンムー『ンムウウ』
ヒノアラシ『ヒノッ』

ヒノアラシはそっぽをむいた。

コトネ「あーあ、拗ねちゃった」
ポツチャマ『ポツチャツチャ』
ヒカリ「ヒノアラシ」
ポツチャマ『ポチャツ？』
ヒカリ「あなたが応援してくれたら、あたしたちもってパワーが出て優勝できるから、ね？」

ヒカリはヒノアラシを抱きしめた。

ポツチャマ『ポチャア……。ポチャポチャ！』
ヒノアラシ『ヒノオ！』

ヒノアラシは背中 of 炎を燃え上がらせた。――ヒカリが抱きしめて
いる状態で。

サトシ「ヒカリ！」

タクヤ「大丈夫か？」

コトネ「大丈夫、ヒカリン！？」

ヒカリ「あはは、ダイジョーブダイジョーブ。今日こそ五個目のリボン、ゲットだぜ！」

ヒカリはサトシの真似をして言った。

そして、コンテストが開かれる。

司会「大変長らくお待たせしました！ポケモンコンテストスイレン大会のお時間でございます！」

司会の人が大きく宣言する。観客は一気に盛り上がった。
その時俺は、ヒカリのいる控え室にいた。

サトシ「よお、ヒカリ！」

ヒカリ「みんなあ！？」

コトネ「わああ、ヒカリンてばすっごくプリティ」

ヒカリ「えへっ、そっかな？」

コトネ「そうそう、この中でゼーったい一番！ね、サトシだってそう思うでしょ？」

サトシ「そりゃあ一番に決まってるさ！優勝はヒカリだからな！」

ピカチュウ『ピッカ！』

ヒカリ「もっちろん」

タクヤ「どっちも天然だな……」

鈍感二人が集まると手が付けられないから困る。

コトネ「その一番じゃないんだけど。サトシ絶対わかってないよね？」

タケシ「ヒカリもかな」

タクヤ「ヒカリちゃんもね」

コトネ「えっ？」

コトネはヒカリの方を見ている。ヒカリはサトシと話していた。

ヒカリ「ありがとうサトシ。今日こそ五個目のリボン、ゲットするわ！」

サトシ「頑張れよヒカリ！」

そういうと二人はハイタッチする。

コトネ「似た者同士か……。ん？」

コトネはムサシ（コジロウの変装）を見る。

コトネ「あの人のドレスカワイイ」

ヒカリ「ああ、ムサリーナさん」

ムサリーナ（笑）はギクツ、と反応する。

コジロウ「あつ、ど、どうもー」

コトネ「お知り合い？」

ヒカリ「うん」

コトネ「ふーん、このドレスほんっとカワイいわねえ。ねえねえ、どこで買ったの？」

コジロウ「あのその、えっと……忘れてしまいましたわ。それじゃあね」

ムサシ（笑）はどこかへ行ってしまった。
そして、一次審査開始の時は近づく。

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

Episode 25 ポケモンコンテスト！ パフォーマンスステージ！！

司会「それでは、一次審査に参りましょう！ポケモン一体による技の演技、パフォーマンスステージ！エントリーナンバー一番！どうぞ！」

タクヤ「いよいよだな」

コトネ「出た出たヒカリン」

サトシ「頑張れヒカリ！」

カズナリ「パフォーマンスステージって？」

タケシ「ポケモンと技をいかに美しく見せるかのステージだよ」

サトシ「まあ見てるって」

いよいよヒカリのパフォーマンスが始まる。

ヒカリ「ポッチャマ、Charm up！」

ポッチャマ『ポッチャー！』

ポッチャマの登場。コトネはモンスターボールが変わっていることに気がつき、タケシに聞いた。

コトネ「なにあのモンスターボール！？」

タケシ「ボールカプセルだよ。いろんなシールの効果で、ポケモンの登場を盛り上げるんだ」

コトネ、カズナリ「ヘー！ー！ー！」

タクヤ「噂には聞いていたが、ここまですごいとは……」

ヒカリはパフォーマンスを始める。

ヒカリ「ポッチャマ、渦潮を飛ばして！」

ポツチャマ『ポーーーーチャーーーー！！！！！！』

ポツチャマは渦潮を空に向けて飛ばす。

ヒカリ「続いて我慢！」

ポツチャマ『チャーーーーー……』

ヒカリは我慢を支持。しかしヒカリの意図が読めないコトネとカズナリは疑問に思う。

コトネ「えっ、我慢！？」

カズナリ「バトルで攻撃を受けたわけでもないのに！？」

そんな話をしている間に、渦潮がポツチャマに迫る。

司会「渦潮がポツチャマの上に落ちてきます！」

ポツチャマ『ポツチャア！』

ポツチャマは我慢で増幅された渦潮のエネルギーで青く光り輝いていた。客受けもして、いい演技だ。

ヒカリ「やったねポツチャマ！」

ポツチャマ『ポツチャマ！』

ポツチャマは胸を張っていた。

サトシ「よしっ、いい演技だ」

カズナリ「ポツチャマの青いボディを魅せているんですね。よくわかります」

コトネ「一次審査って、ポケモンの一発芸大会という事ね？」

ニヤースは乱れひつかきをキメる。そしてコジロウとニヤースが井で切れた麺をキャッチした。

観客「わあああああああああああああああああああああ
ああ!!!!!!!!!!!!!!」

司会「なんと、スタンディングオベーション！コンテストの常識を覆す、全く新しいパフォーマンスの誕生に、場内は最高の盛り上がりです！」

コジロウ「ハイお待ち！」

コジロウは審査員たちにラーメンを出す。

コジロウ「ニヤース特製ラーメン、熱いうちに召し上がれ」

サトシ「旨そう！」

ピカチュウ「ピカピカ！」

タケシ「実に手際がいい」

タクヤ「俺今度ラーメン食いに行こう」

審査員はラーメンを食べる。そして、そのラーメンを褒めまくった。

コンテスタ「まさか、乱れひつかきがラーメン作りに活かされるとは」

スキゾー「好きですねえ」

ジョーイ「コシがあって、とってもいい食感です」

司会「以上で、一次審査すべてのパフォーマンスが終了しました。結果発表まで暫しご歓談を！」

司会がそういうと、俺たちは控え室に向かった。

コトネ「ポツチャマやるじゃん！」
ポツチャマ『ポツチャ！』フンス

見事な「フンス」状態のポツチャマ。

タクヤ「あのパフォーマンスなら、ヒカリちゃんも大丈夫だろ」
ヒカリ「ありがとうございます、タクヤさん！」

そんな談笑を続けていると、結果発表が始まった。

司会「皆様、大変長らくお待たせいたしました！厳正なる審査の結果、見事一次審査を通過し、二次審査通過を決めたのは

こちらの八名様でございます！」

そう言うと、モニタに通過した人たちが表示された。見事にヒカリもその一人だ。

タクヤ「ヒカリちゃん、頑張ってたね」
ヒカリ「うん、タクヤさん！」

いよいよ次は二次審査。とても楽しみだ！

To Be Continued...

Episode 26 コンテストバトル！ マンムーの初コンテスト！！

司会「二次審査コンテストバトル、制限時間は五分間。技をいかに美しくキメて相手のポイントを削っていくか、ポケモンたちとの技のコラボをお楽しみください！」

司会は大きく宣言した。正直、生で見るのは楽しみだ。

カズナリ「二次審査はバトルなんですね！」

タケシ「バトルといってもジム戦とは違って、技の出し方や、かわす動きなんかが重要になってくるんだ」

タクヤ「要するに、勝つバトルじゃなくて、魅せるバトルということだね？」

タケシ「そうですね」

俺たちもそんな話をしているうちに、いよいよ第一回戦が始まるうとしていた。

司会「では、一回戦第一試合！かたやヒカリさん！こなたノブオさん！制限時間は五分！参ります！」

そう言つて、タイマーが動き始めた。

ヒカリ「マンムー、Charm up！」

マンムー『ンムウウー！』

ノブオ「いけっ、グランプル！」

グランプル『グウアアオ！』

ノブオ君、君には悪いがここで退場願おう。

ノブオ「グランブル、炎の牙！」

グランブル『グアアアア……!!』

司会「グランブル、炎の牙で見事な炎を吹き上げた！」

司会がそういうと、ヒカリのポイントが少し削られる。

コトネ「あれ？ヒカリンのポイントが減ったよ？」

タケシ「技を上手く見せたことが評価されると、相手のポイントを減らせるんだ」

カズナリ「コンテストバトルならではの、ということですね」

タクヤ「面白くなりそうだ……」

俺たちもそんな話をする。ヒカリは……

ヒカリ「マンムー、かわして氷の礫！」

マンムー『ンムウ！』

グランブル『グアウ！』

司会「炎の牙は空振り！」

グランブルの炎の牙をマンムーは素早く避ける。まあ、俺のマンムーのほうが速い。ノブオのポイントが減ってしまう。

マンムー『ンムウウウ……!!』

司会「マンムー、かわすと同時に氷の礫の発動で……」

ノブオ君とグランブルは身構える。いよいよアレが出るぞ。身構えるより氷の礫を奪うほうが効果的だぞ、ノブオ君。

ヒカリ「今よ！」

マンムー『ンムウウウ！ンム！』

ノブオ「は！？」

グランブル『グオ！？』

審査員勢「はああ……」

司会「マンムーが氷の礫を食べてしまいました！」

ノブオ君、グランブル、審査員勢、司会、観客、その他のコーデイナータ。俺たちを除く会場のすべての人たちが啞然としていた。そして、マンムーの体毛が氷に覆われた。

司会「これはなんと！マンムーの体毛が氷柱の様に凍って、その体を包んだー！！さながら氷の鎧を纏ったかの様です！！！」
タクヤ「成功だな！」

初めて見るやりかたに、観客は大盛り上がりだ。

マンムー『ンムウ、ンムウウウ！！！』

ヒカリ「その調子よマンムー！続いて目覚めるパワー！」

マンムー『ンムウウ！』

司会「目覚めるパワーが氷の鎧を美しく照らします！」

ヒカリはめざパを指示。本当に生で見ると美しいな。

コトネ「わあ、キレー！」

ポツチャマ『ポチャア！』

タクヤ「上手いぞ！技を組み合わせで、マンムーをより美しく魅せてる！」

タクヤ「今度俺もバトルに取り入れてみようかな」

観客もすごく盛り上がってきた。

ヒカリ「突進！」

マンムー「ンムツ、ンムツ、ンムツ、ンムツ！」

ノブオ「はっ！？か、かわせっ！！」

グランブル「グオア！！」

マンムー「ンムウオ！！！」

マンムーの突進がクリティカルヒット。ノブオ君のグランブルは見事回転しながら吹っ飛ぶ。

ノブオ「あっ！？グランブル！」

見事バトルオフとなった。

司会「バトルオフ！！！セミファイナル進出は、ヒカリさんとマンムーです！」

マンムー「ンムウウ！！！！」

ヒカリ「あ、あれ？もうバトルオフ？」

マンムーは雄叫びを上げるが、ヒカリは呆然としていた。

司会「氷の礫、目覚めるパワー、そして突進のトリプルコンボで、マンムーが一気に勝利でございます！」

マンムーの初陣は見事勝利となったが、ヒカリは少し落ち込んでいた。

ヒカリ「はああ……。ちよつと悔しいな……」

コトネ「悔しい！？なんで？マンムー勝ったのに変なの」

タクヤ「いいかコトネ？ヒカリはコーディネータだ。俺たちトレー

ナーとは違って、戦闘不能にすることを目的としていない。魅せるのが専門だ。大して魅せる間もなくバトルオフとなれば、もっと美しく魅せたいと思うのは当然のことだ。そうだと、ヒカリちゃん？」

「…」

コトネ「でも勝ちには勝ちでしょ？」

タクヤ「そうだけど、コーディネーターであれトレーナーであれ、楽しまなきゃ損だろ？」

サトシ「タクヤさんの言う通りだ。コンテストバトルならもっと違った勝ち方があるってことさ」

カズナリ「うーん、奥が深そうだね……」

ヒカリ「よし、セミファイナルはもっと魅せるバトルにするわ！」

そして、続々とセミファイナル進出者が決まっていく。いよいよヒカリのセミファイナルだ。コジロウ（笑）とのバトルだが、残念ながらヒカリはここで終わりで。

司会「セミファイナル第一試合！かたやヒカリさん！こなたキャンディ・ムサリーナさん！ヒカリさんは只今リボン四個、ムサリーナさんはリボン二個、ファイナルに進出するのは果たしてどちらか！？」

残念ながらコジロウ（笑）です。

司会「制限時間は五分！参ります！」

タイマーが動き始め、試合開始となった。

ヒカリ「マンムー、Charm up！」

マンムー『ンムウウ!!』

コジロウ「行けっ、マスキツパ!」

やはりコジロウ（笑）に噛み付く。この行動で普通気づかんもんかねえ……?」

司会「ムサリーナさん、またも体を張ったパフォーマンスで会場を沸かせます!」

ヒカリ「氷の礫!」

マンムー『ンムウウウ!!』

司会「マンムー氷の礫!再びあのパワーアップが見られるのでしょうか!」

ごめんなさい、見られません、はい。

コジロウ「ツルの鞭!」

マスキツパ『キーパツ!!!!』

マスキツパが、氷の礫を食う直前にツルの鞭で奪い去る。

あとは書かなくても結果はわかるでしょう?アニメと同じ結果ですよ。詳しくは、ポケットモンスターダイヤモンドパール、146話をどうぞ。正直生で見ると、見ていられない酷い惨状でした。

あつ、手抜きじゃないですよ?本当ですよ?いやマジで。書くのが面倒とかじゃないですからね?ただ、こういう表現ですから。いやホントに。いやだからそういうことだって言ってるでしょ?疑ってるの疑ってないですよね疑うわけじゃないですよね?

そんなこんなで敗北したヒカリ。俺たちは控え室に駆け込んだ。

サトシ・コトネ「ヒカリ（ン）!」

ポツチャマ『ポチャチャ!』

ヒカリ「みんな!」

サトシ「残念だったな、ヒカリ」

ポツチャマ『ポチャ』

ヒノアラシ『ヒノ』

ヒカリ「ダイジョーブダイジョーブ!」

コトネ「やっぱり、ポツチャマたちで出たほうがよかったんじゃない?」

ヒカリ「かもしれない。でも、本番じゃなければわからないことっていっぱいあるんだ。サトシ。今回のステージで、あたしとマンムーのこれからの課題が見えたの!また練習の相手よろしくね」

サトシ「おう!」

コトネ「わあ、負けたっていうのに、ヒカリンポジティブね」

タクヤ「まあ、今回ダメでも次がある。今日がダメでも明日がある。明日は明日の風が吹く。これで落ち込んだりするヤツはその程度ってことだよ」

ブブー、とブザーが鳴る。ファイナルの結果が決まったようだ。

俺たちはモニタ越しに結果を見る。

司会「バルキーポイントアウトー!!!!ファイナルを制したのは…

…キャンディ・ムサリーナさんです!!!!」

コトネ「わあ、あの人優勝しちゃった!」

司会「今、キャンディ・ムサリーナさんに、スイレンリボンが授与されました!」

コジロウ（笑）、あんなに目立てばムサシが嫉妬するぞ。

今俺たちは、会場の外にいる。夕焼け空の下、ヒカリはマンムーにポフィンてにとり、

ヒカリ「はい、マンムー！」

マンムーはもぐもぐとポフィンを咀嚼する。

ヒカリ「明日からはまた練習。どんどん食べてパワーつけてね！」
マンムー『ンムウー！ー！』

マンムーは頷き鼻息を噴射する。ポツチャマとヒノアラシは直撃を受けてのけぞった。

サトシ「よし、気合入ってきたな！」

ピカチュウ『ピーカ！』

タケシ「五個目のリボンを目指して、俺たちも協力するよ」

ヒカリ「ありがとう。あたしも精一杯、頑張るわ！」

サトシ「ああ！」

カズナリ「仲間と旅するって、こういうとき良いよね」

コトネ「うん！なんていうか、『勝っても負けても、仲間がいる』って事ね」

タクヤ「そのまんま、だな」

コンテストも終わり、マンムーの初陣も終わる。マンムーが落ち込んでないか心配だったが、俺のマンムーに慰めさせることもなくて良かった。俺たちがシンオウにいられる期間も残り少なくなってきた。残り少ないシンオウの旅も、もっと楽しむぜ！

To Be Continued...

Episode 27 サトシとヒカリのタッグバトル!!

コンテストも終わり、シンオウ最後の一日となった俺たちは、スイレンコロシウムへと足を運んできた。

サトシ「これがスイレンコロシウムか」

タケシ「シンオウ地方の歴代チャンピオンは、この場所で心と技を鍛えたと言われているんだ」

タクヤ「どおりで神々しい雰囲気だと思ったよ」

そう、ここは生だと本当にすごい威圧感がある。

コトネ「じゃあ私も、この場所でバトルすれば三個目のバッジをゲットできるかも」

タクヤ「コトネならだいじょぶさ」

カズナリ「シンオウ地方最後の一日の、いい思い出になりそうだね」
タクヤ「なあコトネ、カズナリ」

コトネ「ん？」

カズナリ「何ですか？」

俺は少し前から考えていたことを話す。

タクヤ「俺、今日までじゃなくて、もう少しシンオウ地方にいるよ」
コトネ「えっ!？」

カズナリ「どういうことですか!？」

サトシ「タクヤさん、シンオウ地方に残るんですか!？」
ピカチュウ『ピカピカ!?!』

タクヤ「ああ」

俺は、考えたことすべてを話す。

タクヤ「コトネとカズナリは、旅立ちからずっと俺と一緒にだったただろ？」

コトネ「うん」

カズナリ「はい」

タクヤ「でも、俺たちがこれからずっと一緒にいられる保証はない。最初から最後までベテラントレーナーと一緒にいたら、自分たちでは何も出来なくなるんじゃないかって心配に思ってたね。それに、研究者を目指す身としては、もう少し見て回りたいんだ、シンオウ地方^こ。だが、サトシ君たちと一緒に行くわけではないんだ」

サトシ「どういうことですか？」

タクヤ「要するに、ここで一人で旅をするってこと。強いトレーナーも見つけてみたいし、いろいろなところを見て回りたい。ナナカマド博士の言っていたシンジ君という子とも会ってみたいしね」

サトシ「ヒカリ、タケシ、シンジ！？」

コトネ「誰それ？」

タクヤ「おつ、サトシ君たちは知っているのか？どんな子が教えて欲しいんだが」

サトシ「バトルが強いけど、すごくヒドイ奴です！」

タクヤ「ヒドイ？」

サトシ「バトルで負けたポケモンは、弱いからいららないと言ってすぐに逃がすんです」

タクヤ「それはヒドイな……」

ポケモン廃人としては当たり前だが、この世界では随分とポケモンに愛着がわいた。それにこの能力があるから弱くなるなんてことにはならないし。

タクヤ「して、外見の特徴は？」

ヒカリ「こーんなつり目で、薄紫色のこのくらいの長さの髪の毛を
したいけ好かないヤツです」

ヒカリは目を釣り上げて、肩くらいを指し示し、外見の特徴を教
えてくれた。

タクヤ「つまりそいつは冷酷ないけ好かないクズ野郎ってことか。
もしも会ったらキツツイ灸を据えてやるか……。ま、この話は終わ
り！コトネとカズナリのペア対サトシ君とヒカリちゃんのペアでタ
ッグバトルでもどうだ？」

タクシ「その前にお祈りだ」

ヒカリ「ああ、そっか」

コトネ「お祈り？」

俺たちはディアルガとパルキアの像の前に立つ。

コトネ「これってポケモン？」

ヒカリ「ディアルガとパルキアよ」

タクシ「シンオウ地方の伝説のポケモンだ」

コトネ「ええっ！？そうなんだ、スッゴイ！」

カズナリ「じゃあ、ここは神聖な場所なんですね？」

ヒカリ「この像に手を触れて祈ったあとトレーニングすると、トレ
ーナーやブリーダーの願いが叶う。そんな言い伝えがあるのよ」

コトネ「手を触れてか……。って、タクヤもう祈ってる！」

俺は話を聞かず、既に乗っている。願いはジョウトリーグ優勝と、
研究職に就くことだ。もともと口実だった研究職も、今ではかなり
興味をもっている。

コトネ「ねえ、サトシは何を願ったの？」

サトシ「もちろん、ポケモンマスターになることさ。でもその前に、シンオウリーグで優勝しなきゃな！」

コトネ「へえ、サトシらしいね」

ヒカリ「コトネはどんなお願いをしたの？」

コトネ「やっぱり、ジョウトリーグで優勝することね！」

タクヤ「おっ？俺と同じだな。負けねえぞ？」

コトネ「タクヤは強敵だけど、本気を出したタクヤにも勝てるように、頑張つて鍛えるの！それともう一つ！」

ヒカリ「もう一つ？」

コトネ「ジョウトに帰ったら、素敵な仲間と旅ができればいいなつて」

カズナリ「へえ、コトネはそんなことも願ったんだ」

サトシ「仲間がいれば、お互い励まし合ったり、鍛えたりできるもんな。タクヤさんは？」

タクヤ「俺はさっき行った通り、ジョウトリーグ優勝。それと、立派な研究者になることだ。む？」

サトシ「どうしたんですか？」

そろそろロケット団登場だな。俺はテッカニンとハッサムを出した。直後、地鳴りがし始める。

サトシ「なんだ？」

地面からドラピオンロボの腕が伸びる。ふっ、あまいな。

タクヤ「おっと危ない。テッカニン、ハッサム、シザークロスで叩っ斬れ！」

テッカニン『テッカ！』

ハッサム『ハッサ！』

見事ドラピロボの腕は切り落とされた。

タクヤ「さてと、さっさと姿を現してもらいましょうロケット団？」

その一言で姿を現した。

タクヤ「まったくよオ、せっかく人が今からタッグバトルをしようつつうのによオ。邪魔すんじゃないよ。テッカニン、ハッサム、切り裂くで粉々にしろ！」

おっと、アクセラ口調になっちまった。その一言でロボは切り刻まれる。ドガアアン！という音と共に、ロボは爆発する。

ムサシ「あれ？、あたしたちまだ一言もしゃべってないわよ？」

コジロウ「あのトレーナーが強すぎるんだよ」

ニヤース「それにしても登場と同時に退場ニヤンて」

ロケット団「やなかんじー！！！！！！！！！！」

ソーナンス『ソーーーーーーナンス！！！！！！』

サトシ「なんだったんだ、アレ？」

ヒカリ「さあ？」

タクヤ「気にしたら負けだ。さあ、タッグバトルタッグバトル！」

サトシヒカリペアvsコトネカズナリペアのタッグバトル。審判はタクシ、俺はコメンテーターだ。

タクシ「トレーナー一人につき、使用ポケモンは一体！チーム二体のポケモンが戦闘不能となったら、バトルは終了とする！それでは、始め！」

タクヤ「みんな頑張れ！」

サトシ「モウカザル、君に決めた！」

ヒカリ「頼んだわよ、ヒノアラシ！」

モウカザル『ウキヤー！！！』

ヒノアラシ『ヒノヒノー！！！』

タクヤ「おいおい、どっちも炎タイプって、相性付きやすくなるだけじゃねえか」

カズナリ「炎タイプが二体。それならこっちは、ワニノコ、お願いします！」

ワニノコ『ワニワニ！！！』

タクヤ「ほらな、相性的にサトシ君とヒカリちゃんは危ないぞ」

コトネ「行けっ、チコリータ！」

チコリータ『チコチコー！！！』

タクヤ「光の壁、か」

サトシとヒカリは気づいていないが、チコリータには光の壁がある。それどころか、ペアであるはずのカズナリも気づいていなかった。

サトシ「コトネ、カズナリ、遠慮はしないからな！モウカザル、火炎放射！」

ヒカリ「ヒノアラシ、スピードスター！」

モウカザル『ウキヤー！！！！！！！！』

ヒノアラシ『ヒイノー！！！！！！！！！！』

コトネ「チコリータ、光の壁！」

チコリータ『チコチコッ！』

チコリータはワニノコを庇うように光の壁を展開して火炎放射を防ぐ。

コトネ「よし、光の壁でダメージを弱めたわ！」

カズナリ「ワニノコ、モウカザルに水鉄砲！」

ワニノコ『ワニヤ！ワーニヤー！！！！』

モウカザル『ウキャツ、キャキャ！！！！』

サトシ「ああつ、モウカザル！」

カズナリ「チコリータを選んだのは、光の壁を使つたためだったんだね！」

コトネ「そうよ、なかなかやるでしょ？」

タクヤ「カズナリ、ペアが使う技くらい記憶しとけよ……」

サトシ「頑張れヒノアラシ！」

ヒカリ「モウカザルのダメージが大きい。ヒノアラシ、スピードスター！」

ヒノアラシ『ヒイイノツ！』

えつ、何？ヒカリって馬鹿？光の壁使つてんのに特殊技とかほんと馬鹿？

ヒノアラシ『ヒノツ！？ヒノヒノツ！』

ヒカリ「落ち着いて、ヒノアラシ！」

コトネ「チコリータ、ヒノアラシに葉っぱカッター！」

チコリータ『チイコツ！！』

ヒノアラシ『ヒノツヒノツ！』

カズナリ「ワニノコ、アクアテール！」

ワニノコ『ワー、ワニヤツ！』

ヒノアラシ『ヒノツ！』

サトシ「ヒノアラシはまだバトルに慣れてない。攻撃が通用しなくて慌てたんだ」

ヒカリ「頑張つて、ヒノアラシ！」

完全にコトネたちのペース。サトシたちは危ない状況だ。

コトネ「チコリータ、ソーラービーム！」

カズナリ「ワニノコ、噛み砕く攻撃！」

チコリータ『チコオオオオ……』

ワニノコ『ワニワニワニワニ！』

チコリータがチャージしている間にワニノコが攻撃。いい戦法だ。

サトシ「モウカザル！ヒノアラシを助けるんだ！」

モウカザル『ウキヤッ！』

ヒカリ「ヒノアラシ、煙幕よ！」

ヒノアラシ『ヒノオオオ！』

ワニノコ『ワニヤ！？ワニヤワ！』

そうしている間にチャージ完了のチコリータだ。

コトネ「チャージ完了！」

カズナリ「ワニノコ、伏せろ！」

コトネ「ソーラービーム、発射！」

チコリータ『チイコオオオオオ！！！！！！！！！！』

モウカザル『ウキヤ！？』

サトシ「モウカザル、穴を掘る！」

モウカザル『ウキヤキヤキヤ！！！！！！』

モウカザルは穴に潜って避けた。うんうん、いい戦法！

コトネ「ええっ！？」

カズナリ「かわされた！？」

ワニノコ『ワニヤ！？ワニヤーーーー！！！！』

モウカザル『ウキヤアアア！！』

ワニノコの下からモウカザルが飛び出しアップアを食らわす。吹

っ 飛ぶワニノコにチコリータも巻き込まれてしまい、二匹は地に伏せった。カズナリはあわあわしている。

カズナリ「どうしよう!？」

コトネ「大丈夫!ポケモンたちを信じて!チコリータ、あなたは立てる!まだ戦えるわ!」

チコリータ「……チイ、コッ!」

タクヤ「うんうん、コトネに似て負けず嫌いなチコリータだ」

カズナリ「コトネの言うとおりだ。ワニノコ、僕も君を信じてるよ」
ワニノコ『ワニヤッ!ワニヤー!』

そのとき、ワニノコが光に包まれた。

タクヤ「来たか……」

サトシ「あれは!？」

アリゲイツ『アリゲイツ!』

カズナリ「ワニノコが、アリゲイツに進化した!」

二人は図鑑を取り出す。

アリゲイツ 大顎ポケモン。ワニノコの進化系。一度噛み付くと、牙が抜けるまで絶対に離さない。抜けた牙はすぐに生えてくる。

使える技は、噛み砕く、アクアテール、馬鹿力、ハイドロポンプ

カズナリ「すごいぞ!そんな技も覚えたのか!よしアリゲイツ、ハイドロポンプ!」

アリゲイツ『アアアッリゲイツ!』

ハイドロポンプは二匹にクリティカルヒット。大ダメージを追うモウカザルとヒノアラシ。

コトネ「これで止めよ。チコリータ、モウカザルに体当たり！」
タクヤ「油断して馬鹿正直に突っ込むとか、まだまだだな……」
ヒカリ「ヒノアラシ、火炎車！」
サトシ「モウカザル、火炎放射で援護しろ！」

ヒノアラシは火炎車をして突っ込む。モウカザルの火炎放射はヒノアラシに当たり、火炎車をより速く、より強力にした。

タクシ「チコリータ戦闘不能！」
カズナリ「アリゲイツ、ヒノアラシにアクアテール！」
アリゲイツ「アリゲイツ！！！！！」
ヒカリ「よけて、ヒノアラシ！」
サトシ「モウカザル、マッハパンチ！」
モウカザル「ワアアアキヤーーーー！！！！！」

見事類に一撃。アリゲイツは吹っ飛ばされた。

タクシ「アリゲイツ、戦闘不能！よって勝者、サトシとヒカリ！！」
タクヤ「いやあ、すごかったよ。ま、反省点はいろいろあるんだがな」パチパチ

四人はそれぞれのポケモンをねぎらっていた。

タクヤ「さあ、サトシ君。今日でお別れなんだ。コトネとカズナリ
の時間があるうちに、フルバトルをしよう」
サトシ「はいっ！」

次は最後のフルバトル。俺は手持ちを入れ替えてバトルするつもりだ。さて、どう出るサトシ？

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 28 タクヤvsサトシ！ 最後のフルバトル！！

タクシ「これより、タクヤ対サトシのバトルを行う！使用ポケモンは6体。どちらかのすべてのポケモンが戦闘不能になったときバトルは終了とする！それでは、始め！」

タクヤ「サトシ君、君は本当に面白い！だからこそ燃えるんだ！叩つ斬れ、ハッサム！」

ハッサム『ハッサム！』

サトシ「タクヤさん、本気でいきますよ！モウカザル、君に決めた！」

モウカザル『ウキヤアアア！！！！』

タクヤ「そいつを出すと思っていた！ハッサム、蜻蛉返り！」

ハッサム『ハッサム！』

モウカザル『ウキヤア！』

サトシ「ああ、モウカザル！」

ハッサムは蜻蛉返りでモウカザルを吹っ飛ばす。そして、ボールに戻っていった。

タクヤ「さあ、蜻蛉返りの効果でポケモンの入れ替えだ！空を斬れ、プテラ！」

プテラ『ファアアアアアアアア！！！！！！！！！！』

サトシ「プテラ！？モウカザル、火炎放射！」

モウカザル『ウキヤアアア！』

タクヤ「プテラ、高速移動しながらロックカット！」

プテラ『ファアアアア！！！！！！』

プテラのスピードがどんどん上がり、ついには目で捉えられなくなった。

サトシ「さすがです、タクヤさん。次はお前だ！ピカチュウ、君に決めた！」

ピカチュウ「ピツカッチュウ！」

タクヤ「面白い！プテラ、ストーンエッジ！そこからステルスロツク！」

プテラ「フアアア！フアアア！フアアアアアアアア！」

サトシ「ピカチュウ、10万ボルト！」

ピカチュウ「ピイカアチューーーー！！！！！！！！！！！」

プテラ「フアアアアアア！！！」

タクヤ「さすがピカチュウ。こいつの動きを見切れるとは。一旦戻れプテラ。爆ぜろ、フォレトス！」

フォレトス「フォオオオオオオ！」

俺は一旦プテラを戻し、フォレトスを出す。えげつない戦法いきまずぜ。

タクヤ「行くぜフォレトス、SET！」

フォレトス「フォオ！」

俺はピカチュウを指さす。

サトシ「なんだ！？」

ピカチュウ「ピカチュウ！？」

タクヤ「行つけえ、電磁砲！」

フォレトス「フォオオオオオオ！！！！！！！」

ピカチュウ「チャアアア！」

サトシ「ピカチュウ！！！」

ピカチュウ「ピイカ！」

タクヤ「行くぜ、撒菱3回毒菱2回！！最後にロックカッツを5回！」

コトネ「あの時のバンギラスね」
ヒカリ「バンギラスかぁ。カッコイイなあ」

バンギラスは、出てくると同時に砂嵐を巻き起こす。

タクヤ「特性の砂起こしだ。どう対処する？バンギラス、噛み砕く！」

バンギラス「バァン！」

サトシ「ハヤシガメ、エナジーボール！」

ハヤシガメ「ンガアアア！！！」

バンギラスの噛み砕くをかわしたハヤシガメはエナジーボールを放ち、バンギラスに直撃した。だが、

サトシ「き、効いていない！？効果は抜群なのに」

タクヤ「効いているよ。だが、岩タイプは砂嵐のとき、特殊技に対する防御力が上がるんだよ。バンギラス、ストーンエッジ！」

バンギラス「バァアアンギラアアス！！！！！！！」

サトシ「マズイ、戻れハヤシガメ！」

タクヤ「懸命な判断だ。まあ、俺も入れ替えるでしょう」

サトシ「ブイゼル、君に決めた！」

ブイゼル「ブイブイ！！ブイツ、ブイツ……」

ブイゼルにも撒菱、毒菱、ステルスロックが効いている。

タクヤ「うんうん、面白いねえ。叩つ斬れ、ハッサム！」
ハッサム「ハッサム！」

俺はハッサムを再び出す。

サトシ「ブイゼル、アクアジェット！」

タクヤ「回転して受け流せ！」

ブイゼル「ブウウイ！！！！！」

ハッサム「ハッサム、ハッサ！」

ブイゼル「ブブイ！？ブウウイ！！！」

ブイゼルはハッサムに受け流され、上空に向かって飛ぶ。

タクヤ「ハッサム、飛べ！電光石火から虫喰い！」

ハッサム「ハッサー！！」

サトシ「ブイゼル、回転してかわせ！」

ブイゼル「ブウイ！」

タクヤ「コンテストの応用か。ハッサム、連続斬り！」

ハッサム「ハッサ！ハッサ！ハッサ！」

サトシ「ブイゼルウウー！！」

ブイゼル「ブイ！ブイ！ブイ！ブ、ブイ……」

タケシ「ブイゼル、戦闘不能！」

サトシ「ありがとうブイゼル、ゆっくり休んでくれ。やっぱりタク

ヤさんは強い！ハヤシガメ、君に決めた！！！」

ハヤシガメ「ンガア！ンガッ、ンガッ……」

ハヤシガメは撒菱、毒菱、ステルスロックを喰らいふらつく。さ
っきのダメージと重なって辛いのだろう。

タクヤ「戻れ、ハッサム！押し潰せ、ベトベトン！」

ベトベトン「ベエトオベエトオオンー！！」

サトシ「今度はベトベトン！？ハヤシガメ、ロッククライム！」

タクヤ「無駄だ！シャドーパンチ！」

ベトベトン「ベエドオー！！！」

ドオオオオオオオン！！！！という音を立て、爆発する。
そして、

タクヤ「プテラ！？」

サトシ「ムクホーク！」

何と、二匹とも地に伏せ、倒れていた。

タクシ「プテラ、ムクホーク、両者戦闘不能！」

タクヤ「すごいぞサトシ君！相打ちとはいえ俺のポケモンを倒したのは君が初めてだ！」

サトシ「そうですか！？ありがとうございます！！」

タクヤ「さあ、君の最後の一体、本気で相手をしよう！ぶち壊せ、ボーマンダ！」

ボーマンダ『マンダアアアアアアア！！！！！！』

タクヤ「さあ、これが俺のもつポケモンの中でも、5本の指に入る真正銘の切り札ポケモンだ。どう出る、サトシ君！」

サトシ「切り札だろうが何だろうが、俺は俺の全力を尽くすだけです！グライオン、君に決めた！」

グライオン『グライオンッ！！！！グラッ！！』

ステルスロックの影響でダメージを受けた。さあ、ラストバトルと行こうか。

タクヤ「本気で行くぞ！龍の舞！」

ボーマンダ『マンダアアアアアアア！！！！』

ボーマンダは神秘的な踊りを踊る。

サトシ「グライオン、炎の牙！」

グライオン「グライオン！」

タクヤ「竜の波動で牽制！」

ボーマンド、マンダ！

グライオン
「グラッ！？」

サトシ「グライオン、シザークロス！」

タクヤ「噛み砕くで受け止めろ！」

グライオン「グライオン！」

ボーマ^①ンダ^②マンダ^③ツ^④！^⑤

受け止められず、攻撃を受けるボーマンダ。しかし、少しのけぞっただけだった。

タクヤ「ボーマンド、全力、全壊！！」

ボーマ^①ンダ^② マンダ^③！

サトシ「グライオン、ギガインパクト！」

グライオン「グライオン!!!!」

タクヤ「ボーマンド、逆鱗！」

ボーマンダ マンダアアアアアアア！！！！！！！！！！

グライオン ♪ グライオオオオンツツツ!!! ♪

サトシ「グライオー……ン!!!!!!」

グライオン
「グ……グラッ……」

タケシ「グライオン、戦闘不能！よって勝者、タクヤ！」

タクヤ「ありがとうボーマンド、よく頑張った。サトシ君、君は本

「当にすごい。俺相手にあそこまでやる奴は初めてだった。楽しかったよ」

サトシ「はいっ、俺も楽しかったです」

俺たちはバトルを終えた。結果は俺の勝利。だが、サトシは俺のポケモン相手に相打ちまですると、本当にすごかった。

そして、飛行場……

カズナリ「タケシさん、ありがとうございました。またいろいろ教えてくださいね」

タケシ「ブリーダー修行は、まずポケモンと接することから始まる。これから様々なポケモンとトレーナー、コーディネーターたちと触れ合うといいよ」

カズナリ「はい、頑張ります！」

タクヤ「カズナリの父さん。俺、もう少しシンオウに残ります。まだまだしたいことがいっぱいあるんです」

カズナリ父「そうか。だったら、帰ってきたらコトネとカズナリをよろしく頼むよ」

タクヤ「はいっ。コトネ、次に会うときはジョウトリーグだ。また会おうぜ！カズナリもな」

コトネ「うん」

カズナリ「はいっ！」

タクヤ「コガネジムのジム戦、頑張れよ」

コトネ「うん。サトシは次、8個目のジム戦でしょ？」

サトシ「ああ。ナギサジムのジム戦に勝ったら、いよいよシンオウリーグだぜ！」

コトネ「ヒカリンも5個目のリボン、頑張ってね」

ヒカリ「ええ！絶対ゲットして、グランドフェスティバルに出場するわ！」

カズナリ父「どうやら息子たちがずいぶんお世話になったようだね、ありがとう。これは私からのお礼だよ」

そう言っ、ポケギアを取り出した。

コトネ「わあ、ポケギアじゃない！」

サトシ「いいんですか？」

カズナリ父「勿論！」

タケシ「ありがとうございます！」

タクヤ「そうだ。サトシ君、ヒカリちゃん、タケシ君シンオウで君たちと旅できて、楽しかったよ。こっちは俺からの礼だ」

そう言つて、孵卵器に入つた卵を取り出した。

タクヤ「一人一個ずつ。5個あるから、コトネとカズナリにもやるよ」

タケシ「タクヤさん、ありがとうございます！」

コトネ「ありがとう、タクヤ！」

カズナリ「何が生まれるか楽しみだなあ」

サトシ「6体フルに持つてるから、手持ちを考えないとな！」

ヒカリ「何が生まれるのかなあ！」

タクヤ「生まれたら報告よろしくな」

そう言つて、タケシに渡されたポケギアに俺のを登録した。

タクヤ「それじゃ、俺はこうしてる時間も惜しいからもう行くよ。

出番だプテラ！」

プテラ『フアアアアアアアアアア！』

俺はプテラにまたがって飛び上がった。

タクヤ「じゃあ、サトシ君、ヒカリちゃん、タケシ君、また会えたらどこかで！コトネ、カズナリ、ジョウトリーグでまた会おう！カズナリの父さん、無理言つてすみませんでした！じゃーな！」

こうして俺は飛び去った。俺のシンオウでの旅はまだまだ続く。

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

Episode 29 タクヤvsシンジ！！

タクヤ「ふう。プテラ、一旦この辺で下ろしてくれ」
プテラ『フアアア！』

ども、コトネたちとジョウトに帰らなかったタクヤです。俺は今、シンジを探しています。目的はもちろんバトルです。

タクヤ「なんか、一人旅始めてからもう4日くらい経つけど、結構寂しいな……。コトネどうしてるかな……。って、なんでまっさきにコトネが出てくんのさ!？」

プテラ『フアアア?』

タクヤ「ああ、悪い。プテラは戻っててくれ」

俺はプテラをボールに戻す。

タクヤ「あれ?あの憎たらしいつり目に紫色した長めの髪って、向こうから歩いてくるのは信じじゃないか？」

なんと運の良いことに、前からシンジが歩いてきているのである。
よし、バトルだ。

タクヤ「なあ、君？」

シンジ「何ですか？」

おつ、年上には敬意を払う。案外礼儀正しいな。

タクヤ「ナナカマド博士から聞いたんだ。君がシンジ君だね？」
シンジ「はい、そうです。何か用ですか？」

タクヤ「ナナカマド博士、サトシ君と会ってから、君がなかなかできるトレーナーだと聞いてね。俺は君に興味をもった。俺とバトルして欲しいんだ」

シンジ「あいつと！？まあ、バトルならいいですが」

タクヤ「よっしゃ。じゃあ、向ここの広場でいいかな？」

シンジ「はい」

そう言うのと、近くの広場に来た。よし、いよいよバトルだ。

タクヤ「使用ポケモンは3体で道具の使用は禁止。入れ替え自由でいいね？」

シンジ「はい」

タクヤ「じゃあ、俺がお先に。掻き回せ、テッカニン！」

テッカニン「テッカ！」

俺はテッカニンを繰り出す。

シンジ「色違いだと！？ブーバー、バトルスタンバイ！」

ブーバー「ブーバー！」

タクヤ「先行はそっちに譲ってあげるよ」

シンジ「行くぞ、ブーバー。火炎放射！」

ブーバー「ブーバー！」

タクヤ「テッカニン、フルスピード行くぞ！高速移動からの影分身！」

テッカニン「テッカ！」

すごい数の分身が現れる。

シンジ「速い！？ブーバー、分身全てに火炎放射！」

ブーバー「ブーバー！ブー、バー！」

タクヤ「守る！それから剣の舞を3回！」
テツカニン『テツカ！』

分身全てが守るをし、剣の舞で大きく攻撃を上昇させる。そろそろいいだろう。

タクヤ「さあ、君の出番だよ！テツカニン、バトンタッチ！」
シンジ「バトンタッチ！？マズイ！ブーバー、火炎放射！」
タクヤ「もう遅い！」

こうして次に出てくるのは……

タクヤ「さあ、こいつが俺の切り札だ！ぶち壊せ、ボーマンダ！」
ボーマンダ『マアアアンドアアアアア！……！』

シンジ「ボー、マンダ……？戻れ、ブーバー！マニユーラ、バトルスタンバイ！」

マニユーラ『マニユ！』

タクヤ「そんなもんでボーマンダは止められん！ボーマンダ、ストーンエッジ！」

ボーマンダ『マンダ！』

シンジ「速い！？」

タクヤ「やれ！」

ボーマンダ『マンダ！』

マニユーラ『マニユウウウウ……！』

マニユーラは吹っ飛ばされた。地面に爪が刺さり、目を回している。

タクヤ「戦闘不能だ。さあ、次は何を出す？戻れ、ボーマンダ。押し流せ、スターミー！」

シンジ「タクヤさんの三体目はスターミー。それなら！エレブー、バトルスタンバイ！」

エレブー
「エレブウ!!!」

シンジ「雷パンチ！」

エレブー
「エレブー!!!」

タクヤ「かわせ」

サトシと戦ったときにも見せたあのスピードでよける。

シンジ「なっ、速い！エレブー、雷だ！」

エレブー ♪
エレブウ!! ♪

タクヤ「サイコネシスではね返せ！」

エレブー
エレブー――！！！！！！！！！！

タクヤ「ハイドロポンプでとどめ！」

見事、ハイドロポンプで戦闘不能となった。

タクヤ「シンジ君、君とバトルしていてもつまらない。君がバトルを楽しんでいないからだ！サトシ君の方がよっぽど楽しいバトルをしてくれたよ！戻れ、スターミー。ぶち壊せ、ボーマンダ！」

シンジ「バトルを楽しむ？そんな又ルイことを言っな！バトルは勝てばいい！ブーバー、バトルスタンバイ！」

ブーバー
 ↳ブーバー!
 ↳

タクヤ「ボーマンド、もう遠慮はいらねえ！全力、全壊！」

ボーマ^ダマ^ダア^アア^アア^アア^ア!!

ボーマンドは雄叫びを上げる。

シンジ「火炎放射！」

タクヤ「ハイドロポンプで火炎放射ごとをもってけ！」

ブーバー『ブーバアアア!』

ボーマンダ『マアアンダアアア!!!!!!!!!!!!!!!』

ブーバー『ブー!?ブーバアアアアアアア!』

タクヤ「俺の勝ちだよ、シンジ君」

シンジ「クソ!」

シンジは膝を付く。

タクヤ「君が負けた理由は簡単さ。でもこれは俺が教えていいことじゃない。君自身が気づくべきことだ。これに気づけないなら、この先ずつと君は俺に勝てないね。む?」

ポケギアが鳴る。電話だ。

タクヤ「もしもし?」

タケシ「もしもしタクヤさん?卵孵りました」

タクヤ「お、タケシ君。卵が孵ったのか」

タケシ「はい。俺のがヨーギラスです」

サトシ「タクヤさん、俺の卵はダンバルでした」

ヒカリ「タクヤさん、私のはミニリュウでした」

タクヤ「ヨーギラスにダンバルにミニリュウか。大事にしてくれよ」

サトシ「ヒカリ、タケシ」はい!」

そう言って電話が切れた。いやあ、三匹とも強くなるぞ。

シンジ「タクヤさん、またいつか俺と戦ってください。次こそは俺が勝ちます」

タクヤ「まってるよ。出番だプテラ!」

プテラ『ファアアア!!!』

タクヤ「それじゃ、俺はジヨウトに帰るよ。いくぞプテラ!」

プテラ『フアアア！』

シンジと別れ、俺はジョウトに戻る。帰ったらジム戦が待っていて、ジョウトリーグでコトネたちと会う約束をした。さて、次にかうときは、コトネは強くなってるだろうか。

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 30

開幕ジョウトリゲ!

タクヤの第一試合!!

(前書き)

いきなり飛びます

すいません

Episode 30 開幕ジョウトリーグ！ タクヤの第一試合！！

タクヤ「いよいよ始まったか、ジョウトリーグ！」

ここは、白銀山の麓にある、ジョウトリーグのスタジアム。俺はついに、ポケモンリーグに来たのだ。

俺はここに来るまで、いろいろなところを回った。コガネジムでアカネさんを下し、エンジュに向かい、舞子さんもねじ伏せ、マツバさんを倒した。アサギ、タンバ、チョウジ、フスベ、とプテラに乗ってジムを回った。ここに書くほどの面白いことは起こらなかったが……

タクヤ「まずは予選だ。総当たりになるみたいだけど、誰と当たるのかな……」

そして俺はBブロックとなった。相手はワカバタウンのシュウヤとチョウジタウンのカヨである。Bブロック第一試合がシュウヤvs俺、第二試合が俺vsカヨ、第三試合がカヨvsシュウヤとなる。

タクヤ「最初の相手はシュウヤ君とやらか。ま、情報を集めるか……」

PCで情報を検索する。シュウヤは何を使ってくるかわからない、いろいろなポケモンを持っているようだ。

タクヤ「おもしれえ、敵がなんだかわからなくても、本気で行くだけだ！」

俺は部屋に戻り、明日に備えて寝ようとした。だが、あることが

気になって眠れない。

タクヤ「コトネとカズナリはどうしてるかな……？ 一人旅してて、ずいぶん寂しく感じたし、早く会いてえな……」

結局なかなか寝付けず、寝たのは日付が変わって少しした時だった。

実況「さあ、始めましたジョウトリーグ、シロガネ大会！ 予選Bブロック第一試合は ワカバタウンのシュウヤ選手対タマムシシティのタクヤ選手です！」

シュウヤ「タクヤ君、よろしく頼む」
タクヤ「ああ」

実況「予選Bブロック第一試合、先行はシュウヤ選手です！」

審判「これより、ワカバタウンのシュウヤ選手対タマムシシティのタクヤ選手のバトルを行います！ 使用ポケモンは3体！ ポケモンの入れ替えは自由で、どちらかのポケモンが戦闘不能になったとき試合終了とします！ なお、道具の使用は認められません！ それでは、始め！」

シュウヤ「僕の一体目はこいつだ！ 行けっ、アリアドス！」

アリアドス『アリアードス！』

タクヤ「アリアドスか。俺はこいつで行くぜ！ 轟け咆哮、カイリユ

ー！！！」

カイリユー『カイリユー！！！！』

相手はアリアドス。俺はカイリユーを出す。

実況「シュウヤ選手はアリアドス、タクヤ選手はカイリユーだー！！！」

シュウヤ「カイリユー、厄介だ。アリアドス、糸を吐く！」

実況「アリアドス系を吐くで先制！」

タクヤ「無駄だね。カイリユー、好きにやれ」

実況「なーんとー！タクヤ選手指示を出さない！これで充分という余裕か！？」

こうもしている間に糸を博が迫る。

シュウヤ「随分となめてくれるね。やれ、アリアドス！」

アリアドス『アリアードス！』

カイリユー『リユーーーー！！！！』

カイリユーの周りに岩が集まり、それが飛んでいく。ストーンエツジだ。

アリアドス『アリアー！！！！あ、アリ……』

審判「アリアドス、戦闘不能！カイリユーの勝ち！」

実況「なんとー！タクヤ選手のカイリユー、指示を出さずともストーンエッジ一撃でアリアドスを沈めたー！！！！」

シュウヤ「君は強いな。だが、俺はポケモンたちを信じる！行けっ、オーダイル！」

オーダイル『オウダイル！！！！』

タクヤ「戻れ、カイリユー。次はお前だ。叩つ斬れ、ハッサム！」
ハッサム『ハッサム！』

実況「シュウヤ選手の二体目はオーダイル、タクヤ選手はカイリユーを戻し、ハッサムを繰り出したー！！！！」

二体目はオーダイル。だが、負ける気はしない！

シュウヤ「オーダイル、ハイドロポンプ！」

オーダイル『オーダイル！』

タクヤ「いくぜハッサム！高速移動で飛び上がれ！そこから影分身して剣の舞！」

ハッサム『ハッサム！』

実況「あーっと、ハッサム速ーいー！！すごいスピードで飛び上がり、ものすごい数の分身を出現させたー！ー！ー！ー！」

シュウヤ「やつと指示をだしたね。オーダイル、ドラゴンクロー！オーダイル『オーダイル！』」

タクヤ「無駄だ！虫喰い！」

ハッサム『ハッサム！ハッサ！ハッサ！』

虫喰いが見事に決まる。

実況「ハッサムの虫喰いがヒーーーーット！ー！オーダイル、これは厳しいぞ！」

審判「オーダイル、戦闘不能！ハッサムの勝ち！」

実況「さあ、シュウヤ選手はあと一体ともう後がない！対するタクヤ選手は、三体ともほぼ無傷だぞ！シュウヤ選手、巻き返しなるかー！？」

シュウヤ「俺はまだ、あきらめない！行けっ、ハガネール！」

ハガネール『ハアガネエエエイル！ー！ー！ー！』

タクヤ「うんうん。あきらめない精神、好きだぜ！戻れハッサム！」

実況「タクヤ選手はハッサムを戻します！一体何を出すのかあ！？」

タクヤ「最後は俺のパートナーだ！掻き回せ、テツカニン！」

実況「タクヤ選手の最後の一体は、テツカニン あーーっ

と、なんと色違いだアアアア！ー！ー！」

俺はテツカニンを出す。もう、勝ち確信した！

実況「ハガネールは鋼、地面タイプ、対するテツカニンは虫、飛行タイプ。相性的にはタクヤ選手不利だが、いったいどうするのかー

「……!?」

シュウヤ「なんだ、もう勝ち確信したとも言つのかい!? ハガネール、ストーンエッジ!」

ハガネール「ハガネエエエエエエイル!!!!!!」

実況「あー、ストーンエッジがテッカニンに迫る……! 全くよけようしないが大丈夫かああ!?」

そしてストーンエッジがあたった。

シュウヤ「ふん、よけようしないなんて、何を考えている? さあ、次のポケモンを出せ!」

タクヤ「なんだ? 君のハガネールを見てご覧よ」

ハガネール「ハ、ハガネエ……」

審判「は、ハガネール、戦闘不能! よって勝者、タマムシシティのタクヤ選手!」

ズウーン! という重い音を立ててハガネールは倒れた。

シュウヤ「なつ、確かにテッカニンにストーンエッジがあたったはず!?」

タクヤ「なんだ、テッカニンの残像でも打ち抜いたのかい? テッカニンならここにいるよ」

俺は肩を指す。そこにはテッカニンが飛んでいた。

実況「な、な……んと! タクヤ選手のテッカニン、残像の見えるほどのスピードでハガネールのストーンエッジを避けていた……! ！そしてあつという間にハガネールを倒した……! ！これで、Bブロック第一試合はタクヤ選手の勝利だ……! ！……!」

これで、第一試合は終了。次の試合は休憩を挟んで一時間後だ。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

Episode 31
タクヤVSカヨ！
予選リーグ第二試合！！

実況「さあ、予選リーグBブロック、第二試合はタマムシシティのタクヤ選手対チヨウジタウンのカヨ選手です！フィールドは水のフールドで、先行はタクヤ選手！果たしてどのような結果になるのか！」

審判「これより、タマムシシティのタクヤ選手対チヨウジタウンの
カヨ選手のバトルを行います！入れ替えは自由で使用するポケモンは三
体！どちらかのポケモンがすべて失われたときに試合終了とします
！なお、道具の使用は認められません！それでは、始め！」

タクヤ「まずは前からだ！ 挟じ伏せる、ギャラドス！」

ギャラドス「ギャラアアアアアアアア！！！！！」

カヨ「一体目はギャラドスですか……。こっちは、出てきなさいキングドラ！」

キングドラ『ドラアアアア！！！』

俺はギャラドス、カヨはキングドラだ。

実況「タクヤ選手ギヤラドス、カヨ選手キングドラ。これはプールのフィールドだからかあ!？」

タクヤ「ふん、俺はこんなフィールドに付き合うつもりはない！ギヤラドス、飛び跳ねる！」

ギャラドス「ギャラアア……!!!!」

実況「あーっつと、タクヤ選手のギャラドス、高く飛び上がったあ！」

カヨ「空中では回避しづらいでしょう？キングドラ、竜の波動！」

キングドラ「ドラアアア！」

キングドラは空中のギャラドスを狙い打つ。だが、俺にそんなも

の通用しない！

タクヤ「ギャラドス、縦回転して尻尾で打ち返せ！」

ギャラドス『ギャラアア！』

カヨ「なっ、かわしてキングドラ！」

そしてなんとかかわすキングドラ。

実況「なーんと、ギャラドス打ち返したあ！そしてギャラドス水面に迫る！」

タクヤ「そのまま回転の勢いを使え！水面に向かってアクアテール！」

ギャラドス『ギャラアアア！！！！！！！！！！』

カヨ「キャツ！」

回転の勢い、体重、重力加速度、遠心力。すべてが重なりプールの水はほとんど溢れてしまった。

実況「なーんと、ギャラドスの一撃で水がほとんど無くなったあ！！！」

カヨ「無直茶するわね……。キングドラ？」

キングドラ『ドラア……』

審判「キングドラ、戦闘不能！ギャラドスの勝ち！」

実況「なんと、さっきの一撃で水に伝わった衝撃と、擬似的な津波の影響でキングドラダウン！！！！！！！！！！」

カヨ「戻って。キングドラ、ありがとう。次はあなたよ！出てきて、カビゴン！」

カビゴン『カアビィ！』

カビゴンを繰り出すカヨ。だったら……

タクヤ「戻れ、ギャラドス！ 噛み砕け、バンギラス！」

バンギラス ♪ バアアア
ンギラアアス!!!!!!!!!! ♪

実況「カヨ選手はカビゴン、タクヤ選手はバンギラスだあ。これはパワー勝負になるかあ!？」

カヨ「カビゴン、捨て身タックル！」

カビゴン 「カビイイイイイイ！！！！！」

タクヤ「受け止める！」

力ヨ「なっ！？」

バンギラスは楽々受け止める。

タクヤ「上空へ投げ捨ててお前もジャンプだ！」

バンギラス「バアアアアン!!!!!!」

カビゴン ♪ カビッ、カビッカビッ！ ♪

タクヤ「そのまま逆鱗！」

バンギラス^ロバ
アアアアアアアアアアアア
ン!!!!!!!!

!

カビゴン 『カビイイイイイ！……！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

カヨ「カビゴーン!!!!!!!!」

カビゴンは地面にぶつかつた。そこには大きなクレーターができ、中心には目を回すカビゴンがいる。

審判「カビゴン、戦闘不能！バンギラスの勝ち！」

実況「なんと、タクヤ選手のバンギラス、あのカビゴンを持ち上げて投げるといふ荒業を見せたあ！どこまで力が強いのかあ！？」

力ヨ「強いなあ、タクヤさん。これが私の最後の一体！出てきて、

エレキブル！」

エレキブル ♪ エレツキブル
r r r r r ! ! !
♫

実況「カヨ選手三体目のポケモンは、エレキブルだア……！」

エレキブルか。シンジを思い出す……

タクヤ「一気に決める！地震！」

バンギラス『バアアアンギラアス……！！！！』

実況「おおっと、これはすごい地震だああ！カヨ選手万事休すか！？」

カヨ「エレキブル、尻尾で飛んで雷！」

エレキブル『レッキブルrrrr！エレッキブルrrrr！！！！』

実況「あーっと、エレキブル跳んだあああ……！！！」

雷は難なく避けるが、あんなわけ方をするとは……

タクヤ「岩雪崩！」

バンギラス『バアアアン！』

エレキブル『エレキブルrrrrrr！！！！！！』

カヨ「エレキブル！？」

審判「エレキブル、戦闘不能！バンギラスの勝ち！よって勝者、タムシシテイのタクヤ選手！」

タクヤ「よしっ、これで決勝リーグ決定！サンキューバンギラス！バンギラス『バアン！』」

俺は決勝リーグ進出を決めた。そして、俺は目の前の少女を見る。

タクヤ「カヨちゃん」

カヨ「はっ、はい何ですか？」

タクヤ「俺は君の分まで決勝リーグ頑張るよ。ありがとう」

そう言ってニコツ、と微笑み手を差し出す。

カヨ「はっ、はい！頑張ってください！！／／／」
タクヤ「おう！」

なんか顔赤かったが、まさかフラグ？いやナイナイ（――）

カヨ「……タクヤさん、カッコイイ……」

タクヤ「今のは聞こえなかったことにしておこう……」

なんで俺なんかがいいんだろう……？？？

タクヤ「よし、決勝リーグも頑張るぜえ！！」

そのとき、ポケギアが鳴った。

タクヤ「もしもし？」

タケシ「タクヤさん、サトシです」

タクヤ「おお、サトシ君！どうしたんだ？」

サトシ「俺、シンオウリーグで二回戦突破しました！貰ったダンバルももうメタグロスになって活躍してくれてますよ！ほら」

メタグロス「メタグロオ！」

タクヤ「おお、よく育ってるよ。大事にしてくれて何よりだ。俺は今、決勝リーグ進出が決まったよ。絶対優勝してやるぜ！」

サトシ「はい、頑張ってください。ちよっ、止めるメタグロス！」

メタグロス「メタグロオ！」

タクヤ「ははっ、ずいぶん懐いているようだね。じゃあ、お互い頑張ろう。それじゃ」

電話を切る。そうか、メタグロスに進化したか。

タクヤ「それじゃ、決勝リーグ、頑張るぜえ!!!」

To Be Continued...

Episode 32 決勝リーグ二回戦！！

タクヤ「メタグロス、バレットパンチ！」

メタグロス『メエタ、グロツ！』

審判「ピジョット、戦闘不能！メタグロスの勝ち！よって勝者、タムシシティのタクヤ選手！」

実況「決まったああ！決勝リーグ二回戦に進むのはあ、タクヤ選手だあああ！！」

タクヤ「ふう……」

俺は、ジョウトリーグ・シロガネ大会に出場し、たった今決勝リーグ一回戦を勝ち抜いたところだ。

タクヤ「次の相手はつと……」

俺は次の相手を調べる。次の相手は、カントーはニビシティのコンミとやらだった。

コンミ「どうやら、次の相手は貴方のようですね」

タクヤ「おや？君がコンミちゃんかい？」

コンミ「そうですわ」

タクヤ「まあ、お互い頑張ろうぜ」

コンミ「はい」

この溢れ出る気品というか、お淑やかな感じは、いいとこのお嬢様のようなだ。

そしてPCCルーム。コンミの使うポケモンを調べてみた。

タクヤ「リーフィアにロズレイド、キレイハナといった、草タイプ

が主流か……」

やっぱ、お嬢様って草タイプが好きな人が多いのかな？

タクヤ「まあ、バクフーンは入れるとして、あと二体はエレキブルにガブリアスで行くか」

あすのパーティを決めた俺は部屋に戻り、あすの試合に備えて早く眠りについた。

実況「さあ、決勝リーグ二回戦第一試合！この試合に勝ち、準決勝進出を決めるのは、タマムシシティのタクヤ選手か。はたまたニビシティのコノミ選手か。フィールドは草のフィールドです。なお、タクヤ選手はここまで一体として戦闘不能になっていないという強者です！」

審判「これより、タマムシシティのタクヤ選手対ニビシティのコノミ選手のバトルを行います！入れ替えは自由で使用ポケモンは三体！どちらかのポケモンがすべて失われたときに試合終了とします！なお、道具の使用は認められません！先行はコノミ選手！それでは、始め！」

いよいよ二回戦が始まる。

コノミ「行きますわよ、マスキッパ！」

マスキッパ『キッパアー!!』

タクヤ「マスキッパか……。読み通り草タイプ！燃やすぞ、バクフーン！」

バクフーン『バクツ!!』

実況「コノミ選手はマスキッパ、タクヤ選手はバクフーン。相性的にはタクヤ選手が有利だがコノミ選手どうする!?」

コノミ「マスキッパ、パワーウィップ！」
マスキッパ『キイイッパアアアア！！！』

マスキッパが飛び上がり、触手を飛ばす。だが、飛び上がってく
れたことでこの技が決めやすい。

タクヤ「一気に決めるぞ、噴火！」

バクフーン『バアアアアア、クウウウウウウウウウウ！！』

マスキッパ『キッパアアア！！！！』

コノミ「マスキッパ！」

審判「マスキッパ、戦闘不能！バクフーンの勝ち！」

実況「やはりタクヤ選手強い！予選リーグDブロックでは無類の強
さを誇ったコノミ選手のマスキッパを一撃！なんと一撃で葬り去っ
たああああ！」

葬り去ったって、死んでないから。戦闘不能になったただけだから。

コノミ「マスキッパ、ありがとうございます。炎タイプ対策はでき
ていますのよ！行ってください、マリルリ！」

マリルリ『リルウ！』

実況「あーっと、ここでコノミ選手、初めて草タイプ以外のポケモ
ンを使ったあ！」

タクヤ「いくぞ、バクフーン！日本晴れ！」

バクフーン『バアク！』

コノミ「マリルリ、アクアテール！」

マリルリ『リイルウ！』

日本晴れにより晴れ渡る青空。だがアクアテールを喰らい、特性
の力持ちによって大ダメージを受けたバクフーンは地に倒れ付した。

実況「あーっつと、タクヤ選手、ここではじめての戦闘不能かあ！？」

タクヤ「いや、まだ終わっていない！いくぞバクフーン！」

バクフーン『バアアアアア、クウウウウウウウウウ！
！！！！！！！！』

凄まじい熱気が燃え上がる。特性、猛火の発動だ。

コノミ「これは……猛火？」

実況「バクフーン、ここで特性猛火の発動だああああ！！！！」
タクヤ「まずはマリルリを片付けろ！ソーラービーム！」

バクフーン『バクウウウウウウウウウウウウウ！

！！！！！！』

マリルリ『ルリヤアアアアア！』

コノミ「マリルリ？」

審判「マリルリ、戦闘不能！バクフーンの勝ち！」

実況「凄まじいソーラービームで、マリルリダウン！！！」

コノミ「ありがとうございました、マリルリ。あなたはよく頑張りました。頼みますわよ、ライチュウ！」

ライチュウ『ライライ！』

コノミはライチュウを出す。

実況「コノミ選手最後の一体はライチュウだあ！猛火の発動しているバクフーンにどう対応する！？」

コノミ「ライチュウ、電光石火！」

ライチュウ『ライツ、ライツ！』

実況「速い！これはバクフーンピンチ！」

タクヤ「穴を掘る！」

バクフーン『バクツ!』

バクフーンは穴を掘って地中に逃げた。

実況「バクフーン、間一髪地中へ逃げました!さてバクフーンどうする!?!」

タクヤ「そのままフレアドライブ!」

コノミ「なっ!?!」

ライチュウ『ライツ!?!』

バクフーン『バアアアア、クウウウウウ!?!?!!』

地中から、マグマのように炎が吹き出す。ライチュウはそれに吹き飛ばされたが、辛うじて立っていた。

実況「なんと、地中から起こしたフレアドライブによって、フィールドの草が全て燃え上がり、ライチュウは吹き飛ばされた!辛うじて立っているが、もう限界に近いようです!」

コノミ「ライチュウ、頑張つて下さい!10万ボルト!」

タクヤ「オーバーヒート!」

ライチュウ『ラアアアイチュウウウ!?!!』

バクフーン『バアアアアア、クウウウウウウウウウ!?!?!?!!』

オーバーヒートは10万ボルトを飲み込んで、ライチュウに襲いかかった。ライチュウは戦闘不能だ。

審判「ライチュウ、戦闘不能!バクフーンの勝ち!よって勝者、タムシシテイのタクヤ選手!」

実況「やっぱりタクヤ選手強かった!バクフーンがフラフラになりながらも最後まで戦い抜いた!決勝リーグ二回戦を制し、準決勝ま

で駒を進めたのは、タクヤ選手だあああ！そして次からは、6対6のフルバトルだあああ！！！！」

タクヤ「コノミちゃん、楽しかったよ。俺のバクフーン相手にあそこまで戦えたことはすごいことだ」

コノミ「はい。予選リーグと一回戦、すべて戦闘不能なしで勝ち進んできただけありましたわ。わたくしもたのしかったですわ」

タクヤ「ああ！お前の分も俺がこの先頑張ってやるぜ！」

コノミ「はい、お願いします！」

さて、次の相手は誰になるやら。俺は対戦表を見に行く。そこにあったのは……

タクヤ「コトネ！？ついに強くなったあいつと戦えるのか！」

コノミを下し、俺は準決勝まで駒を進めた。次の準決勝の相手はかつての旅の仲間、コトネだ。コトネと戦えるのは本当に楽しみだ！

To Be Continued . . .

Episode 33 ついに決着！ タクヤvsコトネ！！

タクヤ「ふう、明日はコトネとバトルか……」

俺は選手村のすぐそばにある湖に来ていた。湖ではコイキングが跳ね、様々なポケモンが泳いでいた。俺はそれをボーッと見つめ、明日のことを考えている。

タクヤ「どれくらい強くなったか、楽しみだな……」

俺はPCルームに向かう。コトネの手持ちを調べるためだ。

タクヤ「へえ、あのチコリータはメガニウムになってるみたいだな。マタドガスやキングラーも要注意。だが、マリルが進化していないとは……。新しく追加されているポケモンは、カイロスが今までの試合に出されているか……。さて、卵は何が生まれたかな？」

俺はこの辺で切り上げ、部屋に戻って眠りについた。

実況「さあ、ついに始まりました決勝リーグ準決勝！第一試合は、タムシシテイのタクヤ選手対ワカバタウンのコトネ選手だあ！」

タクヤ「ついにここまで来たか、コトネ！」

コトネ「ええ、久しぶりって事ね。タクヤ、私は強くなってるよ！」
タクヤ「ああ、承知の上だ！」

実況「ここまで戦闘不能無しのタクヤ選手の相手をするのは、これまた今まで戦闘不能が無い、コトネ選手！どちらも凄腕トレーナーのようだあ！この試合に勝ち、決勝に進出するのはどっちだあ！」

俺とコトネは目を合わせる。お互い、ここまで真剣にバトルする

のは初めてだ。

タクヤ「俺は、本気で行かせてもらうぞ！」

コトネ「こっちもよ！」

実況「さあ、準決勝は岩のフィールドだ！そしていよいよバトル開始だああああー！」

審判「これより、タマムシシティのタクヤ選手対ワカバタウンのコトネ選手のバトルを始めます！ポケモンの入れ替えは自由で使用ポケモンはそれぞれ6体！どちらかが先に戦闘不能にした場合、試合終了とします！なお、道具の使用は認められません！先行はコトネ選手です！それでは、始め！」

俺の一体目。それは、こいつだ！

タクヤ「呪え、ゲンガー！」

ゲンガー「ガアー！！！」

実況「タクヤ選手一体目のポケモンはあ、ゲンガーだああー！！！」

コトネ「ゲンガーね。だったらこっちは、出番よキリンリキ！」

キリンリキ「リキイ！」

コトネはキリンリキだ。タイプのにはこっちが不利だが、なめてもらっては困る。

コトネ「キリンリキ、サイコキネシス！」

キリンリキ「リキイ！」

タクヤ「ゲンガー、ジャンプして高速回転！」

ゲンガー「ガアアアアアー！！！！！」

実況「おっと、タクヤ選手のゲンガー、すごいスピードで回転を始めました！一体何をするのか！？」

タクヤ「そのまま悪の波動！」

コトネ「やった、倒した！このままいくよマニニューラ！マニニューラ！？」

いきなりマニニューラは倒れ付した。そう、俺が辻斬りにあたる直前に出したある指示によって。

審判「ゲンガー、マニニューラ、両者戦闘不能！」

実況「あぁと、これはどうしたことでしょう！？ゲンガーだけでなく、マニニューラも戦闘不能になっています！」

タクヤ「道連れだよ。ゲンガー相手なら警戒しておくべきだよ」

コトネ「ゲンガーを倒しただけでも儲けもんよ、ありがとうマニニューラ。道連れか……。出番よキングラー！」

キングラー『ゴキゴキ！』

タクヤ「よくやったゲンガー。爆ぜろ、フォレトス！」

フォレトス『フォオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！』

コトネはキングラー。俺はフォレトスを出す。

実況「コトネ選手三体目のポケモンはキングラーだぁぁ！対するタクヤ選手、フォレトスを出したぁぁぁ！！！」

タクヤ「いくぜフォレトス、撒菱！」

フォレトス『フォオオオオオオ！』

フォレトスは飛び上がり、回転しながら撒菱を撒く。

コトネ「キングラー、クラブハンマー！」

キングラー『ゴキゴキゴキゴキゴキゴキゴキ！』

実況「あーっと、キングラー巨体を疾駆させながらフォレトスに近づく！」

タクヤ「もう一回行くぜ！撒菱！」

フォレトス『フォオオオオオ！』

クラブハンマーを華麗に避け、もう一度撒菱を撒く。

実況「フォレトス華麗にかわしたー！そしてもう一度撒菱を撒き、さらに強力にしていーくー！！」

コトネ「高速移動！」

タクヤ「もひとつおまけに撒菱！」

蟹が速くなるがお構いなしに役目を果たしてもらっ。

実況「キングラー速い！これは本当にキングラーなのでしょうが！」
タクヤ「今度は毒菱だ！」

コトネ「剣の舞！」

フォレトス『フォオオオ！』

キングラー『ゴキゴキゴキゴキッ！』

いくら舞っても無駄なんだけどね。

タクヤ「フォレトス、もう一回毒菱！」

フォレトス『フォオオオ！』

コトネ「キングラー、マッドショット！」

キングラー『ゴキッ！』

キングラーはマッドショットを放つ。だがフォレトスが毒菱を撒いているときに回転しているので弾かれた。

タクヤ「フォレトス、置土産にステルスロック！」

フォレトス『フォオオオオオ！』

実況「フォレトスの撒菱、毒菱、ステルスロックによって、コトネ

ち砕け、ドサイドン！」

ドサイドン『ドッサアアアアイドン！』

俺はドサイドンを出す。

実況「タクヤ選手三体目はドサイドンだあああ！タイプ相性ではものすごく不利だが大丈夫かあああ！？」

コトネ「メガニウム、エナジーボール！」

メガニウム『メエガニウム！』

ドサイドン『ドッサアアアア！』

ドサイドンにエナジーボールがヒット。普通に考えれば危ないだろう。

タクヤ「ドサイドン、全力、全壊！岩石砲！」

ドサイドン『ドッサイドオオオオオオオオオ！……！』

メガニウム『メガアアアアアアアア！……！』

コトネ「メガニウム……！」

実況「なんと、エナジーボールを受けきったドサイドンが、岩石砲でメガニウムを吹っ飛ばしたあああ……！」

メガニウム『メ、ガアアア、ニイイウム……！』

メガニウムは苦しそうだ。だが、その目にいきなり光が灯る。

メガニウム『メガニイイイイイイイイイイイイイイイイウム！

……！……！……！……！……！……！』

実況「メガニウム、特性、深緑の発動だあああああああ……！

……！……！……！……！……！……！」

コトネ「メガニウム、ソーラービーム！……！……！……！……！」

メガニウム『メガアアアアアアアア……！』

ドサイドン、ド、ドサ……」

実況「ドサイドン、岩石砲の反動で動けない！」

コトネ「チャージ、完了！発射！！！！！」

メガニウム ☞ **メガニイイイイイイイイイイイイイイイイウム!**

!!!

ドサイドン、『ドッサアアアアアアアアアアアアアアアア
！！！！！！！！』

タクヤ「ドサイドオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!」

!

ドサイドン「ド、ドサ……イ、ドオン……」

ついにドサイドンが倒れる。

審判「ドサイドン、戦闘不能！メガニウムの勝ち！」

実況「ドサイドンダウン！」

タクヤ「ありがとうドサイドン。まさかドサイドンを倒すなんてね……。次はこいつだ！切り刻め、エルレイド！」

エルレイド「エルレイ……！」

実況「タクヤ選手四体目は、エルレイドだあああ！」

コトネ「もう一度だけ頑張って！メガニウム、エナジーボール！」

メガニウム[㊦]メガアアアアアアアア、ニイイイイウム!!![㊧]

タクヤ「エルレイド、かわして冷凍パンチ！」

エルレイド「レイツ、レイツ！エルレイ！」

エルレイドは素早い動きでかわし、メガニウムの残り少ない体力を一気に奪った。

コトネ「メガニウム！！」

審判「メガニウム、戦闘不能！エルレイドの勝ち！」

実況「エルレイド速……い……！素早い動きでメガニウムを吹

実況「エルレイド倒れたああ！これでお互に残すところ二体だああ！！！！」

まさか、ここまでできるとは。成長したな、コトネ。

タクヤ「さすがコトネ。強くなつたな」

コトネ「まあ、そういう事ね！」

タクヤ「俺の次のポケモンはこいつだ！殴り潰せ、メタグロス！」

メタグロス『メタグロオオオ！！』

実況「タクヤ選手五体目のポケモンは、メタグロスだああ！！一回戦はメタグロス一身体で勝ち抜いていたあ！コトネ選手、どう対応する！？」

コトネ「エレキブル、地震！」

エレキブル『エレッキブルrrrrrrr！！』

エレキブルの地震がメタグロスにヒット。苦しがるが、なんとか耐えた。

タクヤ「メタグロス、地震のお返し……。いや、必要ない」

エレキブル『エ、エレッキブル……』

審判「エレキブル、戦闘不能！メタグロスの勝ち！」

実況「ここにきて猛毒でダウン！！」

コトネ「無理させてごめんね、エレキブル。ゆっくり休んで。私は、最後の一体になっても諦めない！出番よ、カイロス！」

カイロス『カイロスッ！カ、カイッ！』

ステルスロックのダメージを受けるカイロス。だが、あれはなんなんだ！？

実況「コトネ選手最後の一体は、カイロスだああ！それにしても

実況「タクヤ選手、最後の一体は、ガブリアスだああ！しかも、通常の個体よりも大きく、さらに色違いだああああああ！！！！！！」

ガブリアスの通常の大きさは1.9m。だがこいつは、フカマルのときから大きかった。ガブリアスになった今では、軽く3.0mはある。

タクヤ「こいつが俺の切り札だ。そっちが変異個体なら、こっちも変異個体で行くのみだ！」

コトネ「面白いって事ね！カイロス、気合入れて！」
カイロス「カアイロス！！！！」

おもしれえ。最後のバトルと行きますか！

コトネ「カイロス、シザークロス！」
タクヤ「ガブリアス、ドラゴンクロー！」
カイロス「カアイ、ロオオオオス！」
ガブリアス「ガアアアアアアブッ！」

その一撃でお互いに吹き飛ばされる。さっきのメタグロスでも思ってたが、このカイロスどれだけ力が強いんだろうか。

コトネ「ストーンエッジ！」
カイロス「カアイロオオオオオオオオオオオオオス！」
タクヤ「かわしてストーンエッジ！」
ガブリアス「ガアアアブ！」

どうしてだろう。ここまで楽しいポケモンバトルは初めてだ。もちろんサトシとのバトルは楽しかった。だが、これはそれ以上だ。

コトネ「カイロス、あなたはよく頑張ったわ。タクヤ！」
タクヤ「コトネ！」

コトネ「楽しかった、ありがとう！絶対、優勝って事ね！」
タクヤ「おう！ああ、ちょっと外でまっけてくれるか？」
コトネ「ん？いいけど」

準決勝、コトネとの激闘を制し、俺は決勝へと進む。俺は、あることを伝えることを決意した。

そして、スタジアム外の、ちょっと人通りの少ないところで……

タクヤ「コトネ！」

コトネ「タクヤ。で、どうかした？」

タクヤ「あのさ、コトネ。俺、シンオウを一人で旅してて思ったんだ。一人は寂しいって」

コトネ「うん」

タクヤ「でもな、一番寂しかったのは、いつも傍にいたお前がいなかったことなんだ」

コトネ「えっ！？」

コトネは驚く。そして、俺は決心し、一息ついて告げた。

タクヤ「俺はお前が好きだ、コトネ！」

コトネ「へっ、なに！？私が好き！？／＼」

タクヤ「ああ。これは嘘偽りない、本当のことだ」

コトネ「そうなんだ……。嬉しいよ。だって、私もタクヤが好きだから」

タクヤ「それって！？／＼」

コトネ「うん。カズナリと二人でいても、どこか物足りなかったって事ね」

タクヤ「そうか。嬉しいよ」

そう言って、俺はコトネを抱きしめる。コトネも俺の背中に手を回してくれた。心音がお互いの胸から響いてくる。俺も、コトネも、早鐘のように脈打っていた。

タクヤ「俺は、絶対に優勝してみせる！お前のためにも」
コトネ「うん。頑張つてね。私は応援しているって事ね」

そして俺たちは、静かに唇を合わせた。コトネのためにも、絶対に優勝してみせると胸に誓って。

コトネ「／／／」

タクヤ「じゃ、じゃあ行くか／／／」

コトネ「そ、そうね／／／」

カズナリ「コトネー！って、タクヤさん！？」

タクヤ「カズナリ！久しぶりだな！」

カズナリ「決勝進出おめでとうございます！頑張ってください！」

タクヤ「ああ！さ、行こうかコトネ」

コトネ「うん！」

俺たちは、再び三人で歩き出す。あすは決勝戦。絶対に優勝してやる！

T o B e C o n t i n u e d . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2786z/>

人生オワタ＼(^o^)／からポケモンの世界に転生した

2011年12月25日16時49分発行